幼兒心理研究

精神分析

★ 第5卷・第6號 ★ 昭和12年11月・12月 ★

主要項目

詳細目次は卷頭に

T・I・P・A・ VERLAG

東京精神分析學研究所出版部

大槻憲二著 最新刊

（精神分析學樹立への實踐的方法論集）

現代日本の社會分析

四六判四百頁索引附
クロース上製本函入
定價貳圓參拾錢
送料十四錢

第一篇 我國の文明と精神分析學の過去、現在、未來。生理學と分析學。實驗心理學批判。現代唯物論と社會分析。

第二篇 官學私學、民間學の比較。文科大學の植民地的色彩、文部大臣の教育的識見。

第三篇 裁判者及び被裁判者の心理學。犯罪原因複元說の長所短所。法醫學界への言葉。泉二博士の刑法改正。禁酒運動家の論理と心理。

第四篇 マルクス主義の病理性。フロイドのマルクス批判。ファシズムの倫理。わが國民性特質分析。マルクス主義の墮落願望。『神風』の成功と國民感情。勞働快樂說に依る經濟純理の動搖。

第五篇 文壇の社會意識。社會無意識とナンセンス文學。文藝の大衆性と幼兒性。科學と哲學との區別。モラルとヒウマニズム。分析と人間の精力經濟。

第六篇 少女貞操擁護說批判。不良外人問題。日大生殺し事件。現代名流婦人の識見。私生兒の問題。萬引の道德。身の上相談の現代的意義。…その他

本書の六大特色

一、「精神分析學宣言」を以て「共產黨宣言」を爆擊せること。
二、階級主義と民族主義との相反對立を止揚せること。
三、學問と學者とが社會的に去勢せらる、心理過程を明かにせること。
四、文藝の社會的意義に就いての傳統的迷信を打破し、その無意識社會性を闡明せること。
五、婦人の社會的解放の心理的基礎を確立せること。
六、新しき社會生活法を具體的に說けること。

同じ著者による姉妹篇

精神分析 **新しき立身道**

四六判三五〇頁
定價壹圓參拾錢
送料十四錢

東京市日本橋　**春陽堂書店**　振替東京一六一七

幼兒心理研究號・内容目次

『精神分析』第五卷・第六號

合本單册『精神分析』（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一卷・上

創刊號（昭和八年　五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」＊
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

第一卷・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號（第一）＊
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

第二卷・上

第一號（同九年　一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
金二圓五十錢（送料共）

第二卷・下

第五號（同　五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」
金二圓五十錢（送料共）

第三卷

第一號（同十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
金三圓（送料十五錢）

第四卷

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と敎育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金三圓（送料十五錢）

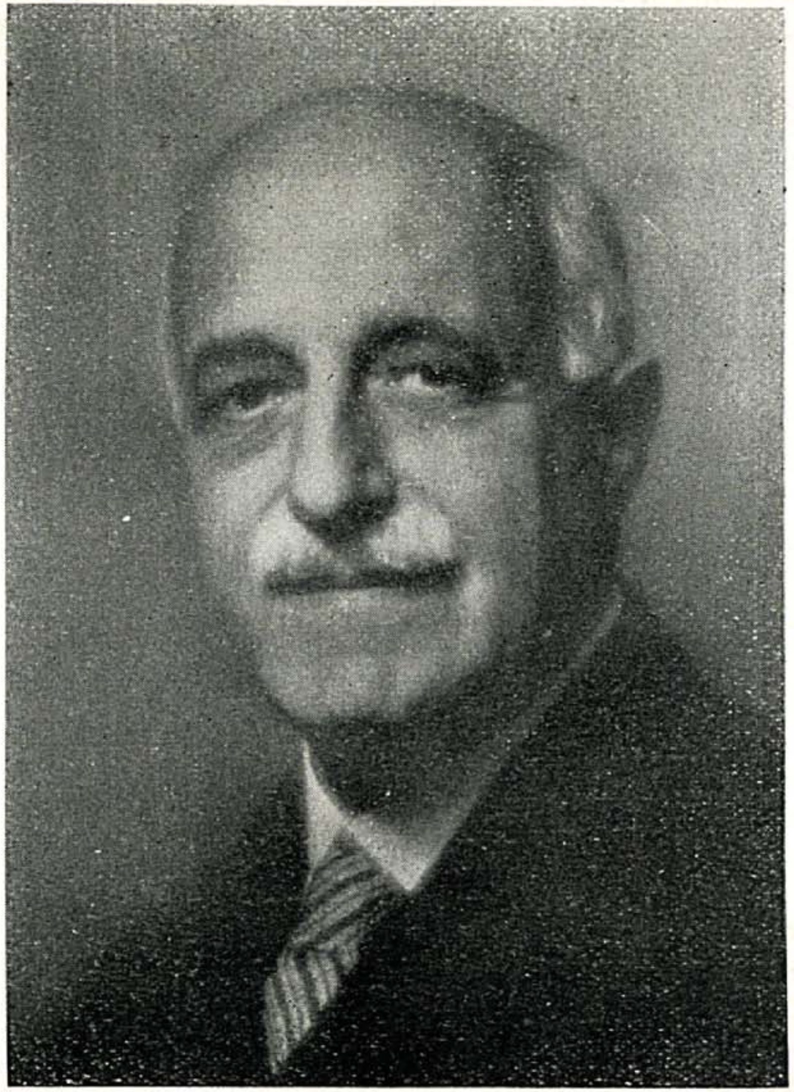
第五卷

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金三圓（送料十五錢）

＊印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢



Prof. Dr. Sigm. Freud. フロイド教授近影（彙報欄參照）



Dr. Eduard Hitschman



Dr. Edmund Bergler

——ヒッチマン博士とベルグラー博士（高水氏譯稿及彙報欄參照）——

『精神分析』第五卷 第六號 卷頭頁

主要術語略解表

▼アプレアギーレン、再經驗による無意識感情の發散解消　**▼アムビヴレンツ**、相反併存性、愛憎併存性 **▼去勢コムプレクス** 女にも本來あつたと願望的に空想せられたる男根が何人かに依つて切斷せられて失はれたとの妄想に依る劣等感、又は失ふべしとの不安、又はこの不安と錯綜せられたる不安（例へば失明不安、肢體切斷不安）**▼コムプレクス**（錯綜、複合）早期又は幼兒期に經驗した深き印象が無意識定着（＊）となり、後年に於ける類似の經驗が早期のものと錯綜（複合）せられ、一方に所屬する感情が他方に轉位（＊）せらるゝを云ふ。例へばエディポス・コムプレクス（＊）の如き。屢々定着と殆ど同樣の意義に用ゐられてゐる。**▼部分本能**、性的本能の部分的構成要素をなすところの、身體各部の性帶域に分布する本能にしてやがて性器本能の成熟につれてこれに統裁せらる。**▼凝縮**、二つ以上の無意識觀念が錯綜（コムプレクス）せられて一つの形にて意識せらるゝ過程。**▼逆轉嫁**、相手からの轉嫁（＊）に對して此方からも轉嫁し返すこと。魚心あれば水心。これは分析者の患者に對してなすべからざること。**▼死の本能**、有機物の無機物への還元の傾向、安定への傾向。但しこれを裏から見れば生の本能と同一のもの。**▼生の本能**、與へられたる一定のコースを辿りて無事に死のゴールに至らむとする自己保存本能。**▼防禦**、本能の內からの慾求に對して自我（意識）が現實との中間に立ち本能抑壓のための心理構成。**▼轉位**、元來一つの無意識觀念に所屬したりし感情が、その觀念と錯綜せられたる別觀念に移行すること。坊主憎けりや袈裟まで憎い。**▼歪み**、抑壓（＊）に依り無意識觀念が變裝して意識に登場すること。**▼エス**、非人稱的な超個人的な自我內容、集合無意識。又は單に無意識一般。**▼定着**、早期に強く經驗したることが心的外傷となりて殘り、後年の類似經驗をそれ自身と錯綜せしむること。**▼リビドー**、愛慾。量的に變化し且つ測り得るものと想定せられたる情愛の力。但しその性愛は性器的、生殖的のものには限らず、もつと廣義のもの。**▼ナルチスムス**、自己愛、獨尊觀念、自惚**▼涅槃原則**、死の本能に基く生活原則。**▼エディポス・コムプレクス**、狹義にては幼兒の異性親を慕ひ、同性親を排ける傾向。廣義にては、幼兒の兩親から受ける影響の全體、及びその後年に殘れるもの。**▼快不快原則**，無意識の本質が快樂追及不快逃避的なること。**▼理窟付け**、無意識動機からの行動を意識的動機から說明することにより眞動機を無意識的に掩ふ作用。**▼抑壓**、無意識願望がその意識化を妨げられる無意識心理過程。檢閱の作用とせらる。**▼超自我**、良心ではあるが、倫理的の概念ではなく、價値觀を離れ半ば病的とせらる。**▼タブー**、禁忌、忌まはしく同時に尊敬せられるもの。**▼轉嫁**、リビドー（＊）を相手に交付すること。**▼轉嫁神經症**、惚込み型の神經症。自惚型（ナルチスムス）の神經症の反對。**▼現實原則**、意識界の原則。快不快原則の無意識界支配に對立す。**▼ペニスナイド**、男性器羨望、男性への反抗

幼兒に於ける現實感の發展段階（フェレンチー）

大槻憲二
伊藤龍朗 共譯

譯者小序――この論文はフロイドの高弟にしてハンガリの分析者サンドル・フェレンチーが傑作の一つとして分析學界に古典的位置を有する名論である。フェレンチーの論文にして嘗て本誌に紹介したものは、第二卷第七號及び第八號、第五卷第四號にある。またその傳記及び文獻表は第一卷第四號に、その肖像は第一卷第七號に掲げてある。同號にはまたフロイドがフェレンチーへの追悼の辭が譯載せられてある。彼は實に一九三三年（昭和八年）五月二十二日、六十歳にて長逝した。分析學界に生物分析の新分野を開拓した天才的學者であつた。

個人に於ける精神活動形態の發展は、フロイドが示したように、本來優勢なる快不快原則の動向如何に存する。而して、個人の精神活動に特有なる抑壓機制は現實への適應によつて、卽ち判斷に基く現實吟味によつて生ずる。このようにして、原始的存在（動物、未開人、子供たち）の精神活動や、原始的精神狀態（夢、神經症、空想）に示される第一次的精神段階からして、常態人の覺醒時の第二次段階は生じ來るのである。

生れたばかりの赤ん坊はその發展の初めに於て、たゞ頑强に願望する（卽ち想像する）だけで、滿足の狀態に達しようとする。それに依つて彼等赤ん坊は滿足を與へざる現實をたゞ端的に默殺し（抑壓し）、反對に、求めて而も未

だ得られてゐない滿足を既に現前してゐるものとして想像する。夫故に、赤ん坊はそのあらゆる慾求を積極的及び消極的な幻覺に飜譯し、その蔭にそれ等の慾求を隱すに大して骨を折らないのである。「幻覺の方法で滿足しようとする此の試みを拋棄せしめたのは、豫期した滿足の現はれないこと、卽ち失望であつた。その代りに心理的裝置は外界の實狀がどうなつてゐるかを自己で見きはめることに定め、現實を變へようと骨折らねばならなくなつた。斯くして精神活動の新しい原理が始められることになつた。卽ち快樂的であつたものは最早想像されず、假令不快であらうとも現實的なものが想像されることになつた。」（Freud: Formulierungen über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens.）

　この重要な論に於いてフロイドは、精神發生の此の基礎的事實を我々に示してゐるのであるが、この論文は快樂段階と現實段階との間の分化を明瞭に示すことを專らその目的に限定してゐる。フロイドはその論文の中で成程、精神機能の二原理が共存してゐる過渡的段階（空想、藝術、性生活）を論じてはゐるが、併し彼は、精神活動の第一次形態から第二次形態が發展して來るのは、漸層的に、卽ち一歩一歩と連續してかと云ふやうな問題や、常態又は異常の精神生活の中に發展の斯かる段階は認められるか、或は夫等の諸段階から出て來たものが證明せられるかどうか、と云ふやうな問題は、姑く不問に附してゐる。

　併し乍らフロイドは、强迫症患者の精神生活への深き洞察を示してゐる初期の著作で一つの事實に注意を呼んでゐる。その事實を出發點として見ると、精神が快樂段階から現實段階へと發展するその間のギャップを架橋せんと試みる事が我々にも出來るやうである。

　精神分析を受けてゐる强迫症患者たちは――かう云ふ風にその論文の中に書いてあるのだが――善につけ、惡につけ、彼等の念慮、感情及び願望が全能であるとの確信をすてることが出來ないと言ふ。彼等は相當の敎育を受けてをり、大學程度の知識や理性を具へてはゐるのだが、それでもそれ等の敎育や知識や理性を以てしても猶且、彼等の欲望が何らかの說明し難い方法で實現せられるであらうと云ふ感情を如何ともすることが出來ない。此のやうな狀態が

本當にあると云ふ事は、總ての分析者が何度でも確認し得るところである。他の人々の幸、不幸、さては彼等の生殺までもが强迫症患者にとつては、患者の抱いてゐる(夫れ自體に於いては無難な)何らかの思想過程及び思想的行動によつてどうともなると考へられてゐることを、分析者は知るであらう。患者は何らかの魔術的思考を抱き、又は何らかの魔術的行爲を行ふものである。でないと、何か大きな不幸が誰人(多くの場合、近親者の一人)かの上に下るであらう。此のやうな確信は迷信的であると他人には感ぜられるけれど、本人は如何にそれの反對の經驗を繰返して持つても、そのやうな確信に毫も動搖を感じないのである。

これ等の願望衝動は論理的には正しいが、併し到底堪ヘ難いものであると云ふので抑壓せられ、その代償として斯かる强迫的の思想や行爲が生じたものである事は、これを分析して見れば解るのであるが、そのやうな事實は別問題として、我々の注意を專ら此の强迫的症候の特異な顯現に向けるならば、我々はそこにそれ自身の問題を構成してゐるのを容認せねばならぬ。

精神分析的經驗によつて私は、此の症候(卽ち全能感)は人が何らかの不可抗力なる本能に服從しなければならぬと云ふことを氣付いてそれを投出したものであることを知つたのである。强迫神經症は、精神生活が幼兒的發展段階へ退行してゐるものである。その幼兒的精神生活の特質は願望と行爲との間に禁制し、遲延させ、反省させる思考活動がまだ介在してゐない事にある。卽ち願望充足的運動が願望の起きるや否や自發的に、何の躊躇もなく直ちに繼起すること——不快なものはこれを逃避し、愉快なものはこれを追及すること——にある。

多少とも意識から去つた一部の精神生活は、斯のように强迫症患者に於いては——分析が示すように——、發達停滯(定着)のために此の兒童期の水準に留つてゐる。而して願望と行爲とを同格に扱ふ。何となれば、精神生活の抑壓された部分は(抑壓のために、注意圈外にあるために)二つの活動の間の相違を知り得ない爲に願望を行動と等價であると考へるが、而も抑壓を被らないで自由な發展をし、而して敎育と經驗とによつて賢くなつた自我そのものは、これ等兩者を等價視することをたゞ一笑に附する事が出來るからである。强迫症患者の內生活が不協和であり、知識

と迷信とが不可解に並存してゐるのはそのためである。

此のやうに全能感を自己象徴的現象として說明するだけでは十分に滿足が行かないので、私は自問する。では、子供が念慮と行動とを等價とする勇敢さを持つてゐるのは如何にしてゞあるか。子供は頭上高く懸つてゐるランプや、皓々たる月や、その他あらゆる物象の方に手をさし延べて、それで如何にも手が屆き、さうしてそれを如何にも自分の手中に收めることが出來ると確信してゐるやうな素振を示すが、さう云ふ確信の感情は何處に由來するのであらうか。

「古く兒童時代に抱いた大きな妄覺の一部は（强迫症患者の全能空想の中に）正直に告白せられてゐる」と云ふフロイドの假定說に就いて、私は既に述べておいたし、またかゝる妄覺の起源及び運命如何を辿つて見ようと試みた。このやうにして私はまた、自我が快不快原則から現實原則へと發展して行くことに就いて何か新しい事實を知り得ばやとの希望を持つた。何となれば、幼兒期の誇大妄想が失はれて自然力認識がそれに代る（經驗に依つて自らさう代らざるを得なくなるのだ）と云ふことが自我發展の本質的內容を構成してゐると私には思はれたからである。

快不快原則に屈從し、外界の現實を無視する如き狀態は一つの架空であるが、併しかゝる架空は幼兒がたゞ母親の介抱にのみ安住してゐた時代には殆ど完全に實現せられてあつたものなのだと、フロイドは云つてゐる。そこで私はそれに附加してから云つてもよからう、人間の發達の或る時期には快不快原則にのみ屈從してゐるところの、かゝる理想が實現せられてあつたのだと、さうしてこれは單に空想や大體に於いてゞはなく、寧ろ事實上に於いて完全に實現せられてあつたのだと。

私の云ふのは人間が母胎內に於いて過ごす時期の事である。この狀態に於いては、人間は母の身體に寄生してゐるのである。生後の子供にとつても「外界」はたゞ極めて限定せられた意味に於いてのみ存在してゐるに過ぎない。保護、保溫、營養などの如き必要事はみな母親に依つて供給せられる。實際、赤ん坊は給與せられた酸素や營養物を攝取する勞をさへとらないのである。何となれば、これ等の酸素や營養物は適當な設備に依つて赤ん坊の血管中へ直接に

達せしめられるやうにまで世話を見て貰へるからである。これに比べると、例へば腸內の廻蟲の如きは自己を保持するために「外界を變へる」べくもつと多くのことをしなければならないのである。然るに胎兒の存續のための介意は一切母親に委讓せられてある。それ故にもし人間が母胎內にある時に心理生活を持つてゐたとするならば――持つてゐたとしてもそれは無意識的なものに過ぎないが（併し心理生活が出產後に於いて俄かに始まると考へることは甚だ愚かしいことだが）――彼はこの存在からして自分は事實上全能であると云ふ感じを持つたに相違ない。ところで、その全能感とは何であるか？ 自分の欲する一切を自分が有し、これ以上望むべき何物も殘つてゐないと云ふ感情に外ならない。然しながら胎兒はかゝる感情を自ら保持してゐる。何となれば、胎兒はその本能滿足のために必要なる一切を常に*所有してをり、さうしてそれ以上望むべき何物もないからである。それは望月の「缺けたることのなし」と云ふ狀態である。

註＊ 母親又は臍帶その他が病氣をしたり怪我をしたり、そのやうな障害の結果として人間は既に母胎內に於いて必要に直面せざるを得ないことがある。そのやうな場合には彼の全能感は失はれて「外界變更」の努力を揮つて仕事をしなければならなくなることがある。一例を擧げれば、窒息の危險に面した場合には羊水を吸入する如きである。

子供が自分を全能であると思ふこの誇大妄想は、このやうに、全然根據のないことではない。子供と强迫症患者とはその願望が充足されるに違ひないと云ふ考へを放棄しない時には、彼等は別に不可能なことを現實に求めてゐるわけではないのだ。彼等は甞て存在した狀態、彼等が全能であつた「樂しかりし古の日」の再來を望んでゐるに過ぎないのだ。（無條件的全能感段階）

我々は人類史の記憶痕跡が個人に傳統すると云ふことを當然として假定するが、それと同じ理由に依つて、否寧ろそれ以上の當然事として、胎內的な心理過程が出產後に生ずる心理的材料の形成に影響を及ぼさずにはゐないと云ふことを假定する。出產直後の赤ん坊の行動を見ると、心理的過程のこのやうな繼續を認めることが出來る。*

註＊ フロイドは偶々かう指摘してゐる。分娩行爲の間の感覺のために子供は被出產後の生活に就いて始めて不安な本能感情な

持つやうになるらしい。さうしてその不安感情は後年の一切の不安感情の原型となるのであると。

生れたての赤ん坊は自分の一切の要求に關して一律的に、新しい（彼にとつて判然と不快であるところの）狀勢に適應するものではない。分娩直後に彼は呼吸し始める。それは臍帶脈管（umbilical vessels）を結ぶことによつて遮斷せられてゐる酸素の供給を回復するためである。呼吸機制は夙に胎內生活時代になされてゐたのであるが、こゝに新たに呼吸し始めることに依つて赤ん坊は酸素供給を活潑に回復することが出來るやうになる。併しながら、もし人々が生れたての赤ん坊に殘存してゐる行爲を觀察するならば、赤ん坊は「望月の缺けたることのな」かりし胎內生活の靜穩無事狀態を無殘に擾亂されたことを嘆き、それどころか、その喪はれたる樂園狀態を再獲得したいと憧憬してゐることを人々は感ずるのである。育兒者たちは赤ん坊のこの願望を本能的に認識し、赤ん坊が啼いたり泣き叫んだりしてこの不快を表現すると、彼等は直ちに赤ん坊を、それが只今見捨てゝ來た狀態に出來るだけ酷似した狀態に故意的に置いてやるのである。育兒者は赤兒を母親の溫い身體の側に寢かせるか、或は柔く、溫い被ひの中に包み、母親の溫い庇護を受けてゐるかのやうな錯覺を與へんとする。育兒者は赤ん坊の眼を光線の刺戟から護り、その耳には強い刺戟の來ないやうにし、胎內に於いて焦立たしい思ひなしに過ごして來たのを更に續けて享樂出來るやうにしてやる。或は赤ん坊を搖り動かしてやつたり、韻律の單調な子守唄を唄つてやつたりして、育兒者は赤ん坊がよしんば胎內に於いてさへも受けないでもなかつたところの韻律の單調な微かな刺戟「母親が步く時の動搖的運動、母親の心臟の鼓動、身體の內部にまで侵入しさうになる外部からの鈍い音」を再現出させる。

もし我々が（育兒者のなす如く）生れたての赤ん坊の心理の中に感情移入するのみならず、更に念慮移入するならば、赤ん坊の堪えられなさゝうな叫びや啼きは、以前には滿足狀態になつたのに、それが出產の結果忽ち失はれて極めて不快であることに對する一見甚だ不適當なる反應であると云はなければならないのである。フロイドがその『夢の解釋』の一般的な部分で說明してゐる考へ方に從へば、右に述べて來たやうな（赤ん坊の）不快不滿の第一の歸結は、失はれたる滿足狀態を（母胎內の溫く靜かな惱みなき狀態を）錯覺的に再現しようと云ふことだと假定出來るで

あらう。赤ん坊の最初の願望衝動は、それ故に、この狀勢を再獲得しようとのこと以外ではあり得ない。ところで、こゝに不思議なことは――、常識的な介意を豫想して――この錯覺が事實上實現せられてゐると云ふことである。赤ん坊の主觀的見地からすれば、以前の無條件的「全能感」はたゞ僅かしか變化してゐないのである。何となれば、赤ん坊は實際上願望目的をたゞ錯覺的な方法で摑まうとする（想像しようとする）のみで、外界のものは別に何も變化させるには及ばないのだから……。赤ん坊は確に現實の因果關係に就いて、或は育兒者の存在や活動に就いて、何の知識も持つてゐないのであるから、彼は自分に魔術的な力が具はつてをり、そのために彼はたゞそのものを滿足してゐる自分を想像しさへすればよいので、それだけで自分の願望は總て充足せられると感じてゐるに違ひないのである。（魔術的、幻覺的全能感段階）

育兒婦が赤ん坊の幻覺を正確に察知してゐると云ふことは、彼女の行爲の効果に依つて示される。育兒上の最初の手當が施されるや否や、赤ん坊は安靜になり、眠りに這入つて行く。併しながら、最初の眠りは外的刺戟から出來るだけ庇護せられてあるところの胎内狀態を首尾よく再現したものに外ならない。そこには、生長及び再生の過程は何ら外部的な仕事をなすことに妨げられることなく、一切のエネルギーを自分自身の上に集中することが出來ると云ふ生物學的機能も果されてゐるやうである。或る考へ（それに就いては只今の場合述べてゐられないが）に從つて私は確信してゐるところに依ると、その後の一切の眠りはまたかの魔術的、幻覺的全能感段階への週期反復的な退行であり、さうしてこの退行の助けに依つて胎内狀勢の絶對的全能感へと週期反復的に退行するものであるのだ。フロイドに依ると、あらゆる心理系統は快不快原則に協つた手段に依つて存在してゐるものであると要請しなければならないさうしてその手段に依つて一切の心理系統は現實の刺戟から退行することが出來るのであると云ふ。＊ところで、私の考へるところに依ると、夢や睡眠はそのやうな手段を果すところの機能である。つまり、小兒の幻覺的全能感が成人の生活中に殘存遺傳してゐるものである。この退行と病理的一對をなすものは、精神病者に於ける幻覺的な願望充足である。

註 * Freud, Jahrbuch, Bd. III, S. 3.

本能滿足のための願望は週期的に顯現するものであるのに、外界は本能の發揮せられる機會の生起に對して何らの頓着をもしてゐないから、そこで願望充足を幻覺的に果して見てもそれが實際の願望充足を齎すにはも早不適當であると云ふことがやがて分つて來る。で、新たな條件がその充足に加へられることになり、子供は何かの信號(signals)をすることになる。(つまり不完全なものながらもこれに依つて動作的な働きを示すのである。)かくて事情の變化は赤ん坊の心の方面に起きて、「觀念上の同一性」のあとに續いて「持續的同一性」が來、それに依つて滿足が得られるのだ。

幻覺的段階に於いて既に、不快なことがあれば不釣合な言動的表白(泣叫び、踠き)が起きると云ふ特質は現れてゐた。これ等は今や赤ん坊に依つて、魔術的信號として用ゐられ、これ等の信號さへ用ゐるならば滿足は直ちに得られるのだと考へられてゐる。と云つても勿論外部の助力はあるのだが、そんな事は併し赤ん坊は思ひも寄らない。これ等總てに於ける赤ん坊の主觀的感情は本物の魔術師の感情と比較することが出來よう。彼等魔術師は外界に於いて非常に込入つた出來事を思ふまゝに起させるために、たゞ一定の手振りをすればよいのである。*

註 * これ等に類似したものを病理の內に求めるならは、私は常に本物の癲癇の事を考へざるを得ない。これは大部分の神經症の中で最も問題的なものである。さうして私は、癲癇問題の中には生理的なものと心理的なものとの區別が困難であることは、これを十分に認めるが、私は次の事實に注意を呼んでおきたい。卽ち癲癇症患者は異常に感覺的なもので、彼等は從順であるが、その從順の背後には恐るべき憤怒と傲慢とが、極めて稀には、現れるものだと云ふことである。この特質は現在に至るまで普通には、發作が反復的に生ずる結果として第二次的に變化發生したものとして解釋せられてゐたが、併し我々はそこに今一つの別のものを考へることが出來ると思ふ。卽ち、癲癇の發作は不釣合な運動に依つて願望を充足した幼兒的段階に退行するものとして考へらるべきではないかと。さうだとすれば、癲癇病者とは、その人に於いて不快なる本能感情が鬱積し、時々の痙攣發作にその鬱積したものが發散せられるのだと云ふことになる。もしこの說明が妥當する證明が立つならば、我々は後年に生じた癲癇の病苦もこの早期時代の不釣合な願望顯現にその定着のあるものと見な

ければならない。即ち、地團太を踏んだり、拳を固めたり、齒を喰ひしばつたりなどするのは、總て憤怒の勃發に於いて見られるところであつて、それ等は他の點では健康な人々でも同じ段階に退行した時には多少ともさう云ふ表情を示すのである。

人間の全能感は、彼等の願望が錯雜の度を加へるに從つて、益々「條件」に依憑するやうになつて來ることは、我々の知る通りである。必然隨伴的な顯示だけでは、やがて滿足を齎らせるに不十分になつて來る。發達につれて願望が益々特殊な形をとるやうになればなるほど、その顯示には愈々特殊な信號が必要になつて來る。その信號とはどう云ふのかと云へば、例へばまづ、幼兒が何か喰べさせて貰ひたい時には、口唇で何かを吸ふやうな運動をして見せることである。また排便後の清掃を望んでゐる場合には、聲に依つて特質的な表現をしたり、腹部を押付けたりする。子供はまたその望むところの對象に向つて手を差し延べることを漸次に知つて來る。これからして後年には正規的な身振言語が生じて來る。さまざまな身振手振を適當に結合させることに依つて、子供は全く特殊な必要を表現することが出來るやうになる。このやうに表現することに依つてそれ等の必要は實際に屢々滿たされるのである。そこで子供が願望に相當する身振手振に依つてその願望を表現すると云ふ條件に從つてゐる限りは、その子供はなほ自ら全能であると思ふことが出來るのである。（魔術的身振手振の助力を俟つ全能感段階。）

この段階に相當するものが、やはり病理現象の間に見出される。念慮の世界から身體的過程への不可思議な飛躍を發見して、フロイドはこれをヒステリー轉換*と呼んでゐるが、もしこれを身振魔術の段階への退行として考へるならば、我々には一層理解し易くなるであらう。現に、精神分析の明かにしてゐるところに依ると、ヒステリーの發作は患者の抑壓せられた願望が充足せられたものとして表現せられるに身振手振の助力を借りてゐるものに外ならないのである。正常者の心理生活に於いても、無數の迷信的身振手振が、或はその他何らかの方途で効果があると考へられてゐる樣々な素振（呪詛、祝福、祈願の身振手振）がなされてゐるが、それ等は現實感の發展過程に於ける一つの段階（この段階に於いて人々はなほ宇宙の正規的な秩序を勝手に强制することが出來ると感じてゐたのだ）の名殘りで

ある。運勢占ひ、豫言者、催眠術者などは、彼等の身振手振に完全な力が潜んでゐると信じてゐる。またイタリーのナポリの住民たちは邪視の兇ひを避けるに象徴的な手振りを以てしてゐる。

註＊ フロイド著『ヒステリー研究』（一八九五年）參照。

必要の範圍が擴大して行き、その錯雜さの度が加はつて行くにつれて、個人はその必要を充足させるために彼が順應せねばならない「條件」は益々增大して行くことは勿論であるが、それのみならず、彼がかつてそれに順應して効果のあつた條件に次にも正直に順應しても今度はアテが外れ、彼の貪慾な願望が充足せられないで居ると云ふやうな場合の數も漸次に殖えて行くことであらう。差出した手を空しく引返さねばならない場合も隨分屢々である。望む目的物は魔術的身振手振に應じて來ては與れない。實に、克服すべからざる敵對力がこの身振手振に强烈に反撃し來り以前の位置にまで引下らなければならないことがあらう。今までは「全能なる」者は、自分に從順なる世界が自分と一體であり、顎で使へると思つてゐたのだが、併し漸次に彼の經驗の中には苦痛な不調が感ぜられて來る。彼は自分の意志に從つてくれない或る不信不忠なるものを外界として區別し、自分の自我と對立せしめねばならなくなる。卽ち、主觀的心理內容（感情）と客觀的心理內容（感覺）との區別を立てることになる。私はかつてこれ等の段階の第一のものを心理の攝取段階（Introjection Phase）と名付け（何となれば、この段階に於いては一切の經驗はなほ自我の中に織込まれてゐるからである）後の段階を投出段階（Projection Phase）と名付けた。かう云ふ術語を用ゐて云ふならば、全能感段階は自我の攝取段階であり、現實段階はその投出段階であると云ふことも出來よう。

併し外界を客觀視するやうになつてもまだ、自我と自我に非ざるものとの間のあらゆる結帶を斷ち切ることは出來ない。成程、子供は、よしんば外界が屢々自分の願望に反對しようともたゞ世界の一部分（自己）を自由にするだけで滿足するではあらうが、併しこの外界の中には子供が自分等自身の中にあることを知つてゐるところの種々な性質（卽ち、自我の性質）が殘存してゐるのである。あらゆる事柄から結論を下して見ると、子供等は現實に就いての考への中に萬象有靈觀（アニミスムス）的段階を通過するものと認められる。その段階に於いてはあらゆる對象が生命を與へられてゐるも

のと子供等には考へられる。またこの段階に於いては、子供はあらゆる對象に於いて自分自身の器官及びその活動を發見せんと求めるのである。*

註* この萬象有靈觀の問題に關しては、『イマゴー』誌第一卷に揭げられたるハンス・ザクス博士稿『自然感情論』を參照せらるべし。

嘗て精神分析學に對して嘲笑的な言葉が與へられたことがあつた。即ち、精神分析學說に依ると、無意識はあらゆる凸狀物にペニスを發見し、あらゆる凹狀物にワギナ又は肛門を發見するのだと云ふ。この命題は這般の事情を適確に云ひ表はしてゐると私は敢て云ふ。幼兒の心（及びそこから出來してゐる成人の無意識の傾向）は先づ專ら彼自身の肉體にのみ拘泥してゐる。後になつても何かに吸付いたり、物を喰つたり、性器のあたりに觸れたり、排泄機能を果したりして快感的滿足を得ることを主にしてゐる。して見れば、彼の最も親しい經驗を、よしんば如何に遙かな相似に依るにもせよ、思ひ出させる如きものや事柄を外界に見出して、彼の注意がとかくやはりその方に向ふのは敢て珍しいことではない。

このやうにして、人體と外界との間には密接な關係（それを我々は象徵的關係と呼ぶ）が生じ、それは生涯に亙り殘つてゐる。一方に於いて、この段階に於ける子供は、世の中に於いて見るものと云へばたゞ自分の肉體的現象の俤のみである。他方に於いて、彼は外界の種々複雜な事柄を自分の身體に依つて表はすことを學ぶやうになり。このやうに象徵的に表現する能力を持つことが、身振手振語の重要な完成である。かゝる能力に依つて幼兒は自分の身體に直接的に關係してゐる如き願望を信號することが出來るのみならず、また外界（として今や認識せられるに至つてゐるもの）を變化させたいとの願望をも表現することが出來る。もし幼兒の身邊の者等が十分な愛情を以て世話してやつてゐるならば、彼はこのやうな段階の存在狀態に於いてさへも自分の全能感の幻覺を放棄するには及ばないのである。彼はなほやはり一つの對象を象徵的に表はしさへすればよいのだ。さうすれば、生きてゐると信ぜられてゐるその對象は屢々實際に彼の方に「やつて來る。」何となれば、萬象有靈觀的に思考してゐる自分の願望が滿足せしめら

れた事に依つてかゝる印象を受けたに相違ないからである。その滿足のやつて來方がアテになつたりならなかつたりするので、そこには自分より以上に「崇高」な力（母又は乳母）があつて、その力の惠みを持たなければ魔術的手振身振をしても直ぐに滿足が得られないのだと云ふことが段々に分つて來る。併しかゝる滿足も、周圍の者等があまり嚴格でないならば、必ずしも得難くはない。

幼兒が願望及び願望する對象を表はすために用ゐる身體的手段の一つは、やがて一つの特別な意義を持つやうになつて來る。それの意義は、表現のための他のあらゆる手段を遙かに越えたものとなる。卽ち言語である。言語は本來模倣である。* 卽ち、聲音や種々な事物を以つて（或はその力を借りて）、生ぜしめられる音響や騷音に依つての表現である。言語器關の實施力を以てすれば、身振語の力を以てするよりは、外界の對象や事物に就いて遙により複雜な事物を、遙により單純なやり方で、表現することが出來るのである。言語象徵はこのやうに、身振象徵の代りになるのである。或る種の一聯の音響は一定の事物や過程と緊密に結びつき、直ぐに聯想させるやうになる。さうして實際それと同一視せられるに至る。この事からして偉大な過程が生じて來る。そこには面倒な譬喩的な想像を逞うする必要はない。ましてや厄介な戲曲的表現をする必要はない。我々が言葉と呼んでゐるところの一聯の音響の想像や表現は、願望を抱いたり表現したりする上に一層特殊的であり經濟的である。同時に、意識的思考は、それ自身に於いて無意識的な思考過程と聯想せられることに依つて、さうして意識的思考過程に知覺的性質** を賦與することに依つて、そこに言語象徵が可能となる。

註* Kleinpaul, „Leben der Sprache“ (1893) Sperber „ Ueber den Einfluss sexueller Momente auf Entstehung und Entwicklung der Sprache“, Imago, 1912. 參照。

** フロイド著『夢の解釋』參照。

さて、言語標徵を以て意識的に思考することは心理裝置の最高の完成である。さうしてまたこれのみが現實への適應を可能ならしめるものである。何となれば、言語で間に合はせておけば反射的に行動に出なくても濟むし、また不

快から遁れることも出來るから。それにも拘らず、幼兒はこの程度の段階にまで發達してゐても、まだその全能感を如何にして保存すべきかを心得てゐる。何にしても、念慮として表白することの出來る彼等の願望はまだ極めて僅少で、比較的單純であつて、子供の仕合せを思ふ周圍の者らが終始注意深く觀てゐると、これ等の念慮の大部分を判知することが容易である。念慮に伴つて常に起る物眞似的な表現（表情）――それは特に幼兒に於いて著しい――に氣をつけてゐると、かゝる種類の讀心は成人たちには極めて容易になるのである。また子供がその願望を實際に言葉に出すやうになると、常に世話をしてやらうと用意してゐる周圍の者等は出來るだけ速にその願望を協へてやらうと急ぐ。そこで子供は自分に魔術的能力が具はつてゐるものと思ひ、かくて魔術的念慮及び魔術的言語の段階に入るのである。*

註* 「魔術」の心理的説明としては勿論、この信念の中に、この他に、物理的事實（遠隔感應の如き）の豫感せられてゐることも見遁すことは出來ない。

强迫症患者が自分の念慮や言葉の全能感を放棄することが出來ず、フロイドが指摘したやうに、かくて行動の代りに念慮するやうになつた時には、彼等は實に右の現實感段階にまで退行してゐるものゝ如くである。迷信、魔術、宗敎的儀式などに於いては、爾々の祈禱、呪詛、或は魔術的言葉などをたゞ心の中で唱へたり、或は聲高に唱へたりしてその靈驗の現れむことをさへ念ずれば、それだけで不可抗力が發揮せられるのだと云ふこの信念が、そこに大きな役割を果してゐるのである。*

註* かゝる全能感（靈驗）は特に廢語に於いて强いと信ぜられてゐるのが特徵的である。

人類にはこのやうに殆ど手のつけられない誇大妄想があるのだが、これに一見矛盾する如く思はれるのは或る種の神經症者の劣等感であつて、彼等は熱情的に成功を求めるのであるが、その背後にはアードラーの所謂劣等感なるものがあつて、それを患者自身はよく自覺してゐるのである。深部にまで達した分析をして見ると、さう云ふ劣等感は決してそれ自身に止まつてゐるものではなく、神經症の説明になるものではなく、寧ろ誇張せられた全能感の反動で

あることが、あるゆる場合に於いて明になつてゐるのである。さう云ふ誇張的全能感の段階に彼等患者は幼兒期に、「定着」を來たしてをり、そのためにその後自分の全能感を否認することが出來なくなつてゐるのである。これ等の人々は偉大への憧憬心を明かに持つてゐるが、それはたゞ「抑壓せられてゐるもの〻擡頭」に過ぎないのであつて、甞て何らの努力なしに享受したことのある全能感を、今度は外界を變更することに依つて再び享受するやうになりたいとの儚い企てに過ぎないのである。

繰返して云ふならば、總ての幼兒は幸福なる全能感の妄覺の中に生きてゐるのである。その妄覺を甞て何れの時にか——或はたゞ胎內に於いてのみであつたかも知れない程だが——彼等は實際に抱いたのである。彼等がその全能感を後年に至るまで保持して樂天家となるか、或は彼等の無意識的、非合理的願望を否認することを肯んぜず、一寸氣に觸るやうなことがあつても非常に侮辱を受けたと思ひ、輕蔑されたと感じ自分が運命の唯一人の愛子でない故にとて運命の繼子であるときめこんでしまふところの厭世家の一人となるかは、彼等の內質（Daimon）と外運（Tyche）とに依るのである。

快不快原則に全的に支配せられなくなるのは兩親への心理的依屬が十分に清算せられた瞬間からであると、フロイドは說いてゐる。全能感が退潮してその代りに環境の力を十分に評量するやうになるのは、やはりこの時期に於いてゞあるが、その時期が何時頃から始まるかは、個人に依つて實に區々である。現實感がその最高點に達するのは科學に於いてゞあるが、全能感の幻覺は科學に於いては最も甚だしき屈伏を餘儀なくされる。以前の全能感はこゝでは分解して單なる「條件」となつてしまふ。（條件觀、決定觀。）とは云へ、人々はなほ意志自由說に於いて樂天的な哲學的ドグマを保有することが出來る。何となれば、このドグマは全能の空想をなほ實現することが出來るからである。

我々の願望や念慮は條件づけられたものであるとの認識は、常態的投出（卽ち客觀化）の最大限を示してゐるものである。併しながら、そこにはまたパラノイアと呼ぶ精神異常がある。パラノイアは自分の願望や念慮が外界に押出されてゐる、投出されてゐると考へてゐるのが就中、その特質である。*この種の精神症の定着點は、全能感の窮極的

に拒否せられる時期に、即ち現實感の投出段階に、あつたのだと考へることは自然であるやうに思はれる。

註＊　フロイドの『防禦神經精神症』及び『或るパラノイヤ患者の自傳に就いての分析的觀察』を參照せられよ。（譯者附言、共に邦譯は未だなし。）

現實感發展の諸段階に就いては、これまではたゞ主我的な、所謂「自我本能」的な見地からばかり論じて來たが、この自我本能は自己保存の機能に資するものである。然るにフロイドに依れば、現實は性慾とよりも自我と一層密接な關係のあるものである。何となれば、一方に於いて、性慾は外界に依屬することが少い（それは長い間自己性感的に滿足を得てゐた。）のみでなく、他方に於いて、それは潛在期間に於いて抑壓せられ、長い間現實と接觸することがなかつたからである。性慾はこのやうに、生涯の間快不快原則に順應してゐるのであるが、自我はあらゆる方途で現實を蔑視しつゝ、而もやがて現實のために最も痛ましき失望の苦杯を嘗めなければならないのである。＊

註＊　フロイド稿、〃Jahrb. Bd. Ⅲ. S. 5〃を參照。

性的發展中の全能感（これは快不快原則の支配してゐる段階の特質であるが）は如何と云ふに、この方面に於いては「無條件全能段階」が自己色感的種類の滿足の放棄せられるに至るまで（即ち、自我が現實のいや增し來る錯雜さに既に久しく順應し、魔術的身振や言葉の段階を通過して了ひ、自然力の全能を殆ど完全に知悉して了つた時に至るまで）存續してゐることを認めないわけに行かない。自己色感とナルチスムスとはこのやうに、色感上の全能感段階である。而もナルチスムスは決してなくなるものではなく、對象色感に於いてさへ常にその側に附隨してゐるものであるからして、我々はかく云ふことが出來る。即ち自己愛に關する限り、愛情の問題に就いては人々は生涯の間常に全能感の幻覺を保持してゐることが出來ると。戀愛對象に於ける失望が悉く明白となり今更證據を必要とせぬやうになつた曉には、ナルチスムスへの退行の道がそこに不斷に開かれる。知力喪失症（早發性痴呆症）やヒステリーの背後に自己色感的、ナルチスムス的退行が潛んでゐると云ふ事はどうかと思はれるかも知れないが、强迫神經症及びパラノイアの定着諸點は「色慾上の現實」（對象を求めねばならぬ事）の發達線上に發見せられなければならない。

併しながら、これ等の諸關係はあらゆる神經症に就いてまだ十分に研究せられないから、我々は神經症の選擇に關するフロイドの一般的命題だけで滿足しなければならない。神經症の選擇とはつまり、後年に至り病的障害が區々であるのは、「自我及び性慾の發展の如何なる段階が發達の決定的禁制に影響せられるかに依つて決定せられる。」と云ふことである。

とは云へ、我々は以上の命題の上に更にも一つの命題を敢て附加することが出來る。色慾感の種々雜多な願望內容(卽ち、色慾願望が充足せられたものとして示されるのが症候で、その症候には種々雜多な色慾願望や色慾目的が現れてゐるのであるが、それ等の雜多なる願望や目的)は、性慾發達の如何なる點に定着があるかと云ふことに係つてゐるのだが、神經症の機制は個人が決定的禁制を受けた時に當つて、彼の自我は如何なる發達段階にあつたかと云ふことに係つてゐるらしいと私は思ふ。性慾が早期の發達段階に退行するに連れて、定着當時を支配してゐた現實感が症候構成の機制の中に再生し來ると云ふのは、極めて考へ得べきことである。と云ふのはつまり、この早期に支配してゐた「現實試驗」は、神經症者の現在の自我には理解せられないものであるから、それが抑壓力のなすがまゝにせられ、かくて檢閱を受けた感情コムプレクスや念慮コムプレクスを現出するためにそれが使用せられるのを妨ぐ由もないのである。例へば、ヒステリーや强迫神經症の如きは、この考へ方に依ると、一方に於いて、性慾の早期發達段階自己色感(エディポシズム)への退行としての特質を有するものだと見られると共に、他方に於いては、これ等はその機制に於いて、現實感が魔術的身振手振(轉換)又は魔術的念慮(念慮の全能)の段階に退行してゐるのがその特質だと見られるのである。繰返して云へば、總て神經症の定着點が確實につきとめられる前にはもつと長い孜々たる研究が遂げられねばならない。たゞ私はこゝで、解決への一つの可能性が開けてゐると云ふことを示唆するに止めたい。さうしてその解決の道は、見込みがあると私は思ふのである。

現實感の起源說に就いては、我々は現在のところ、たゞ科學的豫言めいたことを云ひ得るに過ぎない。我々は何れの日か、自我發達の各段階、並びに神經症者がこれ等の諸段階にまで退行してゐる種々の型を人類發段の各段階に比

較平行させて考察すること、宛もフロイドが野蠻人の心理生活の中に强迫神經症者の諸特質を再發見したる如くならしめるに成功し得るであらうことを、敢て云ふものである。

註* フロイド『トーテムとタブー』始めて發表せられたのは『イマゴー』誌第一卷（一九一二年）誌上に於いてゞあつたが、その時は表題は別に『野蠻人及び神經症者の心理生活に於ける二三の一致點に就いて』と云ふのであつた。

一般的には、現實感の發達は種々な抑壓の漸次繼起することに於いて覘はれる。人類はかゝる抑壓へと已むなく强ひられるのであつて、發達への自發的努力からではなく、已むを得ざる斷念へと善處する必要からである。最初の大きな抑壓は出産と云ふ過程に依つて强ひられる。この出産と云ふことは兒童の側に於いて何ら能動的な協力の下になされたわけではなく、本來彼の意圖ではなかつたのだ。胎兒は寧ろ母胎の中に安靜にして殘つてゐたいのが山々だ。併しそれは殘酷に現世に投り出される。さうして母胎内で樂んだ種々な滿足を忘れ（抑壓し）、新しき環境に適應しなければならない。これと同じ殘酷なる藝當は發達のあらゆる新段階に於いて繰返されるのである。*

註* もしこの思想を論理的に追及して行くならば、人々は忍耐の傾向、退行の傾向、などの觀念にぶつつかるやうになる。また主要な有機生活、發達、適應などを促す傾向（それ等は外的刺戟にのみ依存してゐる）などの觀念にも打つかることになる。（譯者曰、フロイドの『快不快原則を超えて』を讀むとこの謎のやうな論理が判然する。）

原始人がその好める習慣を抑壓し、このやうに「進化」（發達）して來たのは、地球表面の地理的變化並びにそれに伴ふ激しき結果のためであると推定することが、恐らく許されるであらう。そのやうな大變化は人類の發達史上に於ける抑壓の位置であつたかも知れない。さうしてそのやうな大變化の時間的位置及び激しさが人類の性格及び神經症を決定したかも知れない。フロイド教授の說に依ると、人類の性格は人類史の痕跡を保存するものである。我々が科學的に知り得べき埒を超えてこゝまで敢て云ふ以上は、個人的抑壓（潜在期）と、（地球上に人類の既に存在した頃の）我々の原始祖先に打擊を與へた最後にして最大なる激變、即ち氷河時代の悲慘なる影響との間に關係を認め、その影響が今猶我々の個人生活の中に反復せられてあるのだと認めること位に、必ずしも逡巡するにも當るまい。*

註* 現實の必要が生じてゐないのに進化（發展）の方が生じてゐる場合があるところを見ると、從前の習慣になつてゐる機制（進化）が放棄せられるのはたゞ外的强制にのみ依るのであつて內的自發的衝動に依るのではないとの考へ方は無理ではないかと云ふことになる。その一例としては、呼吸機制が既に胎内に於いて發展してゐる如きである。これは、併しながら、たゞ有機體發生說に於いてのみ問題になることであつて、只今の場合ではたゞ人類史に於ける强制的な進化過程の一反復として考へらるべきである。動物が遊戲をするのは後に人類に於ける遊戲となつて一層の進化を示すべきものゝ豫徴的段階であると云ふ說（グロース）があるが、これはやはりさうではなくて、種族遺傳的に獲得したる能力の反復に過ぎない。このやうに、これ等の能力はその源因を歷史的に說明することの出來るものであつて、必ずしも窮極的なものとして見なければならないことはない。

以上のやうに人類の過去の生活への興味津々たる望見へと我等を誘ひ、類似點を賴りとし未だ知るべからざるものゝ上に理解の橋を架さうとなさしめたところの一切を知悉しようとの强い好奇心のために、我等はこれ等の思索の出發點――卽ち全能感の絕頂及び衰頽と云ふ題目――へと立戾つて來るのである。科學はかゝる幻覺を放棄しなければならない。或は少くとも、假定や空想の分野に入らんとする場合にはその事をよく自覺してゐなければならない。これに反し、童話に於いては全能の空想は依然その主調をなすものである。*自然力の前に最も謙虛に我々は低頭しなければならない場合にも、童話はその典型的な主題を以て我等に助け舟を出して吳れる。現實に於いては我等は弱者である。それ故に童話中の英雄は强者で負けることはない。我等の活動及び知識に於いては、我等は時間と空間とに依つて制肘せられ妨げられる。それ故に童話に於いては我々は不死であり、一度に百の場所に於いて過去と未來とを望見する。事物の重苦しさ、固苦しさ、不可浸透性は、步毎に我等の前途を阻んでゐる。童話に於いては、併しながら、人々は翼を持ち、その眼力は壁を貫き、その魔術の杖はあらゆる扉を打開く。現實は生存にとつては困難なる戰ひであるが、童話に於いては「小さい卓子よ、吾が前に立つてあれ」と云ふだけで十分である。人間は危險な動物や恐ろしき敵からの攻擊の前に不斷の恐怖の中に生きてゐなければならないのだが、童話に於いては魔法の帽子さへあれば我々はどんなにも姿を變へ敵が近付くことの出來ないやうにすることも出來る。現實に於いては、あらゆる我等

の願望を充足させることの出來るやうな愛を得るのは如何に難いことであらう！　童話に於いては、英雄は不可抗的であり、或は魔術的の手振身振を以て魅惑することが出來る。

註＊　リクリン稿『童話に於ける願望充足と象徴』（邦譯は未だなし）を參照。

このやうに童話なるものは、成人たちがこれを子供等に語ることに依つて彼等自身の充足せられざる抑壓せられたる願望を洩すものであるが、實に全能感の失はれたる牙城を最後の藝術的表現にまで齎すものである。（終）

×

附言――第十二頁に於いてフェレンチーは、凸形なるものと凹形なるものとに男女の象徴を發見すると云ふことに就いての世人の批評に對して辯解がましいことを書いてゐるが、あの辯解はあまり巧妙でないばかりでなく、寧ろ云はでものことである。かゝる象徴的解釋は分析學徒の責任でもなければ功績でもないからだ。たゞその心理的機制を學的に明劃に說明したゞけの事である。これを實際に行つたものは昔からの人類全般であり、これを最初に漠然とながら、直觀的にながら解釋したものは生物學者たちであつた。分析學徒は從前の人々の無意識行動に對する意識的解釋を科學的に根柢づけるに始めて成功したゞけだ。汚穢屋が臭いものを扱ふとて、臭いのは汚穢屋ではなく、鼻をつまんでゐる御當人ではないか。責任轉嫁も甚だしい。

（譯者）

早熟兒に就いて

小山良修

この文はウィーン大學小兒科敎授ルドルフ・ノイラート氏著『思春期』中にある早熟の項を譯纂したものですが、あまり飜譯だけになつても面白くないと思ひまして、勝手な敷衍をいたしました段最初に御斷りいたします。

×

醫學的には、我々生れてすぐから十二三歳頃までは生殖衝動（Befruchtungsimpuls）が働きそれからは思春期衝動（Pubertätsimpuls）が强くなり、ここにはじめて全身の發育を遂げるものであると申しますが、早熟の場合、この衝動が接近して働いてしまつて特有の小兒期が現はれないでしまふのです。從つて十二三歳以前に思春期の特徴としての生殖器の發育、陰毛、髯、聲がわり、陰部脂肪、乳房發育、月經、等がみられるのであります。統計上、早熟兒は女が男の約三倍半の頻度であつて、一歳で既に月經の來るものが相當にあります。男子では四五歳頃の發病（？）が多く見られてゐます。早熟になれば二次的に全身骨骼及歯牙も急に發育致します。いづれにせよ、異常發育でありますから死亡率も高く、早熟、早老が多いのですが、急速な發育期の危險をうまくきり拔けたものは何ら變りなく天命を全うするらしいのです。精神的には概して發育は惡いようです。早熟の分類は三つに大別されます。

（一）眞性早熟

これは病理解剖學上に何ら原因のみられないもので、心身共に早く小兒期を終り大人になつたもので（神話などのものは主にこの部類ですが）、既に胎兒期の發育を或程度以上にしてゐたもので、引續き急速に進化して比較的均整

のとれた大人になつてしまふので、豫後もよく、男女共にみられます。

(二) 内分泌性早熟

この部類が臨床上、最も多く、（と申してもまれな病氣で日本で報告された總數は四十例を越してゐませんが醫學上）興味のあるものです。

第一、病的生殖器肥大性（假性）早熟——これは生後數年經てから急に發育が著しくなり、（女子なら月經が現はれ）思春期の特徴が年齢に似合はず著明となり驚くと云ふ事になります。この原因は卵巣腫瘍或は睾丸腫瘍等が出來て、生殖腺が病的に刺戟されて起るとされてゐます、其腫瘍には病理學上、種々あり、區別されてゐますが專門的になりますから略します、たゞ、三睾丸者と云ふて、睾丸が一つ多くてこの症狀を起すものがあり、其餘分の一個を剔出して無事若返つた（小兒にかへつた）報告もあります、たま／＼今年七月山口市でみられた一例は早熟はどうだつたか記載されてなかつたが十九歳の男子が三睾丸者であつて、長時の陰莖勃起を來し有痛性で困つてゐたのを三個並んでゐた睾丸のうち中央の一個を剔出した所、全快した由です（醫學博士田中屋淸人氏報告）話は更に餘談になりますがこう云ふ意味での若返りはホルモンにより出來るのでありますが、七十歳の人が二十歳になり五十歳も得をして長生きをしようなんて手はありません。逆に早熟なら動物實驗上、性ホルモンを幼若動物に注射して、生殖腺の肥大思春期特徴等を立派に證明する事が出來ますのでホルモンと早熟との關係は興味のある問題でありますから又他日御紹介出來ると思ひます。

第二、副腎性早熟——斷然女子に多く、男子では怪力童子となり、いづれも、毛深くなるのが特徴で、殊に女子は男らしい體格となり所謂男性化がみられます。その他脂肪沈着を全身に起すものもあります、顔つきは一見、鈍重です、原因としては副腎腫瘍が擧げられてゐます。

ナイス及びシッファー兩氏は、鼠に副腎を多數移植したら早く月經が現はれたと報告してゐます、ミューラー氏の動物實驗では副腎の皮質エキスの注射により、雌性的發育を抑壓する事が出來たと云ひ、いづれにせよ、副腎と早熟又

は男性化の證明に一助を與へてゐるようですが目下は未だ一定した結論に到達してゐません（私の關係してゐる研究所で、副腎皮質ホルモンを抽出して二十鼠に注射してみましたが早熟をはつきり證明出來る所までは成功してゐません）

第三、松果腺性早熟――これは第二とちがつて、斷然、男子に多く女子のものではまだはつきりした例がない程です、松果腺は生殖機能を抑制するホルモンを出してゐる機官とされてゐますので、この松果腺早熟の場合は松果腺腫瘍が一番多い原因ではありますが第一及第二の場合と異り、腫瘍のため、却つて機能不全となり、ために抑制のとれた生殖腺機能が亢進して早熟を起すと云ふ理屈になります、とにかく實際上には第一の生殖器肥大性早熟に似たものが多く、猶、骨格の發育が著しく身體は大きくなります、しかし、何しろ、腦の一部の腫瘍でありますから頭痛、痙攣、嘔吐等をはじめとして、小腦や眼や其他に腦の壓迫症狀が現はれて豫後は非常にわるいものです、（動物で其松果腺を剔出してホルモン作用をなくして早熟を起すような實驗がしばしば報告されてゐます）

第四、其他の內分泌性早熟――アッシュネル氏は幼若動物の脾臟を剔出したら早期成熟を來たしたと報告してゐます臨床上でも、たま〱脾臟の剔出手術を施したらあとで乳腺が發育したと云ふ例もありますが私が今年六月より二十四の幼若（雌）鼠（マウス）に全部脾臟剔出を行つて觀察してゐますものでは別に對照動物より早く性周期を認める事が出來ず最近は既に幼若期をすぎ正常動物の通りに發育してゐまして目下のまゝでは脾臟性早熟は證明出來ません。次に腦下垂體ですがこれは腦の底にある小さい腺ですが其一部の前葉は生長、成熟、新陳代謝等に關係のあるホルモンを出すので、最近は實に興味の中心にされてゐる臟器ですが此處の異狀（腫瘍性の變化）により早熟を來したと報告されてゐる例は多いのですが果して純粹にそれのみによると云ふ事はまだ、はつきりと確證されてゐません。動物實驗で、腦下垂體剔出動物を作りますと、誠にいぢらしい程幼若狀態のまゝでゐて、之にホルモンを補給してやれば再び發育を見るのであります。――（これに關する拙論文は小兒科雜誌、昭和四年八月號に掲載しておきました。）

其他甲狀腺機能が先天性に障碍されてゐた少女が六歲になつて急に早熟して、月經、乳腺肥大、陰毛發生等を起し

ましたが甲狀腺劑を與へた所、忽ち、月經はとまり、乳腺も小さくなり陰毛も消えて、先天性の馬鹿まで治つて來たと云ふ珍例をケンドレス氏が報告してゐます、とにかく甲狀腺は生殖機能とは密接な關係にある事は確かになつてゐます。

(三) 腦性早熟

前述の松果腺や腦下垂體やなどに關係のない腦腫瘍や膿瘍や百日咳の腦出血損傷や嗜眠性腦炎や痙攣やなどのために中樞神經系並に分泌腺に特異な影響を及ぼして早熟を來す事があると云はれてゐますが實例は略します。

以上で大體、醫學上の分類を終りますここで御讀み下さつて少々物足りない所がありませうと思ひますが醫學的の方面は今の所この範圍を出てゐません、私もまだ臨床の實例に會ひませんので心理的方面が全くわかりません、猶且前述の生殖衝動、思春期衝動が何者であるかを詳細に述べる事の出來ないのを恥ぢてゐます、唯ここに、眞性早熟の有無にかゝわらず、性的な働きがホルモンを通じて生後間もなく、活動がある事(少なくとも性ホルモンの存在)を證明し、且、一方に於て他のホルモン(この場合松果腺ホルモン)により抑壓されてゐる事を多くの學者が承認してゐる事、其他、早熟を起す諸種の原因があげられつゝある事等からやがて、心理的、精神分析的な方面も器質的に案外、容易に證據だて得るようになるのではないでせうか?

フロイド精神分析學全集中『性慾論、禁制論』の幼兒性感の項、早熟の項等とを參照してゐますと非常によくうなづかれるように思ひます。內分泌臓器障碍により早熟を起し、後剔出手術により正常にかへつたような兒童の心理や神經症等の經過などを知る事が出來たら非常に面白いと思ひますが、文献も少なく殘念です、いづれ後日、もう少し研究して、御批判をうける機會を得たいと思つてゐます。(終り)

女性生活の特質（ヒッチマン・ベルグラー共著）

高水力太郎譯

（序）前號所載論文の續篇なれども、本稿はまたそれ自身獨立の意義を有す。原名は Die Eigenart des weiblichen Sexuallebens (Hitschmann u. Bergler) 口繪に兩ドクトルの肖像を揭げておいた。

吾人が既に說いておいた通り、早期に於ける母親への定着は一種の同性愛の素因をその發達の中に形成するものであり、また女兒が內部性器を有するものであると云ふことを彼女等の早期に說明してやることが不可能であり*、最後にまた、女子の生活に於いて性的主要帶域がクリトリスからワギナに轉換することが如何にも困難である。この最後の事は、別言すれば、少女が（一般の處女が）男性に屬してゐるとも云ふべき肉體個所に於いて性的感情を覺えると云ふことであるのだ。このやうに、少女は自分を男性として想像するが故に、そこに何物をも持たないと望むことよりも、そこにペニスを望むことの方が遙かに自然なのである。從つてまた內部性器の機能が常に容易に進展し難いと云ふことも極めて自然なのである。

註* Hitschmann "Eine natuerliche Schwierigkeit der Aufklaerung". Zeitschr. f. ps-a. Paedagogik., I. Jg, 1927, Heft 7-9.

更にまた、女子にとつて情交の結果が如何に重大であり（姙娠、仕事が障害を受けること、私通に依つて名譽を失ふこと、結婚難）、また現在の文化狀態に於いてその社會的歸結も重大であるかを思ふ時、教育が女子の貞操を强調するのも當然として人々の理解し得るところである。

原始文化は別問題としても、また性的啓蒙や獨立には事缺かぬプロレタリアや農民の生活態度は姑く問はぬとしても、市民生活を送る少女たちにとつては、云はゞ第二の潜在期とも云ふべき抑壓が、彼女等を待ち構へてゐるのである。青年男子たちには既に許されてゐる頃になつても、女子たちにはそれはまだ禁ぜられてゐる。言葉の狹義に於ける貞潔は――つまり、自慰や空想や所謂不法なる啓蒙や媚を示すことなどは別問題として――若い男子にとつてよりも少女にとつての方が遙に容易ならしめられてある。女子が性行爲を望むやうになるためには、最初はその愛人に依つて誘惑せられ、性的亢奮を敎へられなければならない。その時までは、女子はたゞ自分自身をナルチスティシュに愛撫してゐなければならない。併しあまりに早くいろ〳〵の事を知り過ぎると、貞潔の要求が決して守られず、またさう云ふ場合には市民の少女は危險回避のために誘導せられることも斷念するやうになり、或は結果を不安がることからワギナの冷感を伴ふやうになつて來る。

そこで我々は情熱よりは野心から企てられた戀愛關係の多くが失望的に破産して行くのを見るのである。秘密主義と機會の不完全なこともそれ相當の結果を示す。かくの如くにして亢奮は屢々途中で挫折するやうになり、獨身者又は婚約者の滿足は口唇に依つて或は手×に依つて果されることが屢々となる。このやうな狀態は、後年の結婚生活に於けるワギナの不感を促進するのみとなる。何となれば、このやうな狀態では、クリトリスの亢奮を助成し、總て男性的主要帶域を云はゞ增長せしめ、一度增長せしめられたそれ等の帶域は後年になつてもなか〳〵おとなしく引込んでゐないからである。女子が完全なる性愛行爲に於いて完全なる快感を得るために最小限度に必要なるものは、不安感情や罪惡感情を持つてゐないと云ふことである。十分な時間と快適なる寢臺とを持つてゐなくてはならない。そしてその相手たるものもこれと同樣な、第一義的な要求を持つてゐるわけであり、更に相當な技法を心得てをり、神經症的であつてはならない。殊にあまり早くエヤクラチオンがあつてはならないのである。

多くの人々は、結婚することに依りて始めて安靜なる寢臺を得、種々な不安や心配から解放せられるのである。併し女子が快感を完全に享受することを知るためには、これ等の諸條件は必要である。冷感、不安、苦痛に惱む者等は

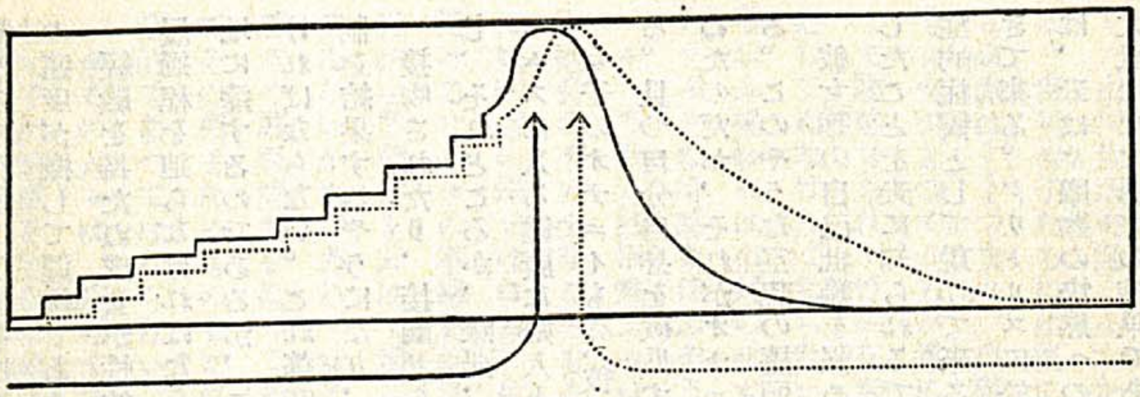
當然その行爲の反復を拒否するが、併し健康なる若き女子たちはその反復を要望する。女子は男子よりもその亢奮への速度が概して遲緩であり、その代りその亢奮の消滅のテムポも亦早くはない。

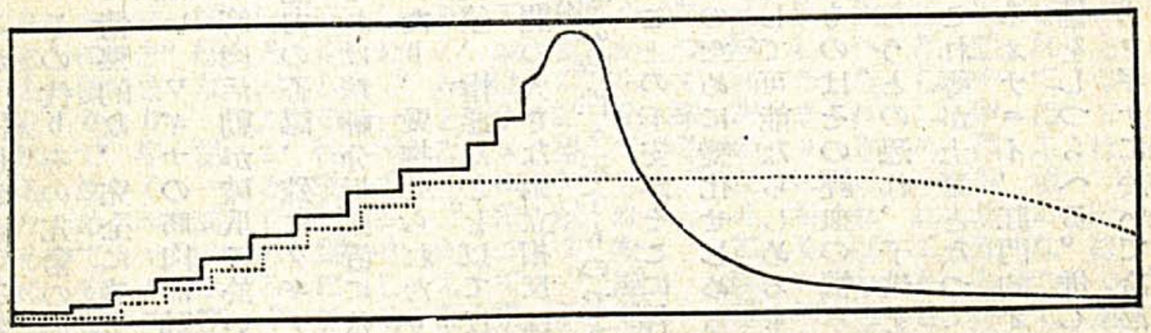
經驗を持たぬ處女が性的に情熱的な、完全に感受的な女となるためには、その豫備條件として錯雜な、無意識的發展過程を辿らなければならない。ワギナの筋肉活動は括約、保持、吸引などを經て遂にオルガスムスに至つて窮極境地に達するのであるが、この筋肉活動が破爪に於いて擡頭し得るためには、その發達期間中に豫めの形成を得てゐなければならない。これ等諸能力の否認、殊にワギナの否認が無意識的動機に依つてなされる時は、これ等諸能力の禁制を結果するやうになり、それは精神分析處置に依つて甫めて復活し來るのである。

接吻されたり、接觸せられたり、愛撫せられたり、或は愛慾行爲を受けたりしても只拒否と不快と冷淡とを以て應じ、それどころか、嫌惡、羨望、憎惡などを以て反應する冷感症者たちと、情熱的な、共感的な、歡喜を以てオルガスムスに入る健康な婦人との間の大きな對立相反は、文明病者と自然人との對比を端的に徵象するものである。

女子のオナニイも亦、彼女等の特性を示すものである。自分を損傷するとの不安が一つのより大なる役割を果してゐたのだが、それがオナニイのために變化せしめられ、去勢せられたとの空想さへもが現れて來ることがあるのである。このやうな空想の擡頭をして可能ならしめるものは、彼女等の器官が外見的に目立たぬことにもよるのである。且つ自分自身を破爪することの不安がそこに伴つてゐる。それのみならず、自分は以前には男兒の如くに出來てゐる。

彼女等の自己批難を强めるものはその經血の惱みである。器官に於いて既に正常ではないとの觀念、オナニイをしたことを夫に知られるであらうとの恐れ、子供を生むことが出來ないであらうと云ふ不安などが、それ以後の恐病症的症候として現れて來る。これ等が土臺となつてそこから結婚や出產への拒否が生じ、從つてまた冷感が當然に起きて來る。クリトリスに於けるオナニイ、肛門的オナニイ、或は禁斷に依つて性器官の周圍に轉位せられたオナニイは、云はゞ摩擦の快感への準備をしつらへる。併し未婚女子が器官に於いてオナニイすることは比較的稀少である。大抵はたゞ誘惑の結果である。ワギナに於いて冷感の素因を持つことに就いては、勿論、これにその責めを歸するこ





とは出來ない。

女子の正常的性行爲の、三段階を記述するならば次の如くになる。第一段に於いては、器官の　　　　　　　　　それが漸次に上昇し來ることが知覺せられ、その持續が要求せられる。同時に、（男子のオルガスムスの直後に起ることが恐らく屢々であるが）、女子のオルガスムスが起り、かくて器官並びにに於ける筋肉の不隨意的縮約の下に、緊張からの解放が生ずるのである。男子の方は比較的早く冷却するが、女子の方はそれに比すると、オルガスムス解消後と雖もそのまゝ共にある事　　　を自己のもの〻内に保持してゐることを要求するのである。このやうな正常なる行爲の經過に就いて、當該婦人が如何なる點に缺陷あるかは、醫師の十分によく知り得るところであらう。上に掲げたる圖解は婦人科醫ケーラーの作製に係るものであるが、　　　の過程を誠によく明示せるものと云ふべきであらう。上圖は正常　　　曲線（可感曲線）であり、下圖は異常　　　曲線（不可感線）を示すものである。連續線は男子の場合點線は女子の場合を意味する。（此項完）

子に對する親の憎惡

北山　隆

小論は本誌四卷四號に掲載せられたフリウゲルの論文「Attitude of Parent to Children」の續論であつて "Psychoanalitic Study of the Family" の一章を成す物である。親心に對する、些かの假借なき、秋霜烈日の如き名論と信ずる。かくて吾々は感傷的な親孝行・母性愛の正體を科學的に認識するであらう。

一、クゥヴァド習俗（Couvade）

親の子に對する憎惡が習俗として表れた物に「クゥヴァド習俗」なる、多く野蠻人の間に行はれる出產時の奇風の存在する事は早くテォドル・ライク教授の云はれた所である。この習俗はフレーザーによれば次の如きものである。

（一）子供の出產前に、父が母の眞似をするクゥヴァド、即ち母親の勞苦を魔術的に父親の方へ移さうとし、母親が實際に受ける苦痛を父親が模倣するもの。

（二）出產後の食物に關するクゥヴァド即ち出產後のある期間、父親が寢所に閉じ籠つたまゝ、一定の食物を避け、さも苦しさうな樣子を見せるもの。

（一）については、母親の受ける危險苦痛に對し、父親が同情及び苦痛を輕減してやりたい焦慮を感ずる事から由來すると考へられる。と同時に、吾々は、母親の苦痛は、母に對する父の敵意を含んだ慘酷な願望をも引き起す事を云はねばならぬ。勿論この願望は深く無意識中に封じ込まれてはゐるが、多かれ少かれ、確に存在するのである。即ち、普通の他人への敵意やサディズムの外に、從來は父親だけが受けて來た妻の世話と愛情とを、俄然吸ひ取つてしまう競爭者（子供）が出現する事に向けられる特殊の怒りが、このクゥヴァドに含まれてゐるのである。

故に、妻の苦しみを見るのも實は氣味のいゝ話であり「妻が死ねばよい」といふ願望すら或程度は夫の心中に存在してゐるのであり、夫が妻の苦痛を分けて貰はうと

するのも妻を助ける努力であると同時に、右の如き願望への返報的懲罰である。この態度は分娩時に於ける諸種の悪魔祓ひにも見られる。悪魔とは心理的に云へば悪意の投出に過ぎない物であるから、悪魔が妻に苦痛を與へると考へるのも、實はさうした苦痛を與へたい願望の存在する事を證明する。それは悪魔祓ひの方法が『打つたり怒鳴つたり、火を燃やしたり、刀を振舞はし、又は刀で叩いたりする』であるのでも判明する。

この出産以前のクゥヴァドは、妻への敵意に由來するに對し、出産後のそれ、卽ち(二)の場合は、子供への敵意に由來するらしい。父親の無分別な行爲によつて、脅かされようとしてゐる、生れ立ての子供の生命健康の爲、是非必要な食物に對してのみ禁制が行はれるからである。(ある食物に對する禁制の最後的原因は殆ど全て子供を殺して食べる事――子供を通じて祖父をも――の禁斷と解してよいものである。)

父親が假病を使ふのも、消極的には父親が寢所へ閉じ籠つて妻に危害を加へぬ様にし、積極的には靜養せねばならぬ妻を假病の看護へ無理に引出さうと云ふのであつて、そこには共に妻への敵意が隱されてゐる。バコーフェン(Bachofen)の如き學者が『クゥヴァドは父の權利と特權を確證する爲であり、母系繼承から父系繼承への推移に關係がある』と云ふのも間違つてはゐない。つまりクゥヴァドによつて、父も親である事を確證し、母が子供の唯一の、或ひは第一の授生者並びに保護者と目されるのを阻げようとする物である事は確である。

二、現代に於るクゥヴァド的感情

右の如き感情は今日の文明社會の父親に於ても少からず現れる所であつて、彼等は自分の子供の出産に際し、自分は一向役にも立たず、重寶がられもしない、といふ不快を強く感ずる。そして、自分が放置され忘れられる事をブツ〳〵云ふのは勿論、時には一種の精神錯亂に陷る事さへあるが、それは他人の注意と同情を求め、母親への關心を引止めん爲である。妊娠及び分娩に關する無數の原始的迷信や不合理な慣習には、かうしたクゥヴァド的感情による物が少くないのである。

上述の原因から起る子供に對する兩親の敵意は、幸福な環境にあつては、時の經つにつれて消失し、又子供によつて作り出された新しい空氣によつてまぎらはされて行く物であるし、それらの憎しみや嫉妬も、親としての愛情によつて克服されるか、少くも抑壓されるのが多くの場合である。しかし、どんな親馬鹿にも多少の嫉妬や反感が無意識中に殘つてゐる事は、分析によつて充分發

見出來るのである。それは特に、親が同性の子に對する場合に甚しく、その際は嫉妬に加へて兩親が子供の爲に『犧牲を拂はされた』といふ感情が付加されやすい。概して次の樣な事——卽ち、個人として又夫婦としての父母の行爲及び享樂が、子供によつて阻害される事實が、多少の程度に於て心的葛藤となつて現れない場合はなく又それから由來する子供への敵意が全く消失する事もない——と云ひ得るのである。

三、自己保存と種族保存

子供が相當に成長すると、親の子に向けられる態度には、更に重大な二つの要素が加へられる。勿論多くの場合には、それらは始めから胚種的な形で存在してゐたのであるが……。それらの要素は共に「子供が種族の歷史に於て親達の自然な後繼者であり、代償者である」といふ生物學的事實に關聯してゐる。しかも兩者の心理上及び社會上の性質と影響とに於ては、明かに相違し、一は子供への嫉妬・憎惡を將來し、他は愛と誇りとを將來する物である。

第一の要素は、子供がやがて（或ひは既に）兩親と同等、乃至より以上の人間になりはしないかと云ふ不快から起るのであつて、父親はやがて必ずや息子の爲に、體力に於て又學問技術に於て、打負かされるに違ひないと氣がついて苦い顏をし、母親は娘の爲に、容貌・魅力・仕事・學問に於て、凌がれる事を心配するのである。かく、自分の力が子供に比して漸次劣勢になつて行くのを知る事は、兩親が既に子供に對し、他の原因から感じてゐた不快を助長する事になる。最初の子供が出來た時、親達は從來の自己中心を止めて、いや／＼乍らも子供への注意、關心、努力を割かねばならなかつたと同樣に、今や親達は、自分の誇りも自己愛も棄てゝ、自然の推移として當然、その優越權を子供に讓らなくてはならない。自己愛感情が正常に發達してゐる親にとつては、右に關して多少の惡感情を催すのは、避け得られぬ所であらう。

しかし幸ひにして、こゝに前記の第二要素があり、之によつて、これら惡感情の多くを、社會上有害ならざる方向へ指し向ける事が出來るのである。之は親が子供を自己に同一化する所から起り、子供を自己の一部に取込み、子供の力量の次第に强化される事を我が事の樣に喜ぶと云ふ感情に存する。それは、あたかも子供が强くなりたいが爲に自己を親に同一化すると全く同樣に、親達がそれによつて、衰へんとする自己の力量の補ひをしようとの試みである。

父親は息子の學問上又は職業上の成功・失敗に對して

吾が事の様に騷ぎ、母親は娘の緣談・戀愛・夫婦生活・姙娠等について、むやみと氣を使ふ類ひである。この同一化には右の外、更に重大な役目が存在する。それ卽ち、個人の免れ得ぬ「死の業」を救ひ、子孫といふ存在によつて地上に於ける肉體の不滅を確證する事である。所謂親心に存在する愛他的傾向――子供への愛、その幸福を願ふ心――も實は自己愛的本能から來る、強い利己的傾向に根ざしてゐるのであり、不死でありたいと云ふ最も深刻な個人的願望は、種族子孫の利益となる強い愛他的本能と、かく合致される譯である。

詳言すれば、親は子供によつて、自身の存在を延長する事が出來るのみならず、自分は既に其の利益を得る事の出來なくなつた色々の利得、特權、成功、享樂などを間接に樂しむ事が出來るのである。厭世家ハルトマンが、幸福の可能性に對する人類的幻想の第三段階に關して云つた事――我々が遂に求め得ざりし幸福は、やがて後生によつて得られるであらう、――は、親の子に待つ心に、最も深い根據を持つ物である。

多くの親達は（大抵は上品な人々であるが）子供が自分の努力によつて幸福を得さへすれば、喜んで働き、それが子供の力となり、一歩でも成功に近づくならば、自己一身を投棄てゝも金を溜めようとする物である。勿論さうした願望は無意識に滅され、多くは幻想的である。吾人の豫想によれば、かうした子供への同一化は今後、人間精神の發達につれて益々深まつて行き、遂に人間は遙か遠い目的の爲にのみ働く事になりはせぬかと考へられる。この豫想にして誤りなくんば、之は種族的社會的の重大問題である。現今に於てさへ、人間の努力と子供の養育、未來への深謀遠慮を喚起する上に決定的な效果を持つ事は明白である。更に又、人が「自己の努力には自分の一身のみならず、子供の幸福もかゝつてゐる」と悟る事は、眞の道德的行爲へ導く、最も高く又最も有效なる力であるに違ひない。

この種の同一化による利益、補償を得た後に、兩親の子供に對する態度は漸次に變化して行くべき物であり、子供の方としては親への依存的な感情を捨てなければならない。之に對して、親はその束縛を寬げ、自分の興味又は感情によつて、子供への態度を左右する事に戒心せねばならぬ。大きな子に對して、親が嬰兒時代と同樣の愛を注ぐならば、子供の對象愛は必ずや甚しく其の發達を阻害され、萬一、子供が愛情を家族以外に向けたとしても――それはなか〳〵困難であるが――それは大抵、子供の失敗となるのを親は見なければならず、やがては子供の恩知らずと背信とを喞す様になるか、或ひは子が

親を棄てて得た愛の對象を嫉妬し憎惡するに至るに違ひないのである。

同樣に、親が餘りに長く、且つ餘りにひどく子供を保護し、絕對權を以て之に臨んでゐると、子供は『當然得なければならぬ自由』を持たうとしなくなる。もし首尾よく親の束縛から拔出したとすれば、今度は親が苦しむ樣な事になつてしまふ。卽ち親は今まで樂しんでゐた子供への支配權を、急にいや〳〵乍ら奪はれ、子供への纏綿が與へてくれた感情の吐け口を失ふ事が非常な苦痛となるのだ。赤ん坊は親（特に母親）のあらん限りの精力と感情を必要とするが、その生長と共に必要量は減る物であり、子供の發育につれて親は最初、子供に集中した感情や關心を再整理し、配分を新にし、方向を變じなければならぬ。親になつた當時の感情傾向を、不當に長く持つてゐる事は、長い間に必ず親子雙方に有害となるのである。

右は一見、甚だ明白平易ではあるが、その結論を實際に運用するとなると、中々なま易しい事ではない。第一親自身が從來の子供に對する態度を棄て兼ねる。それは子供が全く親からの精神的、道德的獨立を得る事のみを目的としてゐるのであるから、親は一向喜ばない譯である。

その上、親の子に對する感情は、容易に他の方向へ轉位され得る物ではなく、親はやがて、早期の親子關係を滿足させる物に、定着を持つ樣になる。子をいつまでも自分の所有にして置きたいと云ふ努力は、家庭に於る最も深刻な悲劇を引起す原因となり、老人と若い者との爭ひの根元となるのみならず、子供の精神上、道德上の進步を阻み、その心理中に絕えざる葛藤を卷き起させ、人格上の重大なる害毒を與へる物である。

かうした親の態度には「變らざる愛」といふ假面を被つた親の利己主義、及び子供の幸福への完全な無視が働いてゐるのであつて、しかも遂には、それが親自身の大きな不幸を齎す事になる。親達のあらゆる努力も空しく多少の差こそあれ、必ず到來するであらう不幸を！——風來坊の友達に引づられるとか、家風に合はぬ風習・興味・不身持ちに陷るとか、或ひは飛んでもない人間と結婚するとか云ふ事によつて、愛する子供が親達を棄て去ると云つたやうなあの恐ろしい不幸を！

四、子供の結婚

子供に強い權力を保留しようとする親達は、きまつて子供の結婚に反對し、その當然の結果として、婿や嫁に深刻や敵意を持つのが普通である。とは云へ、どうして

も結局は子供の結婚を阻止する事が出來ないので、親達は結婚防害の最少限度として、子供が結婚後も親の傍に留る様に計つたり、親の目鏡に叶つた者のみとの結婚を許したりする事になる。

親の目鏡に叶ふとは、つまり子に對する親の權威を、成る可く脅かさない様な者の事であるから、その選ばれた相手たるや、性的魅力の缺乏は勿論、人格的にも賴りにならぬ愚物である場合が少くない。ユングによると、この目的の爲に、娘を白痴と結婚せしめようとした父親の例さへある。

五、結　語

親が子に對する過去の態度を、うまく清算し得るか否かは、家庭生活を健全ならしめる爲の重大問題でなければならぬ。この問題の解決には、二つの方面から之に答へる事が出來る。

第一は親達夫婦の關係が滿足であらねばならぬ事。（さもないと親達相互の悪感情が、子供への過度な纒綿となつて流出する事を、吾々はよく知つてゐる。）第二に、親たる者は常に外部への興味、卽ち趣味又は仕事などに適度の纒綿を持つ事である。かくして、子供の成長後、兩親の精力を要求する量及び時間が漸次減少するに從ひ、それら外部への興味を强化する事が出來る。

この二方面が充分に行はれる時、兩親は子供への權力を必要に應じて清算する際に生ずべき不快・苦痛を最小限にすませることが出來るのである。（完）

正常兒と異常兒

木村廉吉

1

兒童教育や兒童心理は旣に一般の關心となり常識の問題となつた。以前は封建時代の遺風としてその道德觀や家族制度に基づいて長者を重んずる風厚く、一般の問題としては子供の事は閑却され勝ちであつたが、將來の時代を背負つて立つべき兒童の研究が次第に重要視されて來たのは當然の事である。

從つて教育の上から取扱ひの上から又社會上の問題としても、異常兒の事が屢々論議される。

正常兒に對して異常兒とは如何なるものであらうか。

通例異常兒とは身體の異常なものすなはち特殊の畸形兒とか、虛弱兒等を指さずに精神狀態の異常な子供を指し、しかも精精狀態の異常にすぐれた子供よりは精神狀態に缺陷のある或は精神狀態の劣つた子供を指すのを常とする。

次に異常兒を精神薄弱兒（低能兒）と性格異常兒とに區別する。性格異常兒とは性格に異常のあるもの、すなはち感情や行爲に異常の傾向を示すがその智能の發育は劣つてゐないものを指し、精神薄弱兒は智能の發育がその年齡に比例して低下し停滯してゐるものを云ふのである。

更に精神薄弱兒はその智能の低下の程度を標準として白癡、癡愚、鈍愚の三者に分けられる。白癡は最も高度な精神薄弱を示して成長後に於ても滿六歲兒童の智能以下に止まるものを指し、癡愚は滿十三歲の正常兒の智能以上に發達し得ぬものを指し、鈍愚は最も輕度のものすなはちその智能程度が癡愚と普通人との中間にとゞまる

ものである。もとより子供に就いて嚴密に區別はし難いがその智能の發育狀況によつて或る程度までは定める事が出來る。

性格異常兒は又精神變質兒と變質兒にあらざる異常兒とに分けられる。

變質兒は又種々に區分されるが、その性格は癲癇的性格、ヒステリー的性格、奇矯的性格等が擧げられる。癲癇的性格といふのは癲癇病者の子供の時代の性格に一致する性格といふ意味で、從つてかやうな性格を有する兒童は、後に癲癇病を發するかも知れないのである。そして癲癇的性格兒の特徵としては感情の刺戟性が強い事、過度の整頓癖を有する事などが著しい。ヒステリー的性格はヒステリー症者の有する性格に相當するもので、かやうな兒童は又後にヒステリーを發するかも知れぬ。その特徵としては感情の發露が大袈裟で誇張的であり慾望を達するために執る方法が露骨な事である。奇矯的性格といふのは偏屈、人嫌ひ等の點を示して他のものと妥協したり行動を共にし難い性格で病氣で、云へば早發性癡呆症に相應し又乖離性の性格とも云はれやう。

2

すなはち以上に述べたところによつて異常兒を從來の醫學的見地に從つて區別すると大約次の如くなる。

- 異常兒
  - 精神薄弱兒（低能兒）
  - 性格異常兒
    - 狹義性格異常兒（變質兒）
    - 廣義性格異常兒

そのうち精神薄弱兒は先天的の原因或は後天的の病氣や外傷によつてゐるが大抵は腦髓その他に器質的の缺陷を有してゐて、その本能を如何にあらはし周圍に如何なる反應を示すか、云ひ換へれば如何なる型の傾向を示すかと云ふ事以外には精神分析的の興味は薄い。變質兒も亦生來的の素質が濃厚で教育の影響を受け難いとされてゐるから、觀察的研究以外には精神分析の對象となり難く結局、生來の素質には異常は無いが生れてからの育て方や生活環境によつて起る廣義の異常兒が教育可能であり又精神分析學の適當な對象となる事になる。

しかしながら精神薄弱兒は智能測定その他によつて定められるが、人格發達の途上にありいろ〳〵の本能を端的に示す子供を正常か異常か見極める事は相當困難であり、變質兒か後天的の性格異常兒かを見定めるのは更に困難であると共に一面これは教育の上に重大な點であるから、子供の本能と精神發達とを主要の研究とする精神分析學は子供の觀察や取扱ひの上に缺くべからざるものと云はねばならぬ。

次に廣義の性格異常兒とは如何なるものであらうか。

これにもいろ／＼な定義が下し得られやうが、大體內向的傾向或は外向的傾向の一方が極度に強まつて偏頗な性格となつてゐるものと見てよからう。この意味では大槻憲二氏のとつてゐられる次の分類は誠に適切と思はれる。（『不良少年少女の心理とその分析的取扱方』本誌 第五卷第二號）

精神的健康兒 ｛ A、ナルチス型の兒童
　　　　　　　 B、轉嫁的の兒童

精神的不健康兒 ｛ a、非社會的兒童
　　　　　　　　 b、反社會的兒童

すなはちこの場合の性格異常兒は主として生後の育て方や生活環境によつてその內向的傾向（或はナルチス的傾向）が過當に強められて引込み思案になり臆病になつたもの、或は外向的傾向（轉嫁的傾向）が過當に強められて粗暴になり輕噪になつたものであるから、その育て方や生活環境を注意すれば教育によつて矯正し得るのである。

　別に子供が發達の途上不可解な難問に行き當つたり或は本能慾求に對する抑壓が強く働いたりしたが爲に一時的に異常な態度を示す事もあるがこれは前述の場合の異常性格等とは區別しなければならぬ。

3

今まで述べて來た事は大體學理的な定義や分類であるが、次に立場を換へて實際的方面から考へて見ると、問題となる子供は通俗的には學問の出來ぬ子供（成績不良兒、劣等兒）と惡い子供（性格不良兒、不良兒）とに分ける事が出來る。

　劣等兒は不良兒の如く積極的に他に迷惑をかけたり反社會的な行動に出る事は少く、特殊教育等によつて或る程度まで解決はつくが、注意すべきはいはゆる學校の出來の惡い子供の中には眞實に智能の低い劣等兒と然らざるものとがある事である。智能の低いが爲に成績の惡い子供はその智能の程度に應じた對策を採るの他は無いが他の原因で成績の不良になつてゐる子供はよくこれを見分けてその原因を除く事が重要である。例へば智能は劣等でなくとも引込み思案で學校を嫌がるとかおちつきが無くてよく覺えぬ子供もあるし、或は何か精神葛藤があつて學問の方へ氣が入らぬ場合或は劣等感に妨げられて能力を充分出す事が出來ぬ場合も考へられる。教育者なり家庭の保護者がこの點を見きはめて適當な指導や注意を怠らなければ成績不良兒の或るものは當然救はれるわけである。又智能の發達する能力はありながら身體が虛

弱な爲或は營養が不充分な爲にその力を出し得ぬ場合は又それに應じた方法、すなはち健康狀態をよくするとか缺けてゐた營養を與へる事などが必要な事は云ふまでもない。

性格不良兒或は不良兒は本能的行動に出づる事が多い爲に劣等兒に較べて社會的に複雜な問題を提供する。これ等の不良兒の中には又精神薄弱に基づく不良兒、變質性の不良兒及び主として後天的の原因による不良兒のある事を忘れてはならぬ。精神薄弱兒は智能の發達が不充分な事と並行して精神發達も完成されず上位自我の形成が困難で道德的の缺陷を有するを通例とし、加ふるに事に際しての判斷力も鈍いから反社會的行動に陷り易く、精神薄弱の程度の強いもの或はぼんやりした遲鈍型のものは比較的無事だが、興奮性の鈍愚者などは特に危險が多い。

かやうな精神薄弱に基づく不良兒や變質的傾向の強いものはその矯正が中々困難であるが智能も劣等でなく先天的素質もそれほど強くなく生活環境が惡く指導を誤まつたが爲に生じた不良傾向は矯正不可能でなくかやうな場合には精神分析を用ひてその經路を明かにし治癒を望み得る事も多いにちがひない。そして實際には變質によるか後天的の影響によるかは必ずしも明かに區別し得ず變質の如く見えても幼時のいろ〳〵の影響が働いてゐる事が案外多いと思はれる。

不良兒や不良少年の教化はかなり困難な問題とされてゐるが、すべての不良兒に對して無差別劃一的な方法をとつては一層能率が上り難い。智能の低い不良兒は監督や拘束がある間は無事であつてもそれを除けば又不良行爲に陷ると知らねばならぬ。智能に缺陷がなく家庭その他の後天的影響による不良兒は充分教化の對象になり得るのである。

兒童の智能が高いか普通か或は低下せるかはその表情言語、態度、行動から大體推察する事が出來るが、智能測定法の如きを用ひて定める事も出來る。例へば鈴木治太郎氏の方法によれば智能指數七〇の者は六學年の間に尋常三年乃至四學年の學習に堪へ得、九〇以上に至つてやうやく尋常小學の課程を在學中にどうにか學び得るものとされてゐる。異常兒や不良兒の場合も智能指數九〇以下のものは矯正の見込みが薄いと見なければならぬだらう。

教育者の爲の精神分析概論（アナ・フロイド）

宮田齊譯

　成人は此の時期の兒童が汚らしくて、見るからに厭な氣持を起させるなどゝいつも叱言を言ひながら、そのくせ「何といつてもまだ小さくつて、智慧がついてゐないし、美的觀念も充分には發達してゐないのだから、清潔も汚いもゴッチャで區別できないのだ」とか、「嗅覺の訓練が不足だから芳い香りと惡臭の相違が分らないのだ」とか言つて大目に見てやらうとする傾きがあります。私から見れば、これは、兒童を觀察する者として抑も偏見に囚はれた誤謬に陷つてゐるのであります。試みに二才位の幼兒を注意深く觀察して見れば、その嗅覺が正確であることは誰にでも明瞭に分る筈です。成人と異る點といへば唯その評價にあるのです。例へば、成人には大層いゝ匂ひだと思はれる花の香りでも、その香りを嗅いで「あゝいゝ」と嘆息するやうに仕込まない限り、幼兒には何の意味をもちません。さて、私共にはイヤな匂ひだと感じられるものでも小兒にはイヽ匂ひのこともあります。勿論、兒童が惡臭を悦ぶことを惡い習慣の一つに數へるのは成人の勝手ですが。

　兒童のこれ以外の特性を考察して見ても、此の種の關係が認められます。例へば、兒童の殘忍性といふことは昔から著しい事實として擧げられて居りますが、その說明は單に小供の無智といふことだけに止つて居ました。兒童が甲蟲や蠅の足を捥いだり、翅をむしつたり、小鳥を殺したり、非道い目にあはせたり、或はまた玩具や日用品を打ち毀したりするのは、結局生物に對する同情能力（Einfühlungsvermögen）が缺けてゐるためであり、また物品の金錢的價値といふものが理解出來ないためなのだとして寛大に取扱はれて居つたのであります。けれども、私共の觀察は此の點に就ても異つた說明を與へてくれます。私共の見るところでは、小兒が動物を苦しめ

るのは、さうすることによつて彼等に苦痛を與へることが分らない爲ではなく、却つて、さうすることが正に苦痛を與へるのであり、またその目的の爲には全く無防禦の甲蟲が一番手頃で、危險性の無い生物だといふことが分つてゐるからこそやることなのであります。品物を毀す場合にしても、毀すときに經驗する快感のために その品物の實用的價値が全く忘れられて了ふのです。指を舐つたり、汚物をコネまはしたりする時と同じやうな表情を示して、熱烈に斯うした仕事に沒頭してゐる兒童の様子を見れば、此等の行爲の動機は容易に推察することが出來ます。つまり、此處でも快感が問題なのです。清潔敎育が完全に行はれて、兒童が自らの抵抗に逆つて排便作用の制禦に慣らされて了ふと、肛門の周圍の帶域も快感を獲る手段としての意義を喪失し、新たに、もつと重要な部分がその代りをつとめることになります。卽ち、小兒は自分の性器を弄びはじめるのであります。此の時期になると小兒は自分の身體と、兄弟姉妹、或は遊び仲間の子供達の身體との相異を知りたがり、性器を露出してこれを他の子供達に示し、その代償として彼等のものを見せて貰ふといふやうなことが面白くなります。また、兩性の差別と、それと暗に結びついた赤坊の出生といふことに就て、熱心に質問して成人を困らせます。

ちやうど此の三才から五才の頃に兒童がいろ〳〵の方面から達する發育の全盛期は、敎育の任に當る成人から見れば、まさに手のつけられない困つた時期でもあるのです。

斯様に兒童は、玆に述べました發達の全過程を通じて自己の快樂を滿足させ、本能的の願望を遂げることが此上ない重大な仕事であるかのやうに振舞ひ、また敎育の方では此等の目的の遂行を妨壓することが最も緊急を要する課題であるかのやうに心得て居るやうで、そのために、敎育者と兒童との間には絶間のない、しかも決して落着することのない小競合が起るのであります。敎育者は、兒童が汚穢を愰しむ傾向を不快の感で、無恥を羞恥心で、殘忍性を同情心で、激烈な破壞欲を勿體ないといふ感情で、夫々置き換へようとし、彼等が身體に對しても つ好奇心と働き掛けとを禁止によつて克服し、向ふ見ずを愼重に、利己主義を利他主義に換へようとします。かうして敎育は一歩一歩兒童の要求と正反對のものを求め彼等の衝動激發の反動を以て自らの目標とするのでありま す。兒童にとつては、快感の獲得が生存の主要目的であることは以上述べた通りでありますが、これに對して成人は斯様な內部的衝動の要求よりも、外界からの要求の方を重要視するやうに敎へ込まうと致します。處が兒

童の方では、とても我慢が出來ないで、一向落着かず、ただ其場限り注文通りにするだけにすぎません。成人は衝動の滿足を取除いて將來の計をたてるやうに敎へるのですが。

偖て、私のお話し申した所によれば、例へば指を舐つて快感を得る操作と、性器を弄ぶ、つまり自慰を行ふことによる快感獲得との間には何等の本質的差異も認められないことに御氣づきになつたと思ひます。事實精神分析の立場からすればそのやうな區別はあり得ません。只今申し上げたやうな快感獲得行爲は幼兒の衝動滿足を目的とするものであつて、それがよし性器そのものに就て達成されやうと、或は口唇乃至は肛門の帶域で行はれやうと、それには係りなく、凡てを一括して精神分析の方ではこれを性的なもの（das Sexuellen）といふ概念の下に包括して居るのであります。つまり、四才から五才の頃の兒童に於て、性器帶域が演ずる役割と、生後一ケ年の頃に口唇が、また二才の頃に肛門が演ずる役割とは全く同じものなのです。一體性器帶域は、それが最も重要な役割を勤める成人の性生活から推しはかつて見れば、口唇や肛門よりも遙かに重大な意義をもつてゐるわけですが、それはその通りとしても、なほ幼兒の快感帶域の意義が失はれて了ふことはありません。此等の帶域から快感を得るといふことは、いはば、本格的性行爲の準備的豫備行動なのです。

處で、小兒が最初の快感を獲得する帶域がその成人となつた曉の性生活に於て、たとひ副次的であるとはいへ或種の役割を演ずるといふ事實だけを擧げたのでは、此等の帶域及び、それによる快感獲得行爲を直ちに性器乃至性器による（正常の）性行爲と一般に性的であるときめて了ふ根據としては不充分だと思へるかも知れません。が、精神分析は、またこれ以外の事情から推して、斯かる分類の妥當を裏書きするのであります。例へば、以上に述べて來た幼兒的衝動滿足法のどれか一つが、成人の生活に於ても性器帶域の下位に立つことを肯せず、飽く迄主導的な立場を執りつゞけて、性器帶域の役割を奪ひ、性感の滿足をこの特殊な場所によつてのみ求めるといふやうな異常な場合があります。一般に斯樣な現象を變態者（Perverse）と申しますが、その特徵とする所は、彼等が生活の最も重要な一部面である性生活に於て幼兒期の段階に止まりつゞけてゐるか、或は何かの機會にそこ迄逆戻りしたかにあるのであります。で、成人の性生活に於ける此の種の異常現象を理解すれば、抑も敎育が何故あれ程迄に、幼兒の發育期を通じて彼等の衝動滿足の發動を防ぎ止めようと努力するかが甫めて理解

の方できることゝ思はれます。

小兒が通過しなければならない發展の諸段階は、いはば、豫め定められた終點に向つて旅を續けて行く途すがらの停車場のやうなものであつて、若しもそのうちのどれかに停車したまゝ動かないでゐると、やがて其處に停滯して了つて、それから先の旅、つまりそれ以後の發育を止めて了ふやうな危險が起つて參ります。

處が、斯樣な見解が未だ學問的に充分基礎づけられないずつと以前から、どの時代の教育者も、此の危險をよく承知して居つて、兒童が所謂最終の段階に達して了ふ迄は、途中で道草を喰つて、どこかで滿足したり、定着したりしないやうに、卽ち發育の段階を眞直ぐに登りつめるやうに、取計ふのが自分達の使命であると考へて、いろ〳〵苦心して來たやうに見受けられます。此の恐るべき幼兒の快感獲得行爲と抗爭する爲に教育がその昔から採用して來た方法は二種類ありますが、その一つは「舐るのをやめないと指を切つて了ふよ」などと警告する方法で、乳母や繪本が、あらゆる機會に、あらゆる形式で用ゐて來た脅迫法であります。此の方法を用ゐて成人は實際に暴力でもつて大切な身體の一部分を傷けられて了ふのではないかといふ恐怖心を兒童に起させ、その結果此の部分から快感を獲得しようとする試みを斷念させようとするのであります。今一つの方法は、「そんな事をするともう可愛がつてやらない」と脅すやり方で、此の場合兒童は、兩親の愛を喪失するかも知れないといふ危險に曝されることになります。斯うした脅迫的教育法は前回のお話しで述べたやうな幼兒の特殊な立場、つまり强力な成人の世界に伍して全く頼るところの無い、無力な、兩親の愛に絶對的に依存する外はない、立場に應じて效力を發するのであります。

此等の方法は兩つながら、同等の效力を現はし、兒童は壓倒的な危險に脅かされて、當初の目的を抛棄するやうに訓へられます。尤も、最初のうちは、成人に對する恐怖乃至は愛のために、自分の態度を改めるが如く裝ひ自分には善いと思へることを惡いと思ひ、不愉快と見るやうにつとめる程度ですが、追々成人と同化して行くに從つて、此の（後天的）價値觀を眞實に認め始め、以前に感じてゐたことを忘れ、幼兒期に欲求したことを否定し、遂にはその昔の感覺的滿足に關聯してゐた感情(Gefühle)を完全に逆にして了つて、後戻りを防ぐやうな結果になつて參ります。斯樣な變革が完全に行はれればれるだけ成人は自分等の教育活動が成功したと考へて滿足するのであります。

成人が兒童に强制する幼兒的衝動に基く快感獲得行爲

の拋棄は、兒童の精神的發育の上に二つの意義深い結果を齎します。第一は、自分が受けた强制的要求を逆に外界に向けて發するやうになること、と申すのは、一生を通じて、自分と同じ道程を辿らずに依然幼兒的な帶域から快感獲得行爲を營んでゐるすべて者を容赦しないやうになつて了ふのであります。此樣な者に對して彼等が感ずる道德的義憤は、私共から見れば、彼等自身がその昔の子供時代にやつて來た衝動抑壓の度合を計る尺度に外ならないのであります。

斯樣に、幼い頃あれ程好んでゐた快感の體驗を捨て去つて了ふと同時に、それに關聯した時代のすべての感情體驗をも記憶の埒外に驅逐して了ひます。回顧すれば、唯不快な、不甲斐ないものに過ぎない過去を忘れて了ふのであります。そしてその結果、重要なるべき幼兒期の體驗に關しては前に申したやうな*一見不思議の感を起させる記憶の喪失・不透明・缺陷が生ずるのであります。

（第二講終り）

* 第一講參照（本誌第四卷第五號）

附　記……譯者の一身上の都合で此稿が中絶してゐました事は讀者並に編輯者の御期待に對し洵に慚愧に堪えない次第であります。謹んで恐縮の意を表します。

前號正誤表

頁	行	誤	正
二	一四	衰頽に	衰頽の
四七	下一七	必要がら	必要から
四八	下二〇	秀向	秀吉
五〇	上一四	例って	依って
五一	上二〇	干姫	千姫
七三	下四	編考	編輯者
同	下五	對象とも	對象とし
七四	上二	家なき兒	小公子
一〇〇	下二	好敵	好敵手
一〇一	中一一	ありなどの	などの
一〇六	下八	能分の	自分の
一一二	上二〇	臺灣	臺北
一一四	上二一	せいぞい	せいぜい

ナポレオンの精神分析（承前）

Der Wendepunkt im Leben Napoleon I—Ludwig Jekels.

延島英一

三

從つてナポレオンとパオリの衝突は、結局二つの公式――「外國人と通謀して祖國を攻擊した」といふことゝ「コルシカとフランスの結合に協力した」といふ二つの公式に要約されるのである。こゝで我々は精神分析的說明の不可缺を感ずるのであるが、それはこの點に關して我々の見地が、幼年ナポレオンに性的指向でなく、とかく政治的指向の方を歸したがる非分析世界と撞着するからである。我々は非分析世界とは反對に、幼兒に於ては最初は抽象的な愛着的表象はないとし、具體的影像しか知らぬ幼兒の心が抽象を用ひるのは、具體的表象にそれを代へる場合に限られるとするのである。分析の任務はその表象の原型を探るにあるといはねばならぬ。

問題を正確にして見やう。上に擧げたナポレオンの言葉の中で、「祖國」（卽ちコルシカ）及「フランス」（卽ち外國人）は何を意味してゐるのであらうか？

旣に前にも多くの引用を藉りて明かにしたやうに、この時代にナポレオンの書いたものゝ中には、コルシカに對する强い又不變の愛が殆んど間斷なく反復されてゐるのである。この祖國愛の主想は、それら文章の中でいろ〳〵な形をもつて姿を表はし、あらゆる角度からそれは論議、檢討、分析され、その存在理由までが複雜多樣な研究の對象となつてゐるのである。コルシカに關する歷史的論文にせよ、彼に自殺を思慕させた鬱憂症の一時的發作にせよ、祖國愛と過度な名譽欲との間に存する對照にせよ、「愛に關する對話」及「リヨンの演說」にせよ、ナポレオンはどんな問題に觸れても、結局最後は必らず

いつも祖國の問題に歸つてゐるのである。從つて我々はそれがナポレオンの無意識に根を張つてゐる壓倒的に强い表象だといふ印象をどうしても禁ずることが出來ない。シュケエは、非分析的な素朴さをもつてそれを次のごとくいつてゐる。

「從つてボナパルト中尉の表す愛は、故郷小島國に對する愛の他にはなかつた。彼は他の熱情に對しては、すべて風馬牛の觀があつて、その作つた小說の一つに出る人物と同じく『私はコルシカに於て生命を得たが、その生命と共にわが不幸な祖國及その獨立に對する猛烈な愛をも亦得た』といひ得るかのごとくであつた。」（新しいコルシカ）

これこそ私が神經症患者の分析に當つて屢次確認したところを、象徵又は比喩形式によらず最も明瞭に表明してゐるものである。卽ちそれは祖國が母の假面的表現であり、祖國に對する愛は、適切にいへば母に對する愛だといふことを表明してゐるのである。この祖國と母が同義だといふことは、既にギリシヤ時代から認められてゐたことを我々は知つてゐる。けだしヘロドトスの中に次の一文があるからである。

「去るほどにビジストラートの子ヒッピアスは、その前夜睡眠中彼に現じた幻想により意を固め、蠻人軍をマラソンに導いた。彼は母と褥を共にした夢を見たのであるが、この夢をもつて彼は自分が再びアテネに歸り、その主權を恢復し、自分の住家で晩年を迎へる兆と見たのである。」（エラート）

祖國といふ表象は、精神分析學派の間では母性的意味を有することが既に常識となつてゐるが、この祖國といふ表象が又土地の影像と同一の愛著的價値及起源を有することについては、私はディトリッヒ著「ムッター・エルデ」（註一）、ジュリアス・シーザーの夢（註二）、タルキンの神託（註三）などを例に擧げるが、このことは又母なる觀念と祖國なる觀念の間に如何なる變化が生じ得たかといふことを、ドイツ語の「ファターランド」（父なる國）といふ言葉が明瞭に示してゐるのを我々に豫想させるのである。

註一。アルベルト・ディトリッヒ「母なる大地、民族宗教に關する一試論」。ベルリン、一九〇五年、トイブナー刊。

註二。オットー・ランク「創作及傳說に於る近親姦モティフ」二三七頁。スエトニウスはこれについて次のごとく語つてゐる。

「彼に不安を感ぜさせたその翌夜の夢——何故なら彼は母と褥を共にした夢を見たのだ——についてさへ、夢卜者たちはこの上ない希望を與へて彼を激勵した。彼等の判ずるところでは、それは彼が全世界を支配する前兆であるとい

ふのだ。そのわけは彼が自分の下に寢てゐると夢見た母は卽ち万物万人の母なる大地に他ならぬといふのであつた。」

註三。ティト・リィヴ卷一。「人に先だち自らの母を抱く者はローマを支配するに至るべし」。これをブルータスは母なる大地の意に理解した。

これに關する一例として、私はスラヴ系のすべての國語に於ては、國又は土地の語源は祖國を意味する言葉の中にはなく、父に屬するものたるを示す接頭字ヅナ又はナ等をもつてそれに代へてゐることを附加へて置く。

ナポレオンの文章の中に極めて頻繁に見られる隱喩、例へば「汝の祖國の胎中に」（コルシカについて）とか、「アテネは彼――シモンの子――にとつて常に母であり祖國である」（祖國愛について）とか、「それは子を母に、市民を祖國に結びつける感情である」（リヨンの演說）とかいふ類の對照は、確かに我々の解釋の辯護に役立つものである。同じく我々の見地を支持するものに、又ブッタフオコ宛の書翰にある對照の中にある誇張に類する可應性がある。

「何んといふ！ 同じ祖國の子でありながら、君はこの祖國に對して斷じて何も感じないといふのか？ 何んといふ！ 君の心は君の子供時代の遊び場であつた岩山を、木々を、家々を、山水を見ても動かないといふのか？ 君がこの世に出ると、彼女（祖國）は君をその胎の中に宿し、その果實をもつて君を養つた。君が物心つくと、彼女は君の中に希望をつなぎ、君に信賴せられる者の名譽を與へた。彼女は君にいつた。わが子よ、汝はわが困苦の狀を見て知つてゐる……」

我々はこれからこの分析の鍵を試驗に附し、ナポレオンの青年時代の著作の若干によつて、それをいはゞ吟味に附して見やうと思ふ。

四

「祖國愛について」と題する論文は、彼が十八歲の時、家事上の用件による旅行の途次、暫らくパリに滯在してゐた折（一七八七年十一月二十七日）に書かれたものであるが、それがいかなる精神狀態の中に執筆されたかといふことは、ナポレオン自身の次の言が最もよく示してゐるのである。

「私はまだやつと熱情のあけそめる年齡に達したに過ぎず、私の心は、この最初の人間に對する知識によつて私の思想の中に生じた革命のために、未だ動搖を脫しないのである。」

この言葉、並びにそれに續く彼の思想の過程を理解するためには、ナポレオンがこの論文を書いたのは彼が實

笑婦の許で一夜を過した五日後であること、從つて最初の性的冒險の後であることに注意せねばならない。この性的冒險については、彼は「パレー・ロワィヤルの邂逅」と題する一文の中に、絶對に確實な文書を我々に遣してゐるのである。だがこの一致を强調するのは、性の色眼鏡で世界を眺める精神分析學派だけではない。けだしこの件に關し何んらの先入主も持たぬこと確實なゲルトルーデ・キルハイゼンも、同じく女性のみに見られる烱眼をもつてこの事實を認め、次のごとくいつてゐるからである。

「しかしながらナポレオンがこの生涯の大事件を記錄して置いたのは、それが彼に忘れ得ぬ印象を殘したためであると想像するのは失當たるを免れない。一女性とのこの偶然の邂逅を彼が述べてゐるのは、內部的な感動又は興奮によるといふよりは、その生涯の危機をすべて記錄して置く彼の性癖、又は主義によると見る方がよからう。ナポレオンの心で最も關心されてゐたのは祖國愛であり、その他の興奮は、たとへ肉慾的に過ぎぬものにせよ、そこに持續的に位置を占むることは許されなかつたのである。ナポレオンは、このパレー・ロワィヤルの冒險からそれと全く別個の印象を拂拭するには、相當の葛藤を經なければならなかつた。彼は自分が唯一の眞實視する愛國的感情だけがそのまゝ存續することを圖つて、あらゆる肉體的興奮の抑壓に力を用ひねばならなかつた。その五日後、卽ち十一月二十七日、彼は誰と指名せぬ一婦人宛に、愛國心に關する獨白を執筆した。ナポレオンは、匿名の覆面の中にパレー・ロワィヤルの賣女を指定するほどうぶであつたらうか？ それは極めて可能なことである。」

たとへナポレオンのこの自筆記錄がなかつたとしても彼にとつて戀愛と性本能の問題が益々激烈な、益々緊急な問題になつてゐたことを述べるのは困難ではない。それがどれほど激しくなつてゐたかといふことは、この「邂逅」の際、「誰よりもその職業の怖ましいことを洞察し、一目見られたゞけでも身が汚れるやうに常に感じてゐた」ナポレオンが、自分からその「淫をひさぐ女」に聲をかけたといふことでよく分るのである。この論文（祖國愛について）の中で、彼は現代をスパルタ及アテネ時代と比較し、往古には祖國愛がすべてに君臨してゐたが、現代では戀愛のみが支配してゐると說き、この二つの熱情はその結果に於て正反對となるが故に兩立し得るものでないと斷じてゐる。けだしある國民が戀愛の奴隷となれば、愛國心の衰徴は免れぬからであるが、近代人が殆んど愛國心を持たぬのも、又その故であるといふのであ

る。

前に示したナポレオンの心的傾向を考慮にいれて、この省察をナポレオンその人に當嵌めて見やう。もしナポレオンを國民の代りに置いて見ると、スパルタとアテネは彼の幸福な幼年時代を指示するに過ぎぬものとなり、この省察は自分が女色に耽ることにより、母に對する愛が害はれはせぬかといふ恐怖を表明してゐるに過ぎぬものとなるのである。言葉をかへていふと、彼の中で彼の色慾的な過去と現在が闘爭を行つてゐるのである。

我々はこの解釋を支持する記述をまだ他にも有してゐる。それはこの同じ論文だが、ナポレオンはそのすぐ後で近代婦人に向ひ、傲然たる又不遜な態度で次の如く述べてゐる。

「だが汝の車に男性の心を鎖で結びつけてゐる女性、華々しい外貌のみを生命としてゐる性よ、汝はこゝ(スパルタ)で汝の勝利を顧りみて、汝の現狀を恥とせよ。」

彼は近代の婦人にスパルタの烈女を模範と、實例とせよと敎へてゐる。かういふ烈女の中で一人彼の熟知してゐるものがあつたが、それは彼の母レチシアであつた。ナポレオン傳記者の一人シュケエは、彼女を次のごとく描いてゐる。

「氣高い、豪膽な、失望を知らぬこの婦人の肉體には、男の心が宿つてゐた。島の獨立が終りに近づいた頃、彼女は夫に從つて森の中や山地を轉々とした。軍の情報を得るために、女の安全な避難所である斷崖を離れることも彼女にはしば〳〵あつた。彼女は男たちが戰つてゐる戰線まで進み、彈丸の風を切る音を耳にしたが、彼女の心を占めてゐたのは夫の危險とコルシカの安全の他にはなかつた。彼女はその時ナポレオンを懷妊してゐたが、腹に宿してゐる子を後に腕に抱いた時と同じ幸福、同じ平靜をもつて大切にしたと自分でいつてゐる。」

これがパオリがグラッカスの母コルネリアに比したレチシアの過去であり、名聲であつた。この母がその若い男の子の眼に烈女の典型として映じたのは、毫も異とするに足りないのである。

さうだとすれば青年の單なる熱狂と感憤をもつて書かれたこの論文、このいはゆる批判的吟味は、後に論ずる別の解釋は暫く措いても、明白な母コンプレックスとの闘爭を我々に示すのであるが、この母コンプレックスは又母コンプレックスで、その存在維持のための闘爭を行つてゐるやうに思はれる。既に前に見たごとく、靑春の氾濫は嫌も應もなくナポレオンを驅つて異性に近づかせたが、それは當然母に對する疎遠を起させ、猛烈な闘爭を無意識の中に發生させたのである。彼が一般に祖國愛

なるものが存在するものか否か（即ちそれは名譽慾ではないか）と自問した一つの事實だけでも、彼の心内で離反の傾向が既にその作用を起し、その傾向のために動揺した母コンプレックスが、彼にすこぶる强い意志表示をなさしめたことを明かに示してゐるのである。この動揺の過程の中に、母コンプレックスはすこぶる明白にその姿を現してゐる。例へばナポレオンが、ペルシャの力を藉りれば確かにギリシャを征討できたテミストクレスが、「わが子らよ、我々は死なずにはゐたが實は死んでゐたのだ」といつてそれを止めたことを擧げ、空虚な虚榮心に驅られ、「自分らの生れるのを見た故國の山河の劫掠される」のを恥ぢなかつたアルトワ、オルレアン、コンデ輩のフランス人の功名を、このテミストクレスの例と對比してゐる場合などがそれである。――我々が、それが實現すれば確實に滅亡を招く母に對する近親姦願望を拋棄せねばならぬ必要が明白に表明されてゐるとするのは、正にこの點なのである。

母コンプレックスを中心とし、それを擁護しそれと衝突するこの闘爭は、それに續く四年間にナポレオンが執筆した一切の文章の潜在的題目となつてゐるのである。往々この母コンプレックスは土地をもつて象徴されてゐるが、その例は「リヨンの演説」の中に見られる。この「リヨンの演説」は、「人類に幸福を齎す教育に於てはいかなる眞理といかなる感情が最も重要であるか」を主題にした懸賞論文募集に應じて書かれたものであるが、シュケエがいつてゐるごとく、ナポレオンは社會的及政治的改革案を利用して、それに「心のすべてを傾注し」、「その思ふところを吐露したのであつた」。殊に彼が實例を基礎として、幼年時代の過ちを經て青春期に達した一青年を論じ、次のごとく述べてゐるのにそれは甚だよく表はれてゐる。

「彼の逞しい腕が、彼の窮乏と相俟つて勞働を求めてゐる。彼は自分の周圍を見まはし、僅かな人々の手に分割されてゐる土地を見た」。そこでこの青年は社會的指揮者の許に赴いて相談したが、指揮者は彼に所有權の文書を示すだけで何もしなかつた。青年はこの不滿足な返事に腹を立て、憤怒の叫びをあげた。「何んだつて！　それがあの旦那方の權利だといふのか。俺の權利はそんなものよりずつと神聖、ずつと確實、ずつと全般的なものだ！　それは俺の汗と共に書換へられ、俺の血と共にめぐり、俺の神經に、俺の心臟に書かれてゐるものだ。それは俺が生存して行くために、殊に俺の幸福のために必要なんだ！」

この叫びは、ナポレオンにあつてこの「土地」といふ

表象が、いかほど強いリビドォ纒綿を持つてゐたか、そして又このリビドーがどれほど僅かしかその強度を失つてゐなかつたかといふことを明瞭に示すものである。

五

この母に對する強い定着があるといふ推論は、象徴の解釋によつて得たものであるが、私はこの推論は、ナポレオンの本來の意味の色慾生活によつて充分に確證されてゐると見るのである。それは母その人との關係に於ては、それほど顯著には表れてゐない。關係文書によつて判斷し得る限りでは、彼が母との關係に於て表現してゐるのは、その性質は確かに異常ではあるが、しかし子供の親に對する愛情だけである。セント・ヘレナ謫居時代、ナポレオンは、レチシア夫人は三十才で「愛の女神のごとく美しかつた」といつてゐるが、周知のごとく彼はこの母に對して、最も慇懃、最も献身的な子供であり、その生活をできるだけ安樂に、愉快にすることに不斷に氣を配つてゐたのである。この問題にはなほしば〳〵的この研究の中で觸れる筈であるが、今その關係を研究の對象としてゐる彼の生涯の極めて異常なある段階に於ても、我々は母に對する温情の深く籠つた配慮の證左を、あらゆる場所と場合に見るのである。マソンはこれを「彼の第一の考へは、彼女のためといふことであつた」といつてゐる。環境に應じて變つたのはその表現の仕方だけであつて、表現される感情そのものは何時も決して變りなかつた。いかなる時でも彼は母のために金、時間、辛抱の犧牲を辭さなかつたが、それは貧乏な少尉の時でも、將帥の地位を得た後でもいつも同じであつた。

僅かな俸給を割いて、彼は母を助け、その重い生活の負擔を輕めるのに力を盡した。大帝國の首長として、巨大な計畫を胸中に運らしてゐる時でも、彼は數百萬の大金を母の自由使用に委ね、嚴格なその宮中儀禮に彼女の占むる貴賓席を設定し、彼女の住ふ家を自ら指定し、彼女のために慈惠看護婦團總裁の名譽職を作り、彼女をその地位に就かせるに當つては自ら任命を行ひ、彼女に贈るボン・スュル・セーヌの館の書類は、手づからこれを選んだのである。そして又彼は飽くことを知らず、常に不平なこの老母の、往々大した根據のないくり言や批難にも神妙に耳を傾け、鄭重にその言分を聞くのをいつも決して辭さなかつた。

ナポレオンの戀愛生活に對するこの母のイマゴー（影像）の影響は、その作用が殆んど強制的となる場合に最も公然と姿を現はしてゐる。彼はこの母のイマゴーにできるだけ凭ることとなくしては、愛することも、結婚する

ことも出來なかつたのである。

この母定着の明白の徴候——結婚に對する早熟的な願望——は、ナポレオンの青年時代の記錄、殊に「リヨンの演說」の中に頻繁に見出される。二十才の時、オーヅンヌに於て、この青年士官は既に結婚を考へてゐる。彼は富裕な材木商の義理の娘、マネスカ・ピエーに結婚を申込まうとさへしたのである。

このコンプレクスの影響を明瞭に觀察し得るのは、彼の義姉の妹で、後にスエーデン國王ベルナドットの妻となつたデジレ・ユージェニイ・クラリイとの戀愛の場合である。二十六才で將軍となつたが、指揮官の職を免ぜられたために生活の手段を全く失ひ、貧窮に惱んでゐたナポレオンは、この富裕な十六才の少女の熱烈な戀を贏ち得たのである。彼女は彼に宛てた手紙の中に「一口で申せば妾の生命はあなたのものでございます」と述べてゐる。ナポレオンはこの問題を頗る眞劍に考へた。一年の餘交際を續け、多數の手紙をやりとりしたあげく、彼はユージェニイと結婚する決心を固め、非常に性急に兄のジョゼフを促がして必要な奔走をはじめさせたのである。「私は家庭が欲しくてたまらない。ユージェニイとの問題は、まとまるか毀れるかすぐきめなければならない。」ところがこの話は毀れてしまつた。これに關する最後の言葉は、「デジレに對する讃歌は、この時以後ナポレオンの手紙から姿を消した」といふのである。何故であるか？ 傳記者たちはその理由が分らぬのである。彼等はナポレオンはデジレを愛してゐなかつたが、たゞ好機會を得たいばかりに結婚しやうとしたのであると想像してゐる。それは眞實ではない。我々は「だがナポレオンはこのデジレを愛してゐたのである」といふゲルトルーデ・キルハイゼンの意見に贊成する。その理由は、第一に少女の手紙が自分の愛は必らず應へられるといふ確信を表はしてゐる。第二にナポレオンは、デジレの手紙の來るのが遲れるごとに憂欝になり、不幸になつてゐる。第三にナポレオンその人が他の婦人と結婚した後で、彼女と結婚しやうと再び努力した事實の中にその愛の證據がある。從つて彼が彼女を非常に愛してゐたことは明かである。だが我々の推論に從へば、この戀愛對象には、ナポレオンにとつて本質的な特性、即ちその女性を所有することが幸福の唯一の條件となる點まで彼の感情を驅り立てる本質的な特性が缺けてゐたのである。その條件とは何んであつたか？ それはナポレオンのその後の戀愛を研究すれば、一目瞭然たるものがあらう。何故ならデジレのすぐ後で、彼は母の友達で、寡婦であり、二人の子供の母であるペルモン夫人に心を轉じ、夫人に結婚を求

めてゐるからである。ベルモン夫人の後で彼の心を奪つたのは、同じくずつと年上のド・ラ・ブーシャルドリイ夫人であつた。そして最後にそれから一年の後、彼はジョゼフィヌ・ド・ボーアルネーに身も魂もなくするほど戀し彼女に二人の子供があつたにもかゝはらず、躊躇するところなく結婚したのである。ジョゼフィヌは今あげた二人の婦人と同じく、寡婦であり、彼よりずつと年上――七才年上であつたのである。

卽ちその條件とは、女が年上でなければならぬといふことである。これにはゲルトルーデ・キルハイゼンも動かされて、「ナポレオンは、かなり年上の女でなければ心をひかれるといふことはなかつたらしい」といつてゐるが、これこそフロイドによれば、母に對する近親姦定着の最も露骨な、その故に又最も確實な徵候なのである。

六

我々は又こゝで「フランス」といふ要素、あるひはむしろ「外國人」といふ要素の愛著的內容の最初の源泉を探して、それをその具體的な根原に還元せねばならぬ。別の言葉でいへば、誰か「フランス人」で、父の共謀の下に母と結合してゐるとナポレオンが猜疑したもの、露骨にいへば、母と性的關係を結んでゐるとナポレオンが想像したものがあつたに違ひないのである。

そして事實ナポレオンの幼年時代に、かゝるフランス人が一人あつたのである。このフランス人は、その當時及その後に亘るボナパルト家との交際、並びにその公的地位のために、この幼兒の想像力の中で偉大な役割を演じ、この小さな嫉妬家に猜疑を起させる非常な可能性ある位置にあつたのである。このフランス人とは、コルシカ總督、陸軍中將、伯爵シャルル・ルネ・ド・マルブーフ――卽ちこの征服された國の最高權力を掌握してゐた人であつた。從つてマルブーフは、この子供の眼に、フランス的なすべてのもの、更に進んではフランスそのものゝ具象化として映ずる位置にあつたのである。

その上總督とボナパルト家との間に生じた關係は、すこぶる親密なものとなつた。戰鬪に疲れ、物質的には窮境に沈淪したシャルル・ボナパルト(カルロ・ブオナパルテ)は、コルシカの占領及治安恢復後は、全力をつくしてフランス人の權力を支持し、その報酬としてあらゆる可能な利益、金、地位、稱號などを得たのであつた。從つて總督は、シャルルの生存中彼の一家の面倒をよく見たのみならず、その死亡後は寡婦レチシアに對して不斷の助力を惜まなかつた。彼は自分だけの助力だけでは滿足せず、はじめオータンの司敎、後にリヨンの大司

敎となつた甥にも同じく盡力させたのである。だからこの當時のボナパルト家の運命を辿つて見ると、いつでもどこでも定つてこの二人の高官の介在が見られるのである。ルイ・ボナパルトの洗禮に名附親となつたものは、マルブーフ將軍である。ジョゼフとリュシアンがオータンで給費生となり、マリアンヌ・エリザがセン・シイルに入學を許され、ナポレオンの叔父フェシュがエーの敎會附屬神學校に入學できたのは、皆彼の保護の賜である。そして又ナポレオンをブレーシュの學校に入學せしめ、次いでその志望が變化した結果、改めてブリアンヌ幼年學校への入學をはからつたのも、このマルブーフであつた。ナポレオンが海軍へ入るはじめの計畫を抛つて砲兵へ身を轉じたのは、他ならぬこのマルブーフの影響であつた。

そればかりではない。始終金の點では困つてゐたナポレオンの父は、一再ならずマルブーフ伯爵の助力を俟たねばならなかつた。シャルルが俸給の附く貴族代表に幾度か選出されたのには、マルブーフの干與があつた。彼はかなりの年額になる桑苗育成補助金を下附されてゐたが、それもマルブーフのおかげであつた。死亡した親戚がエスキタ敎團にその財産を遺贈した時、シャルルはそれを取戻す訴訟を敎團を對手に起したが、その際も總督は彼に支持を與へたのである。

從つてマルブーフがシャルル・ボナパルトの家庭に於て占めた位置――ユングに從へば、シャルルは「いつも不在で、自分の享樂か、又は幸運の夢の實現に全く沒頭してゐた」――と、それから又レチシアの美しさと若々しさに基いて、時人が總督のこの一家に寄せる好意には戀愛的動機があると看做し、ナポレオンと同じ結論に達してゐたのは少しも不思議とするにあたらない。コストンは、「惡意はそこに他の原因をもとめる嘲弄を作りだした」といつてゐる。フリィドリッヒ・キルハイゼンはマソンと同じく、ナポレオンの母を老マルブーフの「友達以上の人」とそしつたこの類の蔭口を集めてゐるが、しかし彼はそれに附加へて、彼女の正しい性格、極めてコルシカ的な性格は、それだけでかゝる風說の不合理を充分に保證するに足ると述べてゐる。その上彼女は輕薄ではなく、又彼女の美貌は、情慾よりも崇拜をそゝる類のものであつた。私はこの疑惑の名殘が、ボナパルト一家にパオリとの絕交後追放を宣告した文書の中にも見られると考へる。それは次のごとくいつてゐる。

「ボナパルト一家は專制主義の穢れの中に生れ、贅を盡したパシャ(マルブーフ)の眼の下で、その費用によつて成長した。」

それは事實どうであつたにせよ、我々の研究にとつて

重要なことは、少年ナポレオンが他の人々と同じく、自分の母とマルブーフとの間に懇親を關係――たとへ父が奬勵はしなくても、とにかく寛容してゐた懇親關係があると信ずる據點を有してゐたこと、少くとも一つの幻想――現實の事實と同一の價値を有する一つの幻想を自ら作り出すに足る理由を有してゐたことを示すにある。そしてこれが實際の事情であり、父に對する「コルシカとフランスの結合に協力した」といふ批難の實際の意味であつたことは、ずつと後の時代のナポレオンの談話に明瞭に示されてゐるのであつて、その談話でナポレオンは、八年間留守にしたコルシカが、その最初の休暇歸郷の際に彼にどんな印象を與へたかを次のごとく述べてゐる。「私の幸福に缺けてゐたのは、愛する二人の人、父とマルブーフ伯爵のゐないことだけであつた。マルブーフ伯爵は九月二十日（ナポレオンの到着の五日前）に歿つたが、私の一家は彼の死をその後長い間悼んでゐたのである。」

我々は愛著的價値の上に於てこのマルブーフと父との對照の中に、「彼はコルシカとフランスの結合に協力した」といふ言葉の性的意想の確證を見るばかりではない。それは更にナポレオンがこの幻想の結果、この二人のいづれが自分の父であるかといふことに關して、ある不安を懷かずにはゐられなかつたといふ事實をすこぶる眞に近いものにするのである。この疑惑は、民法の條文の中に法律的に投出されてゐる。即ち私生子に對して父の搜索が禁ぜられてゐる。

その上この幻想の光に照して見ると、前に擧げたブルボン元帥に關するナポレオンの考察、即ち「彼の眞實の罪は外國人と共謀して祖國を攻擊したことにある」といふことは、無意識の言葉でいへば、自分の母に外國人と性的接觸をさせてはならぬといふことを意味してゐるのが明かになるのである。これに關しては、大抵の子供はその無知に於て、異性間の關係は女に對する暴力行爲、殘忍な闘爭より成ると想像してゐることを想起するだけで充分である。子供がサド的性癖を發揮するのはそのためなのであるが、この性癖が青年ナポレオンにあつたことは誰も先づ否定は出來ないのである。ブルボン元帥に對する批難は、從つてその意味に於ては、父に對する批難と完全に一致するである。

こゝに於てその他の問題も自づと解決を告げる。その例はナポレオンが十七才の時に書いた「自殺について」の中で、自分の自殺を論じてゐる點に見られる。彼が自殺を欲した理由は、「鎖につながれた同國人が、震へながら自分らを壓迫してゐる手に接吻してゐる」ことであ

る。だから彼が生れた時から存在し、從つて彼がそれに充分慣れる時間のあつたことのためなのである。そして彼は次のごとく叫んでゐる。

「フランス人よ、汝らは我々の愛するすべてを奪つて滿足せず、更に我々の風俗まで墮落させた。我が祖國の現狀及その現狀を變へ得ぬ無力、この二つは從つて私にこの地上――私が德義として憎惡せねばならぬ人間を義務として讃へることを强ひるこの地上を逃れさせる新しい理由である。私は祖國へ歸へつたら、いかに振舞ひ、いかに口をきかねばならぬであらうか？……生は私にとつて重荷である。その故は私は何んの樂みも感ぜず、すべてが苦痛だからである。生は私の重荷となつてゐる。それは今私と共に生活して居り、恐らく今後も常に共に生活する人々が、月光と日光の異るごとく我々の風俗と異る風俗を持つてゐるからである。」

ナポレオンの性生活に於て、姦通の觀念が非常に强い纒綿を得、姦通が過失といふだけでなく、重罪と彼に見られるやうになつたのは、明かにこの幻想の一つの結果であつた。このことは彼の青年時代の文章、殊に獨身生活及獨身に對する痛烈の罵倒を滿載し、獨身者が他人の妻にその情慾の滿足を求めるのを國是として禁ずべしと論じた「リヨンの演説」に於て明白に觀取される。しかるにマルブーフは未婚者であつて、一七八四年、七十二才の時はじめて結婚したのである。その時ナポレオンは旣に十五才となつてゐた。

その上私の見るところでは、ナポレオンのこのコンプレックスは、彼の妙な間違ひで暴露されてゐる。「セント・ヘレナ回想記」の中で、彼は彼が二十五才でイタリイ軍の砲兵指揮官であつた時、美貌の一女性、人民代表の若妻ルヰズ・チュロオ・ド・リニエールの歡心を買ふために、重大な過失の責任を犯したといふことを述べてゐる。彼は受け容れられた愛に對する感謝の印しに、若干の兵員を犧牲にしたといふのである。

「私は當時まだ非常に年が若く、自分の小さな成功に心傲り、滿足してゐた。その折私はできるかぎりの親切をつくして、自分の感謝の情を示したいと思つてゐた。權力濫用といふことがどんな程度にまで達し得るものか、又それが人間の運命を往々左右することはすぐ君にも分るであらう。けだし私とても人間であることに變りはないからである。九月のある美しい朝、チュロオ夫人を伴つてタンド峠近傍の我陣地を逍遙してゐた時、突然役女にちよつとした戰爭を見せてやらうといふ考へが私に浮んだのである。私は前哨に攻擊を命じた。戰ひは我方の勝利で終つたが、しかし元來結果は問題ではなかつたの

である。攻撃は全く氣まぐれの所爲であつたが、……それでも幾人かの犧牲者が出ぬわけには行かなかつた。このことを考へる度ごとに、私は最大の自責を感ぜずにはゐられない。」

ゲルトルーデ及フリィドリッヒ・キルハイゼンは、この皇帝の回想は正確でないと異議を挿んでゐる。第一ナポレオンの性格に見て、かゝる輕率なことはあり得ないといふ。それにチュロオ夫人その人によれば、この前哨戰のあつたことは事實だが、彼女に對する愛のために、從つてその歡心を買はうとする下らぬ希望でそれが行はれたといふのは事實でないといふのである。更にフリィドリッヒ・キルハイゼンは、ナポレオンが記憶の間違ひばかりでなく、時日や場所をも思ひ違ひしてゐることを極めて確實な方法で示してゐる。けだしチュロオ夫妻は、九月二十一日にはじめてパリからニイスに到着し、前線に赴いたのはその後だからである。それにその戰闘が、タンド峠附近で起つたといふのも頗る疑はしい。何故なら九月には、この峠の問題はもはや存在せず、從つてナポレオンの擧げてゐる小事件は、九月二十六日、ヴァドオ附近の同盟軍の角面堡に對する攻撃の折に生じたものとせねばならぬからである。

しかしながら我々の見るところでは、この問題の解決には何も困難な點は少しもないのである。我々は神經症的な苛責の分析と同じく、自責の感情はこれを正當なものと認め、ただその內容だけを、キルハイゼンの主張に鑑み疑問に附するのである。これを別言すると、我々はこの否定すべからざる自責の感情は他の問題と關聯して居り、その表面的な內容は、たゞ他のものゝ代りにそこへ置かれたものに過ぎぬと看做すのでろる。そしてこの自己批難の眞の對象が何んであるかは、ナポレオンが一方に於て一婦人の歡心を買ふために惡事を働いたと自ら斷劾して居り、他方に於て彼がこの年に四人の婦人（カルトウ、コール、サリセッチ、チュロオの四夫人）と不義の關係を結んだことを見るならば、それを見拔くには何んの困難も感じないのである。して見れば「幾人かの犧牲者が出ぬわけには行かなかつた」ことは、毫も異とするに當らない。その三年以前、「リヨンの演説」の中で姦通した獨身者は全社會の面前で告發さるべきだとしたのは、このナポレオンその人であつた。彼は「そこで諸君は、彼等を全社會の面前で彈劾するであらう」といつてゐる。事實に於て彼は、その讃仰者に自分の大罪の話を語ることによつて、自分自身に罰を加へてゐるのである。

この解釋は、この話の中にある「攻撃は全く氣まぐれ

の所爲であつた」といふ一句によつて、ある種の證明を與へられてゐる。夢の解釋に關する我々の經驗は、この一句の中に、語られた事實が非現實であることの暗示を見ねばならぬことを敎へてゐる。これは讀者に眼光を紙背に徹せしめよといふ警告である。

反對に「權力濫用」といふ言葉は、姦通に對する彼の嫉厭及それより生ずる鬪爭の起源を示すものゝごとく私には思はれる。權力の濫用は、强力な總督マルブーフに歸せられてゐたのである。

ナポレオンは自分の結婚に關して、その外見に非常な注意を拂つたが、この特徵的な注意が又同じ源泉から發してゐることは寸毫の疑も持ち得ない。彼はフランス王座の前任者と異り、公式の愛人といふものを一人も持つたことがなかつた。彼は妻に對する不實を働らいたことを白狀するのに決して躊躇したことがなく、時にはその冒險を妻にまで話したにもかゝはらず、非合法の戀愛に耽る時は、いつも非常に用心をして、チュイルリー宮の密室にかくれてそれを行つたのである。

ナポレオンの女性に對する態度が、以上述べた幻想に決定されてゐたことはいふまでもない。それが生んだ戀愛の條件は、女が不實（フロイド）で墮落してゐねばならぬことであつた。愛する女は、彼の母のごとく不實でなければならないのである。この條件は、ナポレオンの無意識の中に殊に力强く表明されてゐる。

我々はそれをジョゼフィヌに對する彼の態度の中に容易に見得るのである。ナポレオンはこの植民地生れの麗女を夢中になつて戀し、彼女の前の結婚時代に噂された數々の戀愛的冒險を意に介せず——或ひは恐らくその冒險の故に——、又彼女がバラスの愛人であつたにもかゝはらず——あるひは恐らくその愛人であつたことの故に——彼女と結婚したのであるが、結婚後いくばくもなくして彼は彼女を殘して、新に補された總指揮官の資格でイタリイ軍に赴任せねばならなかつた。彼はミラノから彼女に宛てゝ嵐のやうな、愛に燃へた手紙を數々書き、早くミラノに來ることを懇願してゐる。けだしナポレオンは、彼女にこがれて死ぬ思をしてゐたのである。そして忘恩の彼女がパリの享樂の數々に心を奪はれ、彼の許へ來ることを躊躇すると、結婚後わづか數ヶ月の不幸な夫は、「私の妻は病氣をしてゐるか、不實を働らいてゐるか、どちらかに違ひない」と、マルモンに語つたのである。

事實彼女はこの時でないにしても、とにかくその少し後、彼女がいよ〳〵ミラノに赴いて、わづかの時日を夫と共に過し、その後獨りそこに殘つてゐた時に、立派に彼を

裏切つたのである。ナポレオンは敵を迎へてヴェロナに出陣した。しかるに彼女はそのヴェロナで、たちまち市民の嘲弄の的となつた交際をシャルルといふ名の一士官とはじめたのである。いつもジョゼフィヌに惡意をいだいてゐたボナパルト家のもの（彼等は彼女に婆ぁといふ名をつけてゐた）は、早速その機會をつかんで、ナポレオンの前でその妻の行跡に關し、ハッキリ意味のわかるあてこすりをはじめたのである。しかしながら彼がそれに續いてジョゼフィヌ宛に書いた手紙には、どれにもこの退引ならぬ曝露の痕跡は見出されない。どの手紙も皆前の手紙と同じ深い愛、同じ熱望を表はし、たゞこゝかしこに熱愛してゐる彼女の明白な無關心と執拗な沈默が、彼に惹起した苦悶の調子が散見されるに過ぎない。

この勝利の榮譽を荷つた征服者が、その成功をジョゼフヰヌの足下に貢物として献げ、彼の熱愛し熱望する彼女をその腕に抱くためにミラノに馳せ戻つた時でも、卽ち彼女が自分を裏切つた確證――彼女はシャルルとジェノアに赴いてゐた――を握つた時、彼は一夜を慟哭して明したが、その後ではたちまち彼女のまづい言抜にまるめこまれ、翌日からその罪を赦して手紙を「お前に接吻を送るためにこの手紙をもう一度開く」とか、「おゝジョゼフィヌ！　おゝジョゼフィヌ！」とかいふ類の文句をもつて結び、「戀敵を何かの理由で士官名簿から除くことで滿足したのである。このジョゼフィヌの不實行爲が、ナポレオンの感情に何んの影響をも及ぼさなかつたことは確實とせねばならぬ。何故ならその一年の後、ベルチエからジョゼフィヌに宛てた手紙の中に、我々は次の一句があるのを讀むからである。

「私はあなたを非常に思つて居りますから、もしボナパルトがあなたに少しでも惡感情を持つてゐたら必らずお知らせいたします。私は誓つて申しますが、彼はあなたに對していかなる惡意も持つてゐません。彼はあなたを熱愛し、あなたを崇拜いたして居ります。」（つゞく）

故大佐の令嬢たち（マンスフィールド作）

岩倉具榮譯

八

ジョセフィンは何も答へなかつた。彼女は急に方向を變へて別の事を考へた。彼女は突然シリルのことを考へた。たつた一人の孫に時計をやるのが一層普通ではなかつたらうか。そして親しいシリルは物を貰へば大變有難がる方だし、それに金時計は、若者にとつては大したものであつた。ベニーは、確か時計を持たない習慣になつてゐたと思ふ。あんなに暑い氣候の處では、チョッキなどを着るものは滅多になからう。ところが、ロンドンにゐるシリルは年中チョッキを着てゐた。そして彼がお茶にやつて來て、時計がチョッキのところに見えたら、彼女とコンスタンチアとにとつても本當に嬉しいことだらう。「あなたはお祖父様の時計を持つてゐるのねえ、シリルさん。」そのことは何となく非常に満足に思はれることであらう。

なつかしい少年！彼の甘美な、感じ易い、可愛らしい話振りは何といふいゝ聲だつたらう！勿論彼女等にはよく分つてゐた。併しそれは非常に不幸なことであつた。

「あの人がこちらにゐれば、さういふ事もね」とジョセフィンは云つた。

「そしてあの人は大變それを喜ぶでせう。」とコンスタンチアは、自分の云つてゐることを考へないで云つた。

併し、シリルは歸つて來るや否や、すぐに叔母さん達とお茶を飲みにやつて來た。シリルがお茶に來るのは彼等にとつて滅多にない饗宴の一つだつた。

「さあ、シリルちやん。私達のお菓子に恐れをなしち

あいけないのよ。あなたの叔母さんのコンちやんと私が今朝バスザートで買つて來たのよ。男の人の食慾つてどんなだか私達知つてゐるわ。だからいゝお茶菓子うんと喰べるのを恥しがらないでね。」

ジョセフィンは彼女の冬の手袋やコンスタンチアの唯一の大事な靴の底やかゝとと見まがうばかりの豐かな黑いお菓子にざつくばらんに切り込んだ。併しシリルの食慾は一向思はしくなかつた。

「だつて、ジョセフィン叔母さん。僕は本當に食べられないんですよ。僕は丁度御飯を食べて來たばかりなんですもの。」

「あら、シリルちやん、そんな筈ないわ！　もう四時過ぎよ。」とジョセフィンは大きな聲で云つた。コンスタンチアはチョコレート棒の上にナイフをおいて待構へてゐた。

「でも、やつぱりさうなんです。」とシリルは云つた。「僕はヴィクトリアで或人に會はねばならなかつたんです。そしてその男は……隨分僕を引き止めてね、やつとたつた今御飯を食べてこゝに來られたばかりなんです。そしてその男は僕に」――シリルは手を額においてチエツと舌をならしつゝ――「恐ろしい打撃を與へたんです」と云つた。

凡ゆる日の中で今日は――特別につまらない日であつた。併しそれでもシリルにそんなことが分らう筈もなかつた。

「でも、メレンゲ（砂糖と玉子の入った菓子）なら食べるでせう？　シリルちやん」とジョセフィン叔母さんは云つた。「このメレンゲはあなたの爲に特別に買つたのよ。あなたのお父様はそれが大變好きだつたわ。きつとあなたも好きだと思つて――。」

「好きですとも、ジョセフィン叔母さん」シリルは熱心な聲で云つた。「始めに半分だけ食べちやいけませんか。」

「いけなかないわ。でも、持つて歸るのはいけないのよ。」

「お父様は今でもメレンゲが大變お好きなの？」とコンチアはおだやかに訊いた。彼女は自分のメレンゲの殼を壞した時かすかにたじろいだ。

「さあ、僕本當によくは知らないんです、コン叔母ちやん」とシリルは元氣よく云つた。

それを聞いて彼女等は二人とも目を上げた。

「知らないつて？」とジョセフィンはひつたくるやうに云つた。「自分のお父さんの事だのに、そんなことを知らないの？　シリルちやん。」

「まさか」コン叔母ちやんは靜かに云つた。

シリルはそれを笑ひ流さうとした。「本當に知らないの」と彼は云つた。」隨分前から知らないよ」と彼はどもりながら云つた。彼は默つてしまつた。叔母さん方の顏を見ると何にも云へなくなつてしまつた。

「それにしても」とジョセフィンは云つた。

そしてコン叔母ちあんは見た。

シリルはお茶のコップを下においた。「少し待つてね」彼は叫んだ。「一寸待つて、ジョセフィン叔母さん。僕、何を考へてゐたんでしたつけ?。」

彼は眼を上げた。彼等の顏色は晴れて來始めた。シリルは膝を打つた。

「勿論」彼は云つた。「それはメレンゲだつた。どうしたつて僕は忘れるわけはありません。さうだ。ジョセフィン叔母さんの云ふ通りです。お父さんは無茶苦茶にメレンゲが好きなんです。」

彼等は只晴れやかになつたばかりではなかつた。ジョセフィン叔母さんは嬉しさのあまり眞赤になつた、コン叔母ちやんは深い、深い溜息をついた。

「さあ、シリルちやん、あなたは來てお父樣にお目にかゝらなくてはいけない。」とジョセフィンは云つた。「お父樣はあなたが今日來ることを御存じだつたのよ。」

「宜しい」シリルは大變しつかりと心から云つた。彼は椅子から立上つた。急に彼は時計を見つめた。

「ねえ、コン叔母ちやん、あなたの時計少し後れてやしない？　僕ある人に會はなきやならないの――パディントンで丁度五時過ぎに。お祖父樣とあまり長く話してゐられないだらうと思ふのだ。」

「あら、お祖父樣はどうせそんなに長くあなたがゐるだらうとは思つてゐらつしやらないことよ！」とジョセフィン叔母さんが云つた。

コンスタンチアは尙も時計を見つめてゐた。彼女はそれが進んでゐるのか後れてゐるのかどちらかはつきり分らなかつた。どつちかであつた。その事は殆んど確だと彼女は感じてゐた。とにかく、それは進んでゐるか後れてゐた。

シリルは尙もためらつてゐた。一緒にいらつしやらない？　コン叔母ちやん。」

「勿論だわ」とジョセフィンは云つた。「私達もみんな行くのよ。いらつしやい、コンちやん。」

九

彼等は戸をたゝいた。そしてシリルは叔母さん達についてお祖父さんの暑い、なつかし味のある部屋に入つて行つた。

「さアおいで」とピナーお祖父さんは云つた。「何をぐづぐづしてゐるんだ？ 何かあつたのか？ 今まで何してゐたのだ？」

お祖父さんは音たて燃えさかる火の前に腰を下し、ステッキを握つてゐた。膝の上には厚い毛布をかけ、更にその上には倚麗な、黄白色のハンカチーフが載せてあつた。

「シリルちやんです、お父様」とジョセフィンは羞みながら云つた。そしてシリルの手を取つて前へ連れて行つた。

「今日は、お祖父様」とシリルは、ジョセフィン叔母さんの手から自分の手を離さうとしつゝ云つた。ピナーお祖父さんの眼は屹とシリルを射つた。この眼つきでお祖父さんは有名であつた。コン叔母ちやんは何處に行つたか？ ジョセフィン叔母さんの向ふ側に立つてゐた。彼女はその長い腕を前に垂れ、手を握りしめてゐた。彼女はお祖父さんから一寸も眼を離さなかつた。

「さて」とピナーお祖父さんはやをら身を動かし始めつゝ云つた。「何か面白い話しはないか？」

何を話したらいゝのだらう？ シリルは全く精神耗弱者のやうに微笑してゐる自分を感じた。部屋も息づまるやうな感じであつた。

併しジョセフィン叔母さんが助け舟を出してくれた。彼女は快活に叫んだ。「シリルちあんの申しますにはね、お父様。今でもシリルちやんのお父様はメレンゲが大好きなんですつて。」

「えゝ？」とピナーお祖父さんは、眞赤なメレンゲの殼の様に手を耳の上にまげて云つた。

ジョセフィンはもう一度云つた、「シリルのお父様は今でもメレンゲが大變お好きなんださうですわ。」

「聞えない」とピナー老大佐は云つた。そしてジョセフィンをステッキで追ひやり、それからシリルの方へステッキを向けて云つた。「叔母さんが何を云はうとしてゐるのか話しておくれ」

(弱つたな！)「僕が話すのかい？」とシリルは赤くなつてジョセフィン叔母さんを見つめ乍ら云つた。

「お話しするのよ」と彼女は微笑した。「お祖父様は大變お喜びになつてよ。」

「さアこつちへ來て云つて御覧！」とピナー大佐は、再び身動きし始めながら性急に叫んだ。

で、シリルは前に身をかゞめながらわめいた。

「うちのお父様は今でもメレンゲが大好きなんで御座います。」

それを聞いてピナーお祖父さんは鐵砲で打たれた様にとび上つた。

「そんなに怒鳴らなくてもいゝよ！」と彼は大きい聲で云つた。「子供がどうかしたのか。メレンゲだつてそれがどうした？」

「おゝ、ジョセフィン叔母さん、まだ喋舌らなければならないの？」とシリルは絶望的に唸つた。

「それでいゝのよ、シリルちやん」とジョセフィン叔母さんは、まるでシリルを齒醫者のところに連れて來てゐるかの樣に云つた。「お祖父樣はすぐお分りになつてよ。」そして彼女はシリルにさゝやいた。「お祖父樣は少し耳が遠くおなりになつたのよ。」それから彼女は前かがみになり、本當にピナーお祖父さんに向つて叫んだ、「ねえお父樣、シリルのお父さんは今でもメレンゲが大好きだとあの子は申上げてゐるのです。」

ピナー大佐はその時には聞こえた。聞こえたのでシリルを見上げ見下しつゝ考へてゐた。

「何て變つたことなんだ！」とピナー老祖父は云つた。「こんな風にしてみんながこゝへ私に話しに來るとは何といふ變つたことなんだらう！」

シリルも變だと感じてゐた。

×

「えゝ、私シリルに時計を送りませう。」とジョセフィンは云つた。

「それは大變いゝでせう」コンスタンチアは云つた。「この前あの子が來た時には何だか面倒な事があつたやうな氣がするわ。」

十

その時ケイトがまるで壁の所に何か秘密な仕掛の板圍を發見したかの樣に、例の調子で、戸をつき拔けるやうに飛出したので二人は話の腰を折られた。

「フライに致しませうか、それとも煮ませうか」と無神經な聲で訊いた。

フライにするか、煮るか。ジョセフィンとコンスタンチアとは一瞬間全く面喰つた。彼等は殆んど考へることが出來なかつた。

「フライか煮るのかつて、何をさ？　ケイト」ジョセフィンは、心を集中し始めようとして訊いた。

ケイトは聲高くあざ笑つた。「お魚ですよ。」

「あゝさう、どうしてお前は始めからお魚を……と云はなかつたの？」ジョセフィンはおだやかにケイトをとがめた。「行きなり云つても分ると思つたの？　ケイト。フライにしたり、煮たりするものは世の中に澤山あるんだよ、お前。」そしてこんな風に毅然たるところを見せた後で、彼女はコンスタンチアに向つて全く快活に云つた。

「どつちがいゝの、コンちやん。」

「魚はフライの方がいゝと思ふわ。」とコンスタンチアは云つた。「併し勿論、煮魚も結構だけれどね。私は兩方同じ位好きだと思ふわ……あなたさへ……併しもし――」

「フライに致しませう」ケイトは云つた。そして彼女はその部屋の戸を開け放したまゝにしてとんで歸り、臺所の戸をドーンと閉めた。

ジョセフィンとコンスタンチアとは顏を見合せた。彼女は淡色の眉毛を上げると、それは淡色の頭髮の中に沒してしまつた。彼女は起上つた。さうして非常に權高い、押付けるやうな樣子で云つた。「應接間まで私について來つて下さる？　コンスタンチア。私、あなたと相談しなければならない大切なことがあるのよ。」

何故なら彼等がケイトの事を話し合はうと思ふ時にはいつも應接間に引込んだからであつた。

ジョセフィンは意味ありげに戶を閉めた。「腰をおかけさない、コンスタンチア」と彼女は尙も頗る尊大に云つた。彼女は始めてコンスタンチアを引見したかの樣であつた。そしてコンちやんは、まるで自分が初對面のお客ででもあるかの樣に、どの椅子に掛けようかと見廻した。

「ところで問題はですね」とジョセフィンは膝を乘り出して云つた。「ケイトをおいておくかどうかといふことなのよ。」

「それが問題だわ」とコンスタンチアも相槌を打つた。

「そして今度は」とジョゼフィンは嚴然と云つた。「私達ははつきりきめねばならないわ。」

コンスタンチアは、一瞬間あらゆる他の時に一亙り行き始める樣に見えたが、自分を引き締めて云つた。「えゝジャッグちやん。」

「ねえ、コンちあん」ジョセフィンは說明した。「凡てのことが今はすつかり變つてしまつたんだからね。」コンスタンチアはチラと見上げた。私の云ふのは」とジョセフィンは續けた、「私達は今迄の樣にケイトに賴つてはゐないつて云ふことだわ。」そして彼女はほんのり顏を赧らめた。「料理だつて肝心のお父樣もゐらつしやらないんだし。」

「それは全く本當よ。」とコンスタンチアは相槌を打つた。「お父樣は確かに今はお料理は要らないんだわ、たゞ――」

ジョセフィンはその時、銳く言葉をはさんだ。「あなた眠くないの？　眠いんでせう？　ねえ、コンちあん。」

「眠いつて？　ジャグちあん」コンスタンチアは眼を大

きく見開いた。

「さあ、もつと心を引きしめて?」とジョセフィンは鋭く云つた。そして元の問題に歸つた。

「若し私達がするとしたら、當然まづ何だわ――と彼女は扉の方に氣をくばりながら、やつとの思ひでこれだけ云つて、――「ケイトに豫告しておかなくては……」――と云つて彼女はもう一度聲をあげた。――「食事くらゐは自分で出來てよ。」

「どうして出來ないことがあつて?」とコンスタンチアは聲高に云つた。彼女は思はずニコ〳〵して來た。考へるだに興奮することであつた。彼女は兩手を握り締めた

「私達は何を食べて生きて行くの? ジャグちあん。」

「そりやコンちやん、卵だつていろ〳〵料理の法があるわ!」とジャグちあんは再び昂然と云つた。「それに、ちやんとか料理してある食物だつていろ〳〵あつてよ。」

「でも私はいつも聞いてゐたわ。」とコンスタンチアは云つた。「さういふものは隨分高いつて云ふ話しだわ。」

「適度に買へば高くないわ。」とジョセフィンは云つた。併し彼女はこの魅力のある間道から引き上げてコンスタンチアを別の話につれ出した。

「けれども、今、私達がきめねばならないのは、本當にケイトを信用するかどうかつてことよ。」

コンスタンチアは後ろによりかゝつた。彼女の氣の拔けたしのび笑ひが唇の間からもれた。

「この問題について私が何とも決心出來ないなんて」彼女は云つた、「奇妙ぢやなくつて? ジャグちあん。」

十一

彼女はこれまで何とも決心がつかなかつた。決心のつかぬと云ふのは何とも證明がつかぬと云ふことであつた。如何にして人々は證明したか。如何にして證明することが出來たか。ケイトが彼女の前に立つて故意にしかめ面するのを想像して御覽なさい。彼女は多分苦しいのは尤もではないか。とにかく、ケイトが彼女に向つてしかめ面をしてゐるのかどうかを訊くのは不可能ではなからうか。若しもケイトが「いゝえ」と答へたら――そして勿論「いゝえ」と云ふであらうが――引込みがつかなくなるだらう! 何と威嚴を傷けられることだらう! それから、彼女とジョセフィンが出掛けたならば、ケイトは物を取る爲ではなく探るために彼女の簞笥に手をかけるやうなことも確かにあるだらうとコンスタンチアは再び想像した。彼女のレースの紐の下とか夜の肩掛の上とかまさかと思はれるやうな所に紫水晶の十字架をおいておいて、そこにやはりあるかどうかと、彼女は何度も何度

も歸つて來た。一度ならず彼女はケイトのために保蹄を作つた。彼女は特別な置き方で物事を片付けてから、ジョセフィンに證人になつて貰つた。

「いゝこと？　ジャグちあん」

「確に見屆けたわ。」

「かうしておけば、屹度分つてよ。」

ところが併し、彼女が見に行くと、證據所ではなかつた！　若し何かの位置が違つてゐるとしても、彼女が抽出しを閉めた時にさうなるのも尤なことであつた。ガタ〳〵動くのでとかくそんなになるのだらう。

「來て見てよ、ジャグちあん。私にはちつとも分らないわ。とても六づかしいんですもの。」

併し暫くの間ぢつとにらみつけてゐてからジョセフィンは溜息をつく。「あなたのお蔭で私まであやふやになつちやつたわ、コンちあん。私にも分らないわ。」

×

「さあ、もう今度こそは延せないのよ」とジョセフィンは云つた。「今度また延したりしたら――」

十二

けれどもその瞬間に下の街路で手風琴が鳴り出した。ジョセフィンとコンスタンチアとは一緒に跳上つた。

「驅けてつて、コンちあん」とジョセフィンは云つた。「早く驅けてつて。あそこに六ペンスあるわ。」

その時、彼等は思ひ出した。そんなことは問題ではなかつた。彼等に決して二度とオルガン彈きを呼止めないことになつてゐた。彼女とコンスタンチアとは、その猿にどこか外で音を立てさせるやうに、もう二度と云はなくてもいゝやうと命ぜられてゐた。手風琴師が餘り急いで行つて了はないとお父さんが思つた時に、そのやかましい、妙な叫び聲のフイゴ（手風琴）は決して二度とひびかすことと相成らぬとせられてゐた。オルガン彈きは一日中そこで彈いてゐても、お父さんのステッキはドンと云ふ音も立てないだらう。

　　二度とはドンと鳴らぬだらう。
　　二度とはドンと鳴らぬだらう。

と手風琴は演奏した。

コンスタンチアは何を考へてゐたのであらうか。彼女は妙な微笑を湛えてゐた。彼女は別人のやうに見えた。彼女は泣き出すことも出來なかつた。

「ジャグちあん、ジャグちあん」コンスタンチアは兩手を握りしめつゝ靜かに云つた。「今日はどういふ日だか知つてゐて？　土曜日よ、今日で一週間よ、まる一週間よ」

父さん死んで一週間。
　父さん死んで一週間。

と手風琴は歌つた。そしてジョセフィンも亦、現實に歸つてしやんとするのを忘れてゐた。彼女はかすかに、奇妙に微笑してゐた。インド絨緞の上に四角に太陽の光りが淡赤く當つてゐた。光りは差したり消えたりまた差したりして――さうしてぢつと照りつけ、深くなり行き――遂に殆んど金色に照り輝いた。

「太陽が出たわ」とジョセフィンは、如何にもそれが現實的に問題であるかの樣に云つた。

　さながら泉の如く泡立つ音が、まどらかに明るい調子で、手風琴から流れ出で、ふんだんに散つて行つた。

　コンスタンチアはそれらの音を捕へようとするかの樣に、大きな冷い手を上げた。が、やがてまたその手を下した。彼女は自分の氣に入りの佛像の置いてあるマンテルピースの所まで歩いて行つた。そしてその微笑が何時も彼女に、殆んど苦しみのやうな、而し愉しい苦しみともいへる、妙な感じを與へるその石の光つた像の微笑が今日は單なる微笑以上のものに思はれた。佛陀は或る事を知つてゐた、彼は秘密を握つてゐた。「お前の知らない或る事を、私は知つてゐる」と、彼女の佛陀は云つた。さア、それは一體何であつたか、何であつたらうか。而も彼女はいつもそこに何か或る事を感じてゐた。

　太陽の光りは窓をつき拔け、こつそりと忍び込んで、家具と寫眞を照し出した。ジョセフィンはそれをぢつと見てゐた。その光りがピアノの上のお母樣の引伸寫眞に當つた時、それは可愛らしい塔の樣な形の耳輪と黑い羽の襟卷とを除いては、お母樣の面影が殆んど殘つてゐないのを見つけて當惑してゐるかの樣にためらつた。死んだ人の寫眞はどうしていつもこんな風に消えて了ふのだらうと、ジョセフィンは不思議に思つた。人が死ぬと、直ぐにその人の寫眞も死んでしまふ。併し、勿論、このお母樣の寫眞は大變古かつた。それは卅五年も前のものだつた。ジョセフィンは椅子の上に立つて昔を思ひ起し、その羽の襟卷をコンスタンチアに指し示しつゝ、セイロンでお母樣を殺したのは蛇であつたことを話して聞かせた。……若しお母樣が死なかつたら、凡ての事が違つてゐたらうか。彼女は何故だか分らなかつた。フローレンス伯母さんは彼等が學校を出る迄一緒に暮してゐた。そして彼等は三回引越して年毎の休日を持ち、さうして……さうして勿論、召使も變つた。

　數羽の小さな雀、幼い雀が、窓の出張りでチューチュー鳴いた。チュー――チュー――チュー。けれどもジョセフィ

ンはそれが雀ではなく、窓の出張りに居るのではないやうな感じがした。その妙な小さい叫び聲は彼女の內部でするのであつた。チュー——チュー——チュー。あゝ、そんなに弱々しく心細げに、何を叫んでゐるのであらうか。

若しもお母樣が生きてゐたら、彼等は結婚してゐたらうか。併し結婚の相手は誰もゐなかつた。お父樣が喧嘩する迄は、アングロ・インディアンの友達がお父樣にはあつたのだ。併し喧嘩してからといふもの彼女とコンスタンチアとは書記たちを除いては一人も男などには會つたことはなかつた。どうして人々は男に會ふのだらうか。又たとへ男たちに會つたとしても、見知らぬ人として以上には人々を知る樣になることがどうして出來るのだらうか。人々はよく危險を冒したとか、人にあとを跟けられたとか、云ふ話を物の本に讀むことはあつた。併し誰もコンスタンチアと、彼女とのあとを跟けて來る者などはなかつた。あゝさうだ、イーストボーンでのある年、彼等の宿にゐた見知らぬ男が彼等の寢室の戶の外で湯の壺の上に手紙を載せて行つたつけ！ところが、コンスタンチアがそれを氣付く前に、手紙は湯氣のために殆んど讀めないやうになつてしまつてゐた。彼等は自分達のどつちに宛てゝその手紙が置かれてあつたのかをさへ、見分けることも出來なかつた。そしてその男は翌日に行つてしまつた。それだけだつた。他の者はお父さんを探してゐて、同時にお父さんをよけてゐた。併し今は？併し今は？忍び込む太陽は靜かにジョセフィンに觸れた。彼女は顏を上げた。彼女はやさしい光りに誘はれて思はず窓邊に近づて行つた。

手風琴の演奏が止む迄コンスタンチアは佛像の前に立ちすくんでゐた。何だか不思議な氣持であつたが、併し何時もの樣ではなく、さりとてぼんやりしてゐるといふ風でもなかつた。この時は彼女の不思議な氣持は憧れの氣持の樣であつた。かつて滿月の夜、夜着のまゝ寢床から這ひ出してこゝに來て。まるで十字架につけられた樣に腕をのばして床の上に橫はつたことのあるのを彼女は思ひ出した。何故だらうか。大きな、蒼白い月が彼女にさうさせたのであつた。衝立の上に刻りつけられた、踊つてゐる恐ろしい姿が橫目を使つて彼女を見てゐたが、彼女は氣にもとめなかつた。彼等が海岸のほとりに住んでゐた頃には、何時も、彼女は獨りで出掛けて出來るだけ海に近づき、これと思ふ何かの歌を口づさみつゝ、その休みなき大洋をじつと見つめてゐたことも彼女には思ひ出された。そこではこのやうな別の生活があつて、驅け出して行つて物を袋に入れて家に持ち歸り、品物を見て物を買ひ、ジャグちゃんとそれに就いて論じ合ひ、そ

れを返して行つてまた別の品を見た上で買つて歸り、お父さんのお料理を揃へてお父さんに不自由な思ひをさせない様にした。けれどもそれは凡てトンネルのやうなものゝ中で起つた様に思はれた。それは現實ではなかつた。彼女が現實的に自らを感じたのは彼女がそのトンネルを出て月の光りの中とか、海邊とか、雷雨の中とかに入り込むだ時だけであつた。それはどういふ譯だつたらうか彼女が何時も望んでゐたのは何であつたのだらう。か。それは凡て結局どういふことになつたのだらうか？今？　今？

　彼女はその譯の分らぬ或る身振りをなしつゝ佛像の下から離れた。彼女はジョセフィンが立つてゐた所迄行つた。彼女はジョセフィンに何事か――將來のことか何かについて、何でも恐ろしく重大なことを話し度かつたのだ。……

「ジャグちあんはどう思つて――多分――」と彼女は始めた。

　併しジョセフィンは彼女を遮つた。「どうしてだかと不思議に思つてゐたところなんだけれど、もし今ね――」と彼女は口の中で云つた。兩方で話しを止めた。彼等はお互ひに待つてゐた。

「何なのよ、コンちやん」とジョセフィンは云つた。

「だつて、ジャグちやんこそ何なのよ。私、後で云ふわ。」とコンスタンチアは云つた。

「いゝえ、あなたの云はうとしてゐたことを云つて頂戴。あなたから始めたんですもの。」ジョセフィンは云つた。

「私は……私は、あなたが初めに云はうとしてゐたことを聞き度いのよ」とコンスタンチアは云つた。

「冗談云つちやいけないわ、コンちあん。」

「そちらこそだわ、ジャグちあん。」

「コニーったら！」

「おゝ、ジャグちあんつたら！」

　暫らく杜切れた。やがてコンスタンチアはかすかな聲で云つた。「私、何を云はうとしてゐたか云へないわ、ジャグちあん。何故つて私の云はうとしてゐたこと、何だつたか忘れちやつたんだもの……。」

　ジョセフィンは一瞬間默つてゐた。彼女は今まで太陽の輝いてゐたあたりの大きな雲を見つめてゐた。やがて彼女は手短かに答へた。「私も忘れちやつたわ。」（完）

讀後に――今までリビドーを纏綿してゐた對象（父親）を急に失つて、リビドーのやり場のなくなつた、二人の妙齡の孃

―（七三頁下段へ續く）―

文藝學と精神分析（ムッシュク）（4）

武田忠哉譯

例へば、ファウスト、あるひはメフィストーの姿は、他の方法から規定された解釋の信念によれば、長い以前から、教養あるヨーロッパ人の意識の内部において、文學者と文學から遊離された生活をつづけてゐるにかかわらずここでは再び突然、それが一定のファンタジーの告示、一つの特殊な人間的狀態の表明として吟味されるのである。それらは――（ファウストとメフィストー）――、すべての他の藝術的に形成されたものと同じやうに、單に精神的事實と過程の、外部に對する「投出」、つねに同一のあわれな、文學する自我の眩惑的に美しい假裝にすぎない。精神分析は冷然とそれらを官能的內容――（それらの內部に包含されてゐるところの）――にまで還元する。それはこの方法を溯源的投出、あるひは還元と名づけ、單に文學ファンタジーの體現だけではなく宗教ファンタジーの、これらの、精神分析に卽した文學研究において、局外のオブザーヴァーにとつて奇異に映じ、また精神分析の本質とも關聯する他の一つの徵候は、それが文學現象を根本的に心理化してしまふことである。勿論、文學史家はこの方法に向つて、彼自身がいかに深く傳說の形成に捉はれてゐるかを認めるかもしれない。――（今日、この傳說の形成は、種々の方面から歷史の敍述に對して批難されてゐるものである）――。

一つの文學作品の構成・人物・場面、それらは最初から精神分析學者にとつて、單にその背後に隱れてゐる、より深い意味の種々の記錄化にすぎない。それは、無意識的過程を、すなはち、間接的なコースにおいてのみ照明され得る精神の領域の狀態と刺戟を象徵するのである。

ーの體現に對してもそれを適用するのである。

一般に文學者と作品中の人物を英雄的に理想化する傳統がいかに深く文藝學に刻みつけられてゐるか、そしてこの神話形成に類する傳統が今日もなほいかに効果的に遂行され得るか、もしわれわれがそれを熟考するならば文學史家がこの方法を見なして、彼自身の研究に關する神の審判のやうに考へることにも多少の理由があるやうに思はれる。

問題は、溯源的原理を論理的に正確に適用することに存する。しかしながら、それはけつして文學作品の要素が傳記的事實へ溯源されることを意味するのではない。むしろ傳記の內容は、作品解釋の場合と同じ原則に從ひその結果、例へばある文學者の現實における愛の體驗がその藝術的表現と共に、共通の根源、母に對する無意識的關係、にまで還元されるのである。

このテーマーの提出においては、フロイドが文學者に對して決定した幻想生活の三時性*が再び現れる。かうして、創作された人物は最後的決定の圓光を全く失ふにいたつた。一人の文學者が彼の作品と彼の生活において示す熱情のすべての體現は、相互に比較され、相互に試驗的に制定され、相互から展開される。その結果、第一の體現が第二の體現の前段階を、この第二の體現が、第三の體現の、注意深く蔽はれた分身を體現することが出來る。そして、かやうな體現は概括的に、その創作文學者が當時捉へられた心理的型式を組むための單なる資料にすぎないのである。

これらの研究についてさらに私が述べたく思ふ一つの特徵は、文學における自然感情の解釋である。この解釋もまた精神分析によつて扱はれる根本的な精神的葛藤、近親姦の欲望、エディプス・モティーフ、から出發してゐる。勿論、自然の讚美文は學史において最も多くのテーマーをもつ章の一つであるが、ここでは、それが無意識的に愛された母への讚美として說明される。神と自然。これらの、文化によつて愛される二つの觀念は、一つの小兒的な調子をもつ魂から、靑空と地平線に對して向けられる父と母の巨大な投出である。かうして、結局、自然（風土）に對しては、偉大な母性神たち、大いなる母といふ形成物、との間の一つの聯關が恢復される。比較神話學の示すところによれば、かやうな母性神はすべての人間文化の搖籃に現れてゐるのである。

自然に對する文學的憧憬は、生母との再結合、彼女からの新生、それらに對する無意識的憧憬を意味する。したがつて、ゴットフリート・ケラーの「生きながら埋められる」のやうな詩のシーリーズは、テーマーから云へば

かういふ母胎への復歸を語るものに外ならない。もつとも、ここでは、抑壓の程度は、その隱された內容を越えて、一層高い意味を持つのであるが。

この眩惑的な聯關から生じる結論は、今日までほとんど見透しされることができない。何故なら、いままでどの方面からも詳しい叙述が企てられてゐないからである。

最後に、この聯關と共に、藝術的寫實主義の問題が一つの新しい基礎において討議されるにいたつた。ここでは、文藝學の一つの根本問題が說さ及ぼされた。私がいかなる瞬間にも疑はないのは、この觀念――（ここでもやはり暗示されたにすぎないところの）――が文學の科學によつて取上げられ、それによつてなほ多くの收穫を將來するであらうといふことである。

＊ 過去・現在・未來。
いふまでもなく過去は嬰兒時代を意味し、そこでは願望が充足された。現在はわれわれの眼前の現實であり、そこから、その周圍の資料に卽したファンタジーが生れる。未來は、やがてかくあることが希望され、あるひは、かくあるであらうといふ、主としていはゆる白日夢の構成要素を形づくるファンタジーを指してゐる。
「過去的なもの・現在的なもの・未來的なもの、それらはいはば走り過ぎる願望の絲によつて竝べられてゐるのである。」（フロイド）「詩人とファンタジー」參照）

さらに精神分析による研究の中心には、象徵の槪念が横つてゐる。それはこの學說自身の根本問題に屬してゐるために、絕えず新しく理論的に討議される對象である。

象徵の性質に關する知識は、文學の理解のためのキーである。この點については、文學史家の間にも何らの疑問があり得ない。したがつて、近代の文藝學においても象徵を創造する祕密を强調し解明する努力が常に繼續して行はれてゐる。われわれはここでも再びそれに對する唯一の證明として、偉大なディルタイといふ名前を擧げれば充分であるやうに思はれる。

精神分析はそれ自身、一つの、象徵に關する全學說を展開させた。勿論、それはけつして統一あるもののやうには見えないが、それにもかかわらず、私の理解するかぎりでは、從來の文藝學においてこの對象に關して流布されてゐたすべてのものを遙かに凌駕してゐる。この學說は、夢・ファンタジー・神話の場合のやうに、象徵においても、一つの顯在內容と潛在內容を區別する。ここにも、一つの統一的な象徵形成の過程が、多樣な作品の根柢に横つてゐる。われわれはそれの假說を發展史的かつ

心理學的に探究することができるのである。

精神分析以外の文學史家は、象徵を、文學における世界觀の一つの表象として主張するのが常である。最早、それはより深い分解を許さず、また必要ともしない。何故なら、それはすでに述べたやうに、その意味をそれ自身の內部に持つてゐるからである。

精神分析の態度は、それといちじるしく相異する。それは最初、常にそれの疾病の症例を精神的に暴露することを注意しながら、夢と神經病に現れる一見個人的な象徵を種々の方向へ分類することを試みる。かうして、それは、性慾的・物的・機能的象徵、また他の場合には、例へば、個人的象徵と社會的象徵、かやうな區別を行ふやうになる。その結果、必然的に、これらの類型的な象徵形式の由來と構造が決定されねばならない。しかしながら、かかる決定は、單に神話的・文化的・語學的・人類學的、さらに他の種々の觀點を結合することによつてのみ到達され得るのである。

――（六九頁下段より續く）――

さん方の不安。リビドー安定の要求と恐怖との矛盾心理、亡くなつた父親のメモリーに長く支配せられてゐる心理を描いたものとして、なかなか鋭く面白い。雀の鳴聲は自分の內の鳴聲だと云ふ象徵表的現はマンスフィールドがいつも用ゐる技法である。『ブリル孃』の最後のところを參照して御覽なさい。滿月の夜にふらふらと床を出て大の字に横はるところなど、夢遊病的心理の性的背景は相當にひやりとさせられるものがある。この作の譯は三回續いて來たが今度の分だけでもまとまつてゐる。女性心理の研究にはこの人の作品はみな實に好材料を提供してゐる。（完）

『にんじん』を生んだもの

——ルナアル雜感——

倉橋久雄

ジユウル・ルナアル（1864—1910）は佛國ニエエヴル縣シナアロン生れで、小說及び戲曲「にんじん」の作者である。この原作は岸田氏が飜譯し、映畫では「我等の仲間」「巨人ゴーレム」のデエヴィヴィエ監督の作品が公開され、ラデオでは故友田氏等による放送がなされ、各方面に好評だつたらしい。映畫はその後幾度も上映されたが、それについてはすでに本誌上で（第二卷七號）大槻氏が評せられてゐる。

ルナアルは小說數篇の外に、戲曲八篇ほどある。いづれも在來の小說とか戲曲とかの概念からは、かけはなれたものでおそろしく平明な、そのくせ微妙な心理の動きとその分析によつて、如實に人間性を摘出してゐる點興味もあり生彩も放つてゐる人である。飜譯されたのは、この外に『葡萄畑の葡萄作り』、『明るい眼』『ねなしかづら』『博物誌』辰野隆飜案『南の風』（ヴェルネ氏）『別れも愉し』『日々の麵麭』等である。

「ファンテクは、身持ちの女を見たとか、『ボヴァリ夫人』を讀んだとかいふ時には、自分の母親に向つて微笑んで見せる。さういふことは彼の頭を混亂させ得ない。彼にはさういふことが喜劇的に見える。母親の目の前で、さういふものを面白がつてゐられるのが、いかにも嬉しさうだ。」

これは、岸田國士譯『ルナアルの日記』第三冊の一九〇二年六月二十日附の所で、ファンテクとはルナアルの息子の愛稱である。いかにもありさうな事ではあるが、ルナアルはこゝに彼の息子とその母である自分の妻とを登場せしめて、彼と母との關係に加ふるに、彼自身の家庭の表情をもあはせ得ようとしたらしいのだ。別の所で彼は「散文は幸福の言葉だ。我々が結婚して以來、妻よ私は一行の詩も書いてはゐないのだ、嗚呼！」と云つて

ゐる。そこで私は手許に飜譯された『ルナアルの日記』既刊五冊を置いて、その中から適當に引用しつゝ、ルナアルの『にんじん』振りを見てみようと思ふ。

「ルピック夫人。やり過ぎる喜劇女優。もう自分が何をしてゐるか、何を云つてゐるかもわからず、いつでも舞臺の上にゐるといふことを唯一の考へ、唯一の生活の根據としてゐる喜劇女優。」

ルピック夫人は『にんじん』の母親である。そこで、作者の母親についての感想――

「家族の思ひ出。祖母のマリーイヨヂは母を『女辯護士』と呼んでゐた。『あの娘はよく辯ずる』と祖母はいつてゐた。彼女は非常に怒りつぽくて、話の中に自分に當てつけた言葉があつたと思ふと、部屋を出て行つてしまつて、みんなが呼びに來るまでは拗ねてゐた。」又、「伯母と私の母とは、財布が輕くなつて來ると、互ひに云ひ爭ふのだつた。然し、私の母の方がよく『辯じた。』

『にんじん』のルピック失人と彼の母との相似。彼女は、ルナアルの言葉によれば「自分の喇叭を吹かうとするとすぐ毀してしまふ鶩鳥。」であることから、「聲の中で小刀を振り廻す戰爭。ルピック夫人はサアベルをもつてゐる。」に、或ひは「部屋の中では、一匹の大きな蝿がひとりでおしやべりをしてゐる。」、「おしやべり、彼女の舌は自動車に乘つてゐる。」「自然はおしやべりが嫌ひだ。」まで變貌してゆく。立場を代へて、彼女の側から見るとかうなる。「しやべつてゐる時には、聽いてゐる人たちの顏が見えない。言葉が宛かも木の葉の帷のやうなものを作る。おしやべりが濟んで、その葉の茂みがとれた時見ると人々の顏には驚きの色が浮んでゐた。」

「眞實を云ふといふことは不可能だ。然し、見え透いた嘘をつくことはできる。それを見透かすのはそつちの仕事だ。」とルナアルは云ふ。で、私は彼の嘘の一つを見透してやらうとする。

　カピュスは、エドワアヅが或る女に次のやうな挨拶をしたと云つて感歎する。

　――こんにちは、辻君のおばさん――

　さう云つて、カピュスの方を振り向いて――僕の母だよ。

　これは彼の云ふ「陶然たる嫌惡」に屬するものらしいが、感歎したのは、彼の友人カピュスのみではないらしいが如何。

「『にんじん』それでもやつぱり、私はすつかり書く勇氣はなかつた。次のことを私は書かなかつた――
ルピック氏がにんじんをルピック夫人のところへやつ

て、離籍する氣はないかと訊かせること、そして、それを聞いた時のルピック夫人の應待。なんといふ場面だ！」

作品にこそ書かなかつたが、遂に書いたと云へるだらう。そしてこれは彼の死後十五年經つて發表された日記の中でなんだから、今更何んと云はれようと勇氣は彼の側にあるだらう。

「彼女はマリネットを『娘』と呼ぶ。然し、モオリスと私のことは『こちらさんがた』と云ふ。昔のことでこまごましたつまらないことはよく覺えてゐる。然し一番上の女の子をなくしたことは忘れてしまつてゐる。その時、父は自殺をしようとしたくらゐだつた。」

これと、次のと結びつけて考へる。

「彼女の場合では信心が一つの神經病みたいだ。彼女は非常に急いで彌撒に馳けつけるので。村中の鷄を怯えさす。彼女の下裳は道の上を飛んで行く。彼女はすべての女たちを追ひ越す。木の蔭に隱れてゐると思ふと、殆ど韋駄天走りになる。それにも拘らず、彼女はやつと「アレクシオン」に間に合ふ位だ」

ルナアルによれば彼等の家庭は三十年も不和だつたさうだが、これは、この母の性格にも起因する所があらう。かうした女性を日本的なものに飜譯したら、我々の身近にも存在する女性の一人になるかも知れない。

一九〇九年――次の年ルナアルは動脈硬化症に罹り死んだ――八月五日、彼の母が變死した。その日の記述。

「私は彼女が井戸に身を投げたのだとは信じられない。彼女は通りかかつた誰かに二言三言聲をかけたあとで、井戸の緣石のところへ腰掛けに行つた、彼女は釣瓶の鐶を結び合せた。すると、脈管閉塞だ。彼女はうしろへ倒れた。すぐそばの荷車の上に乘つてゐた小さな小供にそれが見えた。アメリイの女中は「あッ！」といふ聲を聞いた。」（中略）「私は鉛のやうな足を引き摺つて馳けつける。走つてゐる人たちを追ひ越す。帽子とロスタン式ステッキを投げ棄てる。そして井戸の上を覗き込む。水面にスカアト、犬か猫を水に溺らした時のやうな微かな渦。人間らしい姿は見えない。」

ルナアルは冷靜に母の死を記した。なほ云ふ「或る嫌惡然し何に對する嫌惡。私はそれを云ふことができないだらう？」、と。「喪――眞ッ黒な嘘。死が近づくと魚の臭がする。」「今日からは、私のすべての考へには或る死の色づけがある。」、「よく見つめさへすれば、死といふことはよく理解できることだ。」、「既に私は墓地を散歩することに或る樂しみを感じだした。」だんだん追ひつ

められて來たやうなこれ等の言葉。だが。彼の死に就いての言葉はこれが始めてではない。以下それらを集めて見よう。「死に戯れつゝ生きること。」、「一人の死者の足跡を消すためには、一人の生きた人間の、永い間かかつて積み重ねた足跡が必要だ。」、「死亡通知を受け取る度に、私はその名前を戯れに私の名前に置き變へて見る。」、「毎朝、床から起き上りながら、人はかう云ふであらう――。しめた、俺はまだ死んでないぞ。』」「彼女は自分の墓所を見て來た。彼女は哀しさと恐ろしさとで氣が顚倒してしまつた。彼女は底の方を覗き込んだ。――まあ、お前さん、これがあたし達を待つてゐるんだよ。この穴を御覽、この穴を！」、「最も熟した論爭は常に次のやうな言葉で結ぶべきだらう――『それに、僕たちはやがて死ぬんだからね。』」「柩――再び出ることのない死の浴槽。」これらの言葉は父の自殺以後から書かれ始め、母の變死後益々高潮していつたもののやうだ。母の死後一年にしてルナアルもまたそのあとを追つた。彼は灰色の現實にたまりかねたか、月に逃げる。月のことばは時に、母のことばでもある。

「恐らく、神は、月のもう一つの側にいろんな言葉を書き込んだのだらう。然し、月は鼻で笑つてゐて、その側を決して見せてくれないのだ。」妖婦のおもかげ。「月は木の葉に捉へられた。木の葉は嬉しがつて體を搖つた。」「性のない女體の月。」純化された母の姿か。「屍衣の上に月の光の綏かな戯れ。」母の死直後の感想か。「月がもう出てゐる。寒いのでコルセットからちよいと出しただけの乳母の乳房のやうだ。」ルナアルは幼時乳母か女中に世話になつたと見える。彼が女中に少からぬ關心を持つてゐるに證しても――。「すべてのメタルには裏がある但し月だけは多分例外だらう。」前の否定に對する肯定。「胸をうたれるやうな月の姿。ああ、若し月から音樂がちよつと聞えて來でもしたら！」女よ！　近よるな。俺はいま月を見てゐるといふ所だらう。子守唄のない月。「月は海を、女の胸のやうに喘がせる。」、「彼等はまた月の話をする。彼等は云ふ――あしたは月の道筋が動くんだ。天氣が變るぜ。――少し問ひ詰めて行くと、彼等は自分でそれを信じてゐないやうなことを云ふ。然し、彼等の父親とか、村の或る老人とかはこれを信じてゐると彼等は云ふ。どぎつい月。柔い月。冷い月。」そして、「私の運命の小事、それは月だ。」、「私は、月の世界に昇れないと思ふと、まつたく悄げざるを得ない。」、「月は實に感じのいい女流詩人だ。若し月が光らなくなつたら、私たちの感受性は致命的な傷を受けて、哀悼に包まれるだらう。詩の水準も低くなるだらう。」遂に月の騎士

ルナアル「私は月の哨兵だ。」

『にんじん』及び『葡萄畑の葡萄作り』が出版されて四年目。一八九七年。『別れも愉し』が初演された、その年の六月十九日、ルナアルの父は、かねて肺充血で重態だつたが鹿狩りの銃で自殺した。その時の日記。

「煙とそして火藥の臭ひ、そして私は小さな叫び聲を立てる――『おや、お父さん、お父さん、どうしたんです、これは。ああ、さうか、なるほど！ なるほど！ やれやれ！』それでも、私はまだ信じられない――彼は冗談にやつてみたんだ。そして私は、彼の白い顏、彼の開いた口、心臟のそばの黒くなつてゐるものなどが信じられない。」彼が手紙を書いてゐるところへ、父の所の女中が父が呼んでゐるからと迎にくる。直ぐ出かけて見ると、母が叫んでゐる。父の室は鍵がかゝつてゐるのだ。幾度か肩をぶつつける。すると扉があく。それから前へ續く。母の場合もルナアルは信じられなかつた。これは當然でもあらう。家庭の不幸を背負つたのは「にんじん」のみでもなかつたのだ。ルナアルは父について云ふ「人は彼のことをかう云つてもいゝ『それは一人の人間に過ぎない。貧しいちつぽけな村のただの村長に過ぎない』と。そして、それと共に、彼の死について、ソクラテスの死を語るやうに語つてもいい。私は、彼を充分に愛さなかつたことを心に咎めてゐるのではない。彼を理解しなかつたことを心に咎めてゐるのだ。」ソクラテスの死を語るやうにと彼は云ふ。「父は温い血を持つてゐた。然し、彼の心臟は家庭の爐ではなかつた。」映畫「にんじん」の父もさうだつた。「ルピック氏。それは私の父だつた。私たちは永い間一緒の生活をした。お互に肘と肘とをすれずれに暮した。彼は死んだ。そして、私は彼から、こつてりとした、熱い、上出來のスウプを愛するといふ趣味を讓られた。」私はかつて父の死は僕に袴をもたらした」と言つたと云ふ話を聞いたことがある。ルナアルはなほ云ふ。「彼には、いつもおきまりの科があつた。右肘をつき頰を指の上にのせ、それだけ動かせる小指の爪で、内に曲つた一本の齒をいぢつてゐるのであつた。彼はこの癖を私に傳へた。體を洗ふことと曖昧な返事とを嫌ふことを私に傳へた。」ちよつとした動作の中に、愛すべき敵は發見される。「父は私の缺點を見てとる、が、私は彼の滑稽さを目にとめる。」、「父親と息子は顏を見合す度に微笑んでばかりゐる。微笑が彼等の間の惡さを救ふのだ。」もし笑ひをやめたら、お互ひの牙が白く光るだらうと懸念して、笑へない笑ひを苦つぼく持續する。思ひがけない笑ひの效用。父子間の喜劇的演

出。「父上、僕はあなたのことを忘れます。可哀さうなおとつつあん。あなたのことはもう何もかもおしまひになつたんだ。」父の死後。子の父に寄する言葉は美しい。「父。私は彼を正當に愛さなかつたことを時々後悔する。彼が苦にしたに違ひない。それと同じことに苦しめられてゐるからだ。」この時分ルナアルの長男も十四になつた。彼の父に對する同一化は、共に不肖な子を持つた共感でもあらうか。これを以つてすれば子を持つて知る親の恩もまだ言ひ足らぬ。

「あの男は母親に復讐するために『にんじん』を書いた。あんないゝ母親だつたのに」と云はれたほど、アンビヴレンツとしての愛の部分を父に、憎の部分を母に向けてゐたルナアルの女性觀、戀愛觀はどうであつたか。

――隨分、肌が白いですね。

――ええ、でも、とてもよごれつぽいのよ。

に見る汚損衝動。「女の墜落。なんにも毀れない。僅かに裂き傷が一つ。」は皮肉。「私が女の心に辿りつくには、最も花の多い、最も長い徑を擇ぶ」意味あり氣な言葉であるが、この言葉の裏は？「巴里にゐると彼は誘惑を感ずるといふわけではないが、氣持を亂される。彼は通りかかるすべての女の生活の中で、自分が何ものかでないことを殘念に思ふ。」、「私は女の後を追ひ廻すよりも、聖者になる事の方に、より近い素質がある。私の生命、私の魂の本質、私の野心、私の想念、凡ては私を聖者に近づける。が、私が聖者になるには、奇蹟でも起らなければならないといふことは充分感じてゐる。私の運命は、一人の賤業婦の手中にさへ握られるのである。そして、そのことが私を怯えさす。」の墮落願望。「戀人にならないで女を知るといふことは、釣りをする男が、河の上で釣糸を振り廻しただけで、魚といふものを知つた氣になるやうなものだ。」魚と女の結び付、前號所載塚崎氏稿中にも面白い實例が擧げてある。「戀愛といふものは、もうそれがどんなものであるかがわからなくなつてゐる。その本體は、言葉の氾濫の中で流失し溺れてしまつた。その現實の中は、きつと單純で明白なものに違ひないのだが、それを見つけ出すことが出來ない。」戀愛の迷路は「戀愛論」の氾濫にも見られる。「戀愛なんて、一體誰が面白がるんだ。しよつちゆう便所の話ばかりしてゐる人があるだらうか。」戀愛から便所を聯想して來た奇妙な心理だが、これもルナアル的話術でもあるか。これを分析的に見ると少しの不思議もないかも知れぬ。「屋根屋。その樂しみは、梯子の途中でとまつて、窓からそつと、着物を着換へてゐる若い女の姿を覗いてみることだ。」これと「通りに面した窓は芝居小屋と同じ價値があ

ルナアルと女中に就いて――ナポリで、水を汲みに行くのを億劫がつて、床の上に小便をしておいて掃き掃除をした女中を見てきたり、女中と同じ縫物を手に、同じ窓から、同じ外の風物を眺めて喜んだり、冗談に女中に接吻し直ぐその女を辭めさしたり、『にんじん』の覺え書に『にんじん』と女中とに何かをやらせること」と書き、母親が女中から取り上げたラブレターの事や、自宅の小さい女中に、母が『いともお前を愛してゐる老主人より』と書くのを面白がつたり等。この點は「にんじん」を見ても察しられる。

永くなるので止めるが、これだけでも『にんじん』とルナアルとに就いての一應の回答になるであらうと思ふ。

――終――

術語略解補遺

ワギナ（膣）ペニス（男性器）オナニイ（自慰）エヤクラチオン（射精）オルガスムス（恍惚、高潮）クリトリス（陰核）イムミシオ（挿入）

―、高水氏譯稿中のもの）―

る。」とはルナアルの窃視慾を語るものだらうか。「女のうしろを歩いてゐる時、あとをつけてゐるやうに思はれはしまいかと私の心配」はルナアルの投出。「これはもう自分ひとりの力で綺麗と云ふ小女ではない。無數の職人の手を加へた美しさである。」、「桃は時期といふものがあつて、その時が來ると、恰度よく熟してゐる。少し早すぎても、少し遲すぎても味がおちる。ちやんとした趣味のある人間は、恰度よく熟した恰好のいい桃しか喰べない。」桃を語つてゐるかに見えて敵は本能寺にあるといふ譯。

「私は自分の芝居では、妻は決して夫を裏切らず、夫もまた妻を裏切らないといふことを原則としてゐた」その通り、彼の『別れは愉し』、『日々の麵麭』、『ヴェルネ氏』にみられる。だが、彼はこんなことを云つてゐる。「生涯浮氣をしないといふことは一向平氣だ。然し、死んでから妻を瞞したこともない男として神の前に出るといふことは、なんといまいましいことだらう。」この言葉と同じく、彼の戲曲にも例外がある。『にんじん』がそれだ。彼はいふ。「どうして、この本を書くのを遠慮するわけがあるんだ。私の描く人物の半數は死んでゐる。ほかの人物も、明日か明後日は死ぬだらう。しかも、それは私のせゐではないのだ。」

むすめのこゝろ

岩倉凞子

あなたは多分私を御存知ないでせう。いゝえ、御存知ないどころか、私がこゝにゐる事にすらほんの少しも御氣づきにならぬでせう。それは當り前です。今こゝに一種の愛を感じ乍らかうしてあなたの前に坐つてゐる私にとつても、あなたはたゞ同じ電車に乗り合せた人にすぎませんもの。

でもあなたは――私が電車に乗り込んでからの一寸したはぢらひの間をすごした後一番先に眼に入つたあなたは――全く「いゝ方」のやうにお見受け出來ました。めつたに男の方に眼を奪はれる様な事のない私ですが。

あなたは、悪いけど、美男ではありませんね。お怒りにならないで下さい、決して悪い意味で云つてゐるのではないのですから。そして、序にもう一言云はせていたゞけば、背もずんぐりしてゐらして、凡そシャアとは緣の遠い御様子ですね。帽子もこの暑いのに鼠色のフェルトの中折、茶の霜ふりの薄手毛織物の背廣、磨きあげつくしたやうな茶色の靴、ネクタイは蝶むすびで――。

こんなにあなたの御様子がはつきり見えるのは、私があなたの向ひ側の席に坐つてゐるからです。

あなたの兩側に腰かけてゐらつしやる男の御子さん達は、御自分の御子さんでせう？　御顔は餘り似てゐらつしやいませんけれど、私には直ぐ判ります。物腰つきの――それが私をかうまであなたにひきつけてゐるのですが――よさは、あなたとそつくりですもの。

あなたの中折帽の下に私が今見つけたものは何でせう。御判りになつて？　私はあなたの性格のそれがそのまゝのあらはれであるやうな手入れの行きとゞいた髮（おぐし）を見てゐるのです。七分に三分位の割のごましほ、その白髮を私は見落してはゐません。その白髮はあなたの今までのおくらしの積りつもつた尊い或物だと私は思ひま

す。あなたはお若い時からどんなにか働き乍ら今まで生きぬいていらしたのでせう。よくいろ〳〵のまどはしや苦しみに負けずにこゝまでいらしたものですね。

私にはあなたが歯を喰ひしばつて、困つた事どもを切り抜け乗り越えていらしたのだと思はれます。波立ちの激しい世の中をよく自分といふものを守り通していらつしやいましたね。是は私の想像でせうか。私はどうしてもさう思ひます。それでなくて、どうしてこんなに立派な男の方であなたはあり得ませう。お強いのね。

あなたは、私のお父様としても頂度よい位の御年でせう？　私には世に比びなきお母様が居りますけれど――そのお母様に劣らぬお父様をいつも〳〵欲しいと思つてゐます。

世の人は子供は、例へ父が居なくても母さへ居れば育ち上る事が出來るやうに思ふやうですが、私はそれは大きな間違だと考へます。父丈では勿論、赤ん坊は育ちません。その折には母のゐる事が一番大事ですけれど育つて行くうちにはどうしても父がいるのです。殊に年頃になつて父の手にすがり度く思ふのは、男の子も女の子も變りないと思ひます。私がお父様をほしいとしきりに思ふやうになつたのも、つい二三年前からの事です。男と女とが生きてゐるのですから、お父様もお母様も必ず子供に入り用のものだと考へます。あなたが私のお父様だつたら、私は今より幾倍か幸な「むすめ」でゐるでせうに――。

あゝ。小さい方の坊ちやんとあなたは何を話していらつしやるのですか。あなたのお聲を伺ひ度いけれど、電車につきものゝやかましい音が開けひろげた窓からむやみに流れ込んで來るのできこえません。え？　何？

「……だいぢよぶです。」

澄み切つたしつかりしたお聲。是がそのいたいけな坊ちやんのお聲なのですか？　あなたは御自分の御子さんを育てる事にも御手柄をたてゝおいでのやうですね。坊ちやんはお幾つでせう。九つ位でせうか。そしてお兄様の方は十四位ね。

おや、あなたは心配さうに御子さんの手頸を握つて――熱をお計りになるのですね。大丈夫でせう？　この御子さんがはつきりと「だいぢよぶです。」と仰言つたのですもの。

それからあなたは大きい方の坊ちやんに何か仰言る。ほら。思つてゐた通りです。でも矢張り何を仰言つていらつしやるのか私には聞こえません。

「……だけど。さあ――。」

本當にまあ電車の音の憎らしいこと。でも私は何時も

よくやるやうに怒つたりふさぎ込んだりしません。あなたの前では恥しいことです。

おや。でももうお降りになるのですか。ではごきげんよう。御子さん達も本當によい御子さんらしいからそのまゝすつくり御育ちになつて次の世を背負つて御父様に負けずに勇ましく生きていらつしやいね。電車が止つたわ。ごきげんよう。あなたの御一家にお惠みと安らかさがいつまでもありますやうに。

×

御一家と言へば、さう〳〵あの方には奥様がおありの筈。どんな方かしら？ 一寸羨ましい氣もする。でもどうも喧嘩はなさるのでせうし――他所から見た丈では本當の家庭の幸福など解るものではないのだといふし、あの方だつてどんな反面を持つてるのか――怪しいものだ。若し理想的な方だとしたつて、他人を私はとりはしない。それに少しあの方は年をとり過ぎてゐる。若い人の中には、あの方のやうな味のある人は一人もゐやしない。第一、自分を考へて見たら、をかしい事だ――。何が理想的だらう。何が味だらう。自分は「むすめ」の中のくづなのに。

まあ、私は何を考へてゐるのかしら？ 見知らぬ人に獨りでしやべり掛けてみたり。理想的の夫だとかなんとか。――でも私は今お父様がほしい。

ほう。夕焼がきれいだ。虹だつてあんなに美しく染め分けを作らない。唯世界で一番大きなランプが灯つた時に空はあんなに美しくなるのだ。美しい。美しい。私は美しいとより外に云へない。云ひ方を知らないのだもの仕方ない。

美しい！ さうだ。美しい！ でいゝのだ。

夕焼の空は何て美しいのだらう！

讀後に――娘心の父親への思慕の中に自ら男（夫）への思慕が織込まれてゐるところが、仄かに無意識的に表現せられてゐます。作者は×點以後のところを削除しようかと云はれましたが、そこに作者の本音が少し露骨に出すぎてゐるので、「抑壓」しようとしたのでせう。併し分析者にはこゝの告白こそ見のがせません。併し理想の父への思慕は男への思慕に引下げられる（現實化する）ことを恐れて夕焼の空へと象徴的に昇天してしまひました。そこでこの一篇は詩化しましたが、昇天した夫は夕焼の天で、曉天や眞晝の天ではありません。老齢の天でなければならないところに氣をつけてよんで下さい。（K）

時評

支那知識人の日本觀

延島英一

支那の代表的知識人郭沫若氏

郭沫若氏は、現代支那の代表的知識人の中でも殊に日本と馴染の深い一人である。氏は我が岡山高等學校を經て九州醫科大學を卒業し、その妻女は日本婦人であるといふ。氏が支那知識人の中でいかなる位置を占めるかは、その政治的經歷を一瞥しただけでもよく分る。北伐當時の國民革命軍總司令部宣傳科長、武漢政府時代には第二方面軍總指揮部政治部主任、次いで國共分離後には南昌政權の革命委員會主席團主席にして、宣傳委員會主席、總政治部主任を兼ねた。南昌政權沒落後は日本に亡命、學究生活に入り「中國古代社會史」を著した。この書はわが西園寺公なども絕讃してゐるのである。

學歷、政歷のいづれからいつても、郭沫若氏は現代支那知識人を代表するに足る人である。その上同氏の日本に關する知識は、支那の知日家の間でも一頭を地を拔いてゐるに違ひない。今この郭沫若氏は上海に歸つて、支那知識人の抗日運動を牛耳つてゐるのである。從つて我々は氏の日本觀に格別の興味と關心を寄せざるを得ないのである。

郭沫若氏の見た日本に於る支那の位置

ABHUB アブフウブ

他の學問がアブフウブ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黃金を探し出す。

吉屋信子を憐む

不老泉院主

女の社會的な仕事と云ふものは、ペニスナイド(男性的羨望)と男性コムプレクス(男になりたくてなれない心)とを除いたらあとには殆ど大抵の場合、殘り少なになるのではないであらうか。それは山川菊榮の評論から吉屋信子の小說に至るまで比々みな然りだが、その僅少の限りと云ふのは、彼女等がその母性本能(鬼子母コムプレクス)を昇華活用してゐる場合だ。女の生きる道はこれしかない

郭沫若氏は、日本人は支那人を劣等視してゐるといふ。これは我々も否定するものではない。確かに日本人一般は、不當に支那を蔑視し、支那人を劣等視してゐるが、しかし郭氏が日本人の支那蔑視の證據として擧げてゐることには、精神分析の立場から少からぬ注意を要する點がある。次に引用して見やう。

「支那といふ言葉が日本人の口から出る場合には、歐洲人が猶太人をヂユーと呼ぶのよりももつと下等になる。例へば中國と日本とを並記する樣な場合には、日支と稱するのが例となつてゐるが、これは恰も支那人が中日と稱するごとく、謂はゞお互樣である。然るに本國に對する場合の慣例は別として、その他にも大いに差別がある。支那はその他の一個又は一個以上の國家と並列される場合にも、常に下位に置かれてゐる。英支、佛支、獨支、米支、白支、伊支、露支のごときはその例である。甚しきに至つては暹羅と並列する場合の暹支、フィリッピンとの非支、朝鮮との鮮支、近年はまた滿洲と並列して滿支と稱し、これに日本を加へて日滿支と稱するなど、支那は常に最も劣等の地位に置かれてゐるのである。かういふ現象は、多少注意して日本の新聞を見ればすぐ解る。就中感心させられるのは、それが劃一的に行はれてゐることだ。これらの表現法に關してはもと〳〵國法とか文法とかの規定があるわけではないが、幾千の新聞、幾萬の記者が皆申し合せたやうにかういふ表示法を取つてゐるのであるから、かうした所からでも彼等の國是は窺はれるのである。」(日本評論九月號)

郭沫若氏に表れた國民的劣等感

やうだ。婦德はその母性本能の昇華によつてのみ意義を發揮し得るのであつて、そのためには分析に依つて先づそのペニスナイドと男性コムプレクスとの解消を圖らなければならない。

そのペニスナイドと男性コムプレクスとの權化とも云ふべきは吉屋信子で、その作品の殆ど全部は女性の勝利、男性の謝罪を主題として飽くことなく繰返してゐるもので、それを世のペニスナイド孃たち、男性コムプレクス夫人たち、並びマゾヒスト氏、フェミニスト君等が隨喜渇仰してゐる有樣は社會病理的風景の好見本で、誠に新興日本にふさはしからぬ有樣ぢや。

その吉屋信子がそのペニスナイドぶりと男性コムプレクス癖とを露骨に示したものは、『主婦の友』特派員として最近北支方面に赴き、歸朝してその所感を都新聞紙上に掲げたところに見られる。症候として頗る面白いから、大部分を引用してところ〳〵に註釋を加へて見よう。

「北平天津の二都で何よりもはつきりかんじたことは、支那女性就中インテリ女

以上の引用を一讀して事の意外なるに驚くのは、郭沫若氏のごとき學識あり、日本語に精通し、日本を熟知してゐる人でも、事一たび國民的問題に觸れると、滅法もない誤解に易々と陷るといふことである。日本人一般が支那人を蔑視してゐることは事實であるが、國際關係を表示するのに常に支那を下に置くのは、その蔑視の故では決してなく、全く日本語の發音上の法則によるものである。例へば日本語で支伊、支佛、支印、支非と發音することは、伊支、佛支、印支、非支とするよりも困難であり、從つて意を傳へるに明瞭を缺くに至ることは、日本語を發音して見れば一度で分ることである。

このことは郭沫若氏その人の言に徵しても明かとせねばならぬ。日本人がいかに愚だとしても、暹羅や、フィリッピンや印度よりも支那を下位には見てゐない。それでも英支、佛支など〻同じく暹支、菲支、印支など〻普通いふとすれば、「支」が常に下位に置かれるのが蔑視の表現でないことは一目瞭然ではなからうか？

我々は英語を用ひて日支關係を表すのにジャパノ・チャイニーズ、日露關係をジャパノ・ラッシアンとはいはず、サイノ・ジャパニーズ、ラッソ・ジャパニーズといふ言葉を用ひるが、それはその方が發音がしよいからで、英語を用ひる時だけ支那に敬意を表するわけではない。

だが郭沫若氏ほど日本語に熟達し、日本の事情に精通してゐる人にして、なほ且つ「支」の字の下位にあることを以て賤視と感ずるといふのであれば、それは文法や發音法を超越した問題が先づ氏の心内にコムプレクスとして存在してゐると見るより他に解釋の仕方はあるまい。卽ち郭沫若氏は支那人として、日本人に對して國民的劣等感を持つてゐるのである。從つて「支」が

性の持つてゐる抗日排日思想が、どんなに激烈なものであるかといふことでした。それは非常なものです。日の丸の旗を門口に立てゝ日本人を歡迎してゐるのは、無智文盲の支那人や女で、第一高等教育を受けた女性群は一人として北平天津に殘つてゐる者はありません。他國に占領された土地におめ／＼と踏み止まり得ない彼女等の潔癖性から來るのでせう無理からぬことです。」

二都に一人もインテリ女性が停つてゐないと云ふのに、よく彼女等の考へてゐることが分りますね。信子さん自身の思想の投出であるらしいことが察せられる。

「支那の女性は日本の男の考へてゐるやうに男性へ追隨的ではありません、日本女性と同じやうな狀態に支那女性もおかれてゐると思つてはそれこそ大間違ひです。宋美齡の男性に對する權力は大したものです。燕京清華兩大學に在學してゐるインテリ女性は現在二割以上ゐますが彼女達の燃ゆるやうな理想は全部將來の宋美齡たらんとすることでせう、言ふま

下位にあることが豫想外の刺戟を同氏に與へるのは、全くそれが同氏の劣等感に觸れるためなのである。身長の低い人は身長の低いことをいはれると他人の想像を許さぬ興奮を示すことがあるが、それは郭沫若氏の興奮と同一心理に出づるものといはねばならぬ。

國民主義と劣等感

郭沫若氏は、今抗敵救亡後援會の副主任として、「救亡日報」、「抗戰」等の紙上にその椽大なる筆を揮つてゐるとのことである。私は本誌で支那事變の評論をするつもりはないが、たゞ郭沫若氏がその全學識と政治的經驗を、抗敵、救亡、抗戰といふ類の仕事に傾注し、その全エネルギイをそれに支出してゐることは、決して偶然ではないことを指摘したい。抗敵とか、救亡とか、抗戰とかいふ類の言葉は、すべて國民的劣等感に深く根ざした意味を有してゐる。これを別言すれば、郭沫若氏の愛國心は、氏の無意識の中に存在する劣等感と結びついた時に、極めて强烈に振起されるわけなのである。そしてこの郭沫若氏が、現代支那の國民的運動に於て指導的位置を占め、その先登に立つてゐるといふことは、とりもなほさず又その國民的運動の內容の一面を具體的に示すものといはねばならぬ。

一體國民主義といふものは、支那に限らずどこでも、その國民の國民的劣等感と結びつく時、特に火の手がはげしくなるものである。國民主義の發生には複雜な原因があり、それをこゝで細論することはできぬが、しかし國民主義が國民大衆の運動となるには、通例それは國民の劣等感を刺戟せねばならぬ。そこにあへて支那のみではなく、すべての國民主義の非常な危險性が

でもなく男女共學です。」

男性へ追隨的であると云ふことが、そんなに惡いのか。我等の家庭では妻は私に大抵の事柄に於いて追隨して來るが、その代り妻が主になるべき事柄に於いてはこちらの方から追隨して行つて少しも不都合はない。一切の追隨はいけなくて一切の反抗は讚美すべきものであるらしい。甚だマルクスボイ的であると共に、抗日支那的でありますね。信子さんの抗日支那讚美は尤でせう。それで、宋美齢が信子さんの御理想と見える。一層支那に歸化なさつたら如何？

『そんな譯ですから彼女達が親日家になるなぞ云ふことは木に倚つて魚を求めるやうなことで、凡そ文字を知る人間で抗日家でない者はない有樣です。……日本人が支那のインテリ女性に內心どんなに輕蔑されてゐるかも、また想像以上で、英米人は人間として交際出來ても、日本人は野蠻で侵略的な人間として憎惡されてゐます。日本の男が云ひ寄りでもすると、男にも優るわれ〳〵に對して失禮なといつた具合に氣焔まさに當るべからず

あるわけである。

現代の人類は、それ〴〵多かれ少かれ鞏固な基礎を持つ國民集團に分れて生活してゐる。しかるに他面その生活は、世界經濟、世界文化、世界政治と密接不可離な關係を有してゐる。だから現代の先進國民とは、もちろん比較的にではあるが、色彩的にいつて國民性が稀薄で、國際性の濃厚な生活をしてゐる國民の謂ひに他ならぬ。現代の先進國民と後進國民の區別の標準は、その生活の國際性の厚薄にもとめても決して間違ひではない。我々は貿易にでも、文化の交流にでも、政治關係にでも、たやすくその證據をもとめることができる。國民主義の危險の一つは、劣等感に尤もらしい衣裳を着せて、この人類生活を狹隘な桎梏の中に押込めることにある。

劣等感と弱點の理想化

劣等感に合理的な解決を與へず、その要求に一番簡單に滿足を與へる方法は、劣等感そのものに媚びるにある。即ち劣等感を生んだ弱點を理想化するにある。例へば、これは日本に實際生じたことであるが、知識上の劣等感を持つ勞働者に對して、知識といふものは勞働運動にとつてむしろ有害無益であるといふがごときがそれである。私はいはゆる知識人が本當に知識を有する人であるとは決して思はぬが、無知が誇るに足ることであるとも斷じて考へない。しかしこの無知の理想化が、一時日本の勞働運動を風靡したことは事實であり、その風靡の最大原因は、勞働者の劣等感にそれが快感を與へたことにある。

私は知識を蔑視し、知識人を排斥する勞働運動の鬪士が、身體を惡くする

です。」

何と支那の抗日への絶對讃美ですね。信子さん、そんなにいきり立たんでも、あなたなどに云ひ寄る物好きな男は一人も居ないから安心なさい。それほど野蠻で侵略的な日本がお嫌ひならば理想の天國の支那へ歸化なさい。いや心理的には遠うの昔に歸化してゐるのだ。何となれば、女は男から性的に「侵略」されるものにきまつてゐるから。それがいやだと云ふ女は不感症と云ふ病氣なんだ。分析を受けて早くその病根をとりさらぬと、日本社會の恩を受けて作家として折角築き上げた今日の位置を非國民の罪名と共に失ふことがあるであらう。そんな事だから女は輕蔑されるのです。私は女を尊敬することにかけては人後に落ちない方だが、分析せられざる人間は男によらず女によらず輕蔑する。日本の女には男性コムプレクス的で鼻先ばかり强いのが多過ぎる。いや、分析せられるまではみなさうなんだ。無理もない。憐れに思ふのみだ。

花柳界の盛り鹽

とたちまち醫者を訪れ、醫療を受けるのを興味深く眺めた。彼等は異口同音に、經濟的事情で理想的（と彼等が想像する）治療を受けられぬのを憤慨してゐたが、醫者その人の言は皆有難く聞いてゐた。醫術は知識でなく、醫者は知識人でないかのやうであつた。

　弱點を理想化して劣等感に滿足を與へることが、いかにはかない幻想に過ぎぬかを示すそれは好個の實例である。

劣等感は劣等感として解決せよ

　劣等感に跳梁の機會を與へることが、個人又は國民にとつていかに危險であるかは多言を要しない。從つて個人又は國民が、自己の持つ劣等感に深い注意を拂はず、その劣等感を高次なイオデロギイとやたらに結びつけることは、必らず幻想に耽る結果に陷り、自らの破滅を招かずには置かないのである。それは決して郭沫若氏のみに對する警告ではない。我々は我々周圍の日本の知識人に、余りに多くの和製郭沫若を見出すのである。我々は日本のいはゆる國民主義者の所論を聞く時に、郭沫若流の劣等感の露出に余りにしば〳〵接するのである。

　祖國と同胞を愛するには、健全に合理的に愛さねばならぬ。祖國に對する愛が、劣等感に對する刺戟を待つてはじめて振起されるやうな人は、たとへ一時どれほど多數の大衆を魅了しやうとも、決して健全な愛國者だといふことは出來ぬ。かゝる愛國者に指導せらるゝ國民運動は、國民及人類に對して不測の禍害を招來せずにすむとは考へられない。彼等を一種の精神病者だといつても、それは決して過言ではないのである。

　花柳界多年の緣起、慣習であつた「盛り鹽」を九月廿二日の花柳界の會議で廢止する申合せになつた由。鹽は軍需品であるのに、東京だけの藝者屋、料理屋などで一年に千二百六十石と云ふ莫大な量を空費してゐるのは勿體ないと云ふのがその理由である。我々のやうな花柳界になど一向緣のない朴念仁にとつても、料理屋の入口に打水でもして盛り鹽のしてある景色は一種のなまめかしさをたゞよはせて好ましい感じがしたが、考へて見れば實際不經濟な話ではある。現實原則の前にはこのやうにして、快樂原則は漸次にその堅壘を奪はれて行くのだ。

　併し、それにしても、この盛り鹽なるものは如何なる象徴的意義を帶びてゐるのであらうか。一體に鹽なるものゝ無意識的意義に就いては、英國の分析者ジョーンズの精細な研究がありそれが嘗て長谷川誠也氏に依つて紹介せられたことがあつたが、只今その文獻が手許にない。鹽は人體に血液に必要缺くべからざる要素で、これがなくては人間は生きてゐられない。死にかけた人間も食鹽注射で元

支那人にせよ日本人にせよ、生活の國際性が益々深まり行く今日、徒らに劣等感を高次なイデオロギイに結びつけ、一時の快を貪つてゐることは許されない。それは個人的にも、國民的にも、又人類的にも、損失のみを招いて利益はもたらさない。我々は劣等感の處置のみによつて國際平和を實現し得るとは考へぬけれども、しかし國民的劣等感を適當に解決することが、それの一礎石であることは疑へぬのである。從つて精神衛生は、個人的立場からも又國民的立場からも、一日も早く方法を講ずべき大問題だといはねばならぬ。

（十月六日）

現代青年のソ聯恐怖症の分析

大槻憲二

日本がソ聯と戰爭したならば日本が必ず負けると信じてゐる青年がインテリの間に多いやうである。私としてはソ聯との戰爭は支那との戰爭よりも相當骨折りであらうとは思ふが、日本が必ず負けると云ふ確信はない。寧ろ多分負けはすまいと云ふ信念さへある。私は何故に彼等青年の多くが、かくまで確信を以て日本の敗北を斷言するのであらうかとその心理に特別の興味を持ち始めた。

ところで、日本敗北確信者たる彼等インテリ青年の悉くが左翼主義者、または今なほ觀念上多少とも左翼的であることは、注目すべきである。觀念上の左翼主義者にあらざる青年で日本敗北を確信してゐる者は殆んど絶對にな

氣づく位だから相當なものだ。葬式に行つて歸つた人に鹽をふりかける習慣があるのは、不淨を拂ふと云ふ意味であるが鹽はその白色に於いて清淨の象徴であると共に、生命（復活）の象徴でもあるのだらう。

藝者屋、料理屋の門口の盛り鹽の象徴的意義は「歡迎」又は「誘惑」にあることは云ふまでもないが、壞れ易い、清淨な、而も生命的なものとして鹽を以てその意を表はしてゐるのは、この場合、鹽が處女象徴となつてゐるからであらうと思ふ。三つ並べてあるのは、三が聖數であるからだ。「盛り鹽を蹴飛ばして來る福の神」と云ふ川柳があるが、福の神はエビス（男根象徴）であるから、この場合、蹴飛ばされる盛り鹽は處女膜を意味するのであらう。盛り鹽に付きものゝ打水はワギナの濕潤を意味すると思はれる。家又は戸口はワギナに相當することは大槻氏の『雜稿』中「家と女」の章に説いてある通り。

釣鐘夫婦

いやうであるから、このやうな信念はマルクシズムの影響と密接に關係あるべきことは云ふまでもない。もしその間に密接な關係があるものとすれば、日本敗亡確信者たちの信念の根據は、必ずしもロシア勝利の願望に非ずしてマルクシズム勝利の願望であらねばならぬ。分析せられざる人々の信念はこのやうに多くの場合、客觀的材料に依つて築かれたものと云ふよりは、願望の根から萠え出した花である。

このやうにソヴエート恐怖症者たちの症狀は必ずしも彼等がその母國たる日本の敗北を願望するものでもなく、ソヴエート・ロシアの勝利を願望するものでもなく、實はマルクシズムの勝利を願望するものに外ならないのだと思はれる。併し、も一つ突込んで云ならば、彼等の信念はマルクシズムの勝利願望にあると云ふよりは、彼等自身の思想體系の動搖を好まないと云ふ點に根ざしてゐるのである。世界の進展が我等の思想する通りに運んで行く時には、我等は安心するが、自分の思想する通りに進展しない時には、異常な不安を感ずることは、現代文明人に就いて云はれ得るばかりでなく、古代の野蠻人に就いても云はれ得るのである。彼等野蠻人に於いては、それ等の不安は彼等の宗教心の源泉となつたが、現代文明人に於いてはそれ等不安は一種の神經症的症候となつて現はれる。我等は或る種のインテリ青年たちのソヴエート恐怖症をその症候に外ならぬと云ひたいのである。

×

さて、かゝる症候を治療するには如何なる方法を用ゐたらよいかと云ふにそれは彼等の思想や信念が必ずしも全部的に客觀的（意識的）なものではなく、大部分は主觀的（無意識的）なものであると云ふことを悟らせる（意識

江戸小唄にこんなのがある。撞木がある時、つりがねに向つて「撞き手もひとり撞かれ手もひとり、こんな仲のいゝめをとはあるまい」といふと「あい、それであたしも、ひとしほお前がいとしうごヲ……んす。」と答へたとか。この唄では撞木を男性象徴と解し、鐘を女性象徴と見てゐるところに、そのミソがあるのであらう。夫婦は硯墨關係と同じですればするほど色よくなるとか云ふが、とにかくこれは一生かゝつて二人で勉强して見るべきことで、あんまり不勉强でアチコチ漁つてばかり居てはこの道の醍醐味は會得出來ないのかも知れない。

敵に向つて退却

戰爭が酣になれば兵士は無我夢中になるが、恐怖心はやはり誰にもあるだらう。危險から早く遁れたいと云ふ氣持も誰にも起きるだらう。併しその時、後退して逃れやうとするのが普通であるが、前進して早く敵を叩きつけて危險を逃れようとする心理になることも、屢々であるらしい。その方が超自我の高い人間に

化させる）ことである。そのためには、彼等の考へてゐるソヴエート、ロシアが必ずしも現實のロシアではなく、マルクシズムの洗禮を受けた現代インテリ青年の大部分にとつて、一の象徴となつてゐると云ふことを明かにしてやるならば恐らくその目的の一端を達するに資すると思はれる。如何なる象徴となつてゐるかと云ふに、それは將來かくあらざるべからずと要請せられたる社會形態でそれがあると信ぜられてゐることである。實際それがそのやうな形態であるかも知れないが、ないかも知れない。併し現代一部のインテリ青年たちは、ないかも知れないと云ふ風には絶對に考へてはゐない。あるかも知れないと云ふ風に疑問的には考へずに、あるにきまつてゐる、あらねばならないと信仰的に、願望的に考へてゐる。かゝる信仰と願望とは最近の、スターリンの軍部巨頭大死刑事件の勃發に依つて餘程幻滅せしめられたことは事實であるにもせよ、なほ全部的に消滅してゐるわけではない。何となれば、それは無意識の深い根抵から萠え出してゐる思想だからである。

このやうに、ソヴエート・ロシアは現代一部青年にとつて「かくあるべき世界」、「やがてかくあることを欲する世界」、「より高度なる文明社會形態」の象徴、又は少くともその象徴としての一面を強く持つてゐる國として考へられてゐるのだ。それ故に、彼等にとつてソヴエート恐怖（又は日本敗北の確信）は、自分の世界觀（マルクシズム的唯物史觀の辯證法的發展に從つて進展する新たなる段階）の動搖を恐怖することに外ならないのだ。必ずしも現實のロシアを恐怖し、現實の日本の敗北を願望するものではないのだ。それ故に、彼等のソヴエート恐怖症を治療するためには、まづ彼等の世界觀の全部又は一部を改變することを試みればよいのだ。と云つても、我等

は自然であらう。その場各、義務感と死の恐怖から遁れたい願望とが妥協してゐるのだと云へる。この心理を或る將校は「敵に向つて後退」と名付けた由。この後退心理の中には、かつて本誌（第三卷第六號）に私が『豫防名案』の題下に分析しておいた心理（恐怖をつきぬけて恐怖を遁れようとする心理）も混入してゐるであらうと思ふ。

高價と親愛

私はかつて、本誌第三卷第六號本欄で「お安くない」と云ふ言葉を分析考察し「リビドーを多量に支拂つてゐる（高價に評價してゐる）と云ふ意味からであらう」と云つておいたことがあつたが、外國語に就いてもやはりこのことが云へるやうだ。現に英語の dear と云ふ語は古代ドイツ語の tiuri（價値ある）と云ふ語から由來し、現代ドイツ語では theuer と云ふ語となり英話と殆ど似てゐる、さうしてこの dear と云ふ語は親愛と高價との二義を有することは人々のよく知るところである。リビドーを多量に支拂つ

の方法は決して彼等と理論闘爭をするのではない。理論闘爭などゝ云ふものは、意識と意識との角つき合ひであつて、結局は水掛論で双方が感情を害して物別れになることに依つて終るにきまつてゐるのだ。我等の方法はもつと根源に遡る。卽ち、意識的な上部構造でなく、むしろその根柢をなしてゐるところの下部構造（本能感情）に鍬を入れることである。

無意識の土壤に鍬を入れゝは、上部構造は手を觸れることなくして瓦解して來る。瓦解しないまでも、少くとも多少の變革を來たすのは當然である。

×

では、ソヴエート恐怖症者たちの無意識の土壤に鍬を入れるには如何にしたらよいかと云ふに、それは個人として扱ふ場合と、集團として扱ふ場合とに於いて別がある。個人として扱ふには、普通の神經症患者を扱ふやうにその夢を聽き、その思想歴を質し、そのエディポス・コムプレクスの成生並びに崩壞の過程、超自我の確立過程などを具さに調べて見るのである。何となれば、彼等にとつてソヴエートはその超自我（良心）の投出對象（幻影）となつてゐるからである。

併し集團の場合には、そのやうな個人的經歴など詮鑿してゐることは當然出來ないからして、彼等の集合無意識を解放さるやうな種々な議論や雜話をそれとなく語り聞かせるのである。それ等の議論や雜話の例證となるものゝ二三を念のために次に掲げて多少の解說を付して見よう。

一、我等は小學生時代に、山崎闇齋がその門下たちに敎へた一つの敎訓に就いて、敎科書中に學んだことを想起する。それは闇齋がその門下たちを集めて「汝等、もし孔孟兵を率ゐて我等を攻め來らば如何にしてこれに應ずる

たものが親愛であり、親愛であるから高價なのだ。お金も高いほど人々のそれに對する觀念支出量は正比例的に多くなるわけだ。經濟學の心理學的基礎と云ふ問題は非常に面白いものであらう。

敬語と受働語

敬語と受動語とは屢々その形が同じであるのは、その心理起源が同じだからであらうと思ふ。「……せられた」と云ふ語はこれを自分に就いて云ふ時は受働語であり、これを第二者又は第三者に就いて用ふる時は敬語となる。我々は尊敬する相手に對しては能働的態度をとらないのが禮になつてゐるし、目下の者に對しては能働的態度をとつてやるのが好意となつてゐる。また「賜ふ」と云ふ敬語があるが、これを喰ふと云ふ意味の「たうべ」「たべ」から轉訛した語である。卽ち喰ふと云ふことは好意の最初の表現である。カニバリスムス（喰人本能）またサディズム（加虐本能）の愛の面とマゾヒズム（被虐本能）の尊敬の面とが見えてゐるのだと云つてもいゝであらう。

や」との問題を提出したに對し、門下生たちは一人として答辯し得るものがなかつたので、闇齋はこれに敎へて「直ちに孔孟を引捕へてその兵を破る、これ孔孟の道なり」と叫んだので、門下たちは度膽を拔かれたと云ふ話である。門下生たちは併し、孔孟が兵を率ゐて彼等を攻めて來ると云ふやうなことを考へて見たこともなかつたから面喰つたのであらうが、それは少くとも孔孟が彼等の超自我の象徵となり、彼等の自我はその前に完全に屈伏することが寧ろ至上の道德であると考へられてゐたに對し、その幼兒コムプレクスに一大鐵槌を下したものとして甚だ荒療治の方法であると思ふが、また痛快な說法でもある。德川時代の青年にとつて孔孟が超自我の象徵であつたやうに、現代一部の青年にとつて、少くともソ聯はその超自我の象徵となつてゐたと云ふことが出來ると思ふ。かくの如き敵に對しては無條件に屈伏することが至上の道德であり、かゝる道德は自國敗亡の確信となつて結果したのであらうと思ふ。

二、ソ聯は或は我國よりも文化的には進步した國柄であるかも知れない。併し假りにさうだとしても、高度の社會形態のものが低度のものに必ず勝つとは限つてゐない。我々は歷史を繙いてあまりにも屢々その正反對の場合の實例を多く見せられて來てゐる。文明民族は常に野蠻民族のために克服せられて來てゐる。勿論、文明人が野蠻人を克服してゐる場合とても、他に數多くにあるが。要するに、より健全であり、より現實原則的であるものが常に勝利を得るのである。勝利を得るのが果してい丶事か惡い事か、名譽か不名譽かは別問題として、少くとも歷史はさう云ふ事實を現實的に示してゐる。我等は常に事實を事實としてありのまゝに認識することから出發しなければ

完了と所有

大抵の西洋語では行爲の完了を表はすに所有を表はす語を用ふる。例へば英語の have, ドイツ語の haben の如きである。行爲の完了を表はす場合には助働詞となつてゐるが、所有を表はす場合には本働詞である。併し元來はこの二種の區別が明白にあつたとは考へられない。現に will, may, need 等の諸助働詞は屢々本動詞として用ゐられる。時に於ける行動の完了を表はすに所有語を以てすると云ふことは、その行動を既に所有したと云ふことを意味したのが、この轉用の無意識的起源であらうと思ふ。(完)

子供の見た親

大槻　岐　美

或る家の應接間で、その家の尋常二年生になる男の兒Sちやんと私との對話。Sちやんのお母さんと私とは永い間の交友關係である。主人を通してのではな

ならない。願望と理論とは然る後にその上に樹立せられなければならない。我等は文化史的により高度なる社會形態の國が勝利を得て、より低度なるものが、必ず負るやうであれば甚だ愉快であらうけれども、現實は屢々我等を裏切る。裏切られても絶望せぬだけの用意は常に整へられてゐなければならない。



三、私は『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌及び『英語研究』兩誌が共に九月號に紹介してゐたUnited Features Syndicate,所載の漫画『一皮むけば同じはらから』'Brothers under the skin" と云ふのを見て（こゝに再轉載させて貰つたが）非常に面白く思つた。Haves とあるは植民地を持てる富國で、それは必然的にデモクラシイを奉ずるやうになり、Have nots は植民地を持たぬ貧國で、それは自然ファシストになる。外見は大變違つてゐるやうだが、一皮むけば似たやうなものだとの意で、明白に

くは兩方とも未婚時代からの間柄で、凡てのおつとめを離れた交際であることを斷つて置く。

お母さんは用事があるらしくなか〳〵顔を見せない。私は煙草を吸ひながら肘掛椅子に休んでゐる。するとSちやんは私の顔をじろ〳〵見ながら始めた。

「小母さん、女のくせに煙草吸ふの？」

「うん、吸ふのよ。」

「僕の母さんは吸はないよ、煙草なんて……」私は此の兒の心理の傾きを承知し、豫期しながら言つた。

「さう？　それは吸はないんではなくて吸へないんでせう。きつとさうよ。」

「うゝん、吸はないんだよ。」

「うそよ、吸へないのよ。」

「フーンだ。」

かう言ひながらSちやんは如何にも負けん氣の强いらしい面持ちで次の言葉を探してゐるらしく、テーブルの周圍の緣に身體をこすり付け、私の方を大きい目でじろ〳〵眺めたり、無言で、室の中を歩きまわつたりしてゐたが、急に言ひ出した。「お父さんは吸ふよ。」

云へば英米佛の如き植民地諸有國はデモクラットとなり、獨伊の如き持たぬ國はファシストとなると云ふわけ。併しこゝへも一人、外見だけは大違ひの同じはらからのあることをこの漫画家は畫き忘れてゐると私は云ひたいのだ。それはコムミュニズムの毛皮を被り、腹に Cannot Haves （持ち得ざるもの）と書いた同胞（ロシア）のあることだ。ロシアは、帝政時代は黒海や日本海、黄海方面に植民地を求めてクリミヤ戰爭や日露戰爭を惹起して見たが、何れも失敗に終つたので、その不平が昂じて革命となつたとも解釋出來るであらう。併し今のソ聯としては植民地の事は殆ど絶望なので、自分は持てないのだからお前方も持つなと云ふ思想（持てる希望が生じたら何時またファシストやデモクラットに轉向しないとは保證の限りでない、現にその氣色はあり〳〵と見えてゐる）がコムミュニズムであると云ふことが出來る。これは精神分析的と云ふよりに社會分析的、否寧ろ、忠實にマルクシズム的な見方であるのだから、世のマルクシストたちも、もし彼等が果して自分等の理論に正直ならば、讃同してくれることゝ信ずる。

×

以上の如き話は既に斷つた通り別に理論鬪爭のためのものではないのだから、マルクシスト達が讀んだらさぞ一笑に附することであらう。それで結構なのである。併し一笑に附してゐる、その笑ひの下に動搖の色の仄見えるべきことを私は確信する。何となれば、私の話は理論的ではないかも知れぬ。（意識に愬えようとするものではない）が、無意識の解放には資するものだとの確信があるからである。

最後に斷るまでもないと思ふが念のために斷つておくが、私は別にソヴエ

「そりやさうでせう。お父さんは男だもの。」

又言葉につまつたSちやんは髪の毛の根本までおかくして力んで言つた。

「僕吸ふよ。」

私はこゝに至つてはじめて笑ひながら言つた。「Sちやん、あなた煙草なんて吸つたつてちつとも偉くないわ、あなた子供ですもの。」

完全に敗北を自認したらしいSちやんはいきなり扉をバタンと音高く後にして應接間を出て行つてしまつた。

以來、私はこの子にすつかり評判を惡くしてしまつたらしく、時々訪問してものぞいて見て、「なアんだ、小母さんか」と應接室に入って來ないのである。彼にとつてはあの問答がよほど胸につかへてゐるらしい。母親への尊敬を引き下げられた不愉快と、それの挽回策も効を奏さずにかへつて二重の屈辱感を得た事等は致命的な痛手となつて後に殘り、私の顔を見ると同時にこの不愉快な記憶が聯想されたらしいのだ。それは具體的にでなく恐らく無意識的なものである筈だ。

ートとの戰爭を希望してゐるものでは決してない。戰はずして勝つ、これ兵法の最上なるものである。況んや我等文化人に於いて、戰爭を回避したいのは固より當然である。併し一度干才を交へ始めた以上は、やるところまでやらねばならぬ。敗戰國にだけはなりたくない。

宋美齡の豪語と支那の幼兒性

宋慶齡は宋子文及び蔣介石夫人宋美齡の姉で、故孫文の未亡人であるが、彼女は米國雜誌『フォーラム』本年八月號に支那は「克服せられず」との題下に一文を寄せ日本軍は「張子の虎」paper-tiger で敢て恐るゝに足らず、而も支那は孤獨ならず、列强我に加擔せんと豪語して居る。さう豪語したアトからその「張子の虎」にどん／＼負けてゐる自國の軍隊を見て宋慶齡はどんな顏をしてゐるか見たいものだ。それに列强が我についてゐるなんて幼兒的なことを云つてゐるのだから困つたものだ。列强が假りに支那の味方になつたとしたところで、支那自身のために支那の味方をするのではなく、支那に於ける自國利權擁護のために日本に反感を持つと云ふだけの事ではないか。それくらゐの事が分らなくて、日本にカイン・コムプレクスを持ち、英米に善父コムプレクスを持つなどゝは到底現實原則には緣のない心理狀態のやうである。支那がこの幼兒性を放棄せぬ内は日本も苦勞せねばならぬであらう。

×

本號轉載の西洋漫畫中の「持てるもの」「持たざるもの」と云ふ言葉は目下世界的流行語になつてゐるらしい。日本の新聞でも近頃は盛んにこの語を用ゐてゐる。

私はこの結末を充分豫期してやつたことなのだが、何時までもこのまゝで置くつもりはない、機會を逃さずにSちやんと又仲よしになるつもりでゐる。

これを見ても解るのであるが、幼兒又は相當程度にまで生長した子供等にとつてもその親は如何に最初の尊敬すべく、他人に誇り得べきものであるかと云ふことだ。或る父親は外出の歸りに家の近處で數人の友達と遊んでゐた自家の子供につかまり、「これうちのお父ちゃんだよいゝだらう!」と紹介されて、相手が子供だと思つてもつい赤面したと云つて苦笑してゐた。

フロイドは、此の子供の親への尊敬を子供自身のナルチスムスの投出として說き、それが親實情勢の前に崩されることを余儀なくされると、或は内に取込まれて超自我形成となり、或は外界に再投出せられて君主となり、神となると述べてゐる。深く研究したら興味ある諸問題エディポス心理、良心の起源などに必然的に觸れて行くことは言ふまでもないが只今は、これ丈けにして置く。(完)

講座

乳兒及び幼兒の心理に就いて

大槻憲二

一、離乳外傷と離乳期の問題

離乳と云ふことは乳兒にとつても母親にとつても大きな快樂放棄であるので、とかくこの事に就いて間違ひが起き易い。醫者はたゞ、肉體的營養の事ばかり考へてゐて、その心理的影響の事を殆ど考へてゐないので、かつて私が本誌第四卷第一號時評欄で論難したやうに、「とても苦い鹽酸キニーネを乳房に塗れ」と云ふやうな某醫學博士の暴論が出て來るのである。

乳兒がいつまでも母親の乳房に執着するには、多くの場合、母親の扱方が悪いからである。母親が寧ろこれを無意識的、本能的に願望して、そのやうに誘惑（敢て云ふ）するからである。我等の經驗では、母親の處置さへよろしきを得れば、その子供が先天的の低能でゞもない限り、一定の離乳期には正常にこれを卒業するものである。母親にとつても乳兒にとつても、離乳は自我とエスとの葛藤の機會である。母親は早く離乳させねば手數が掛つて困るとは思ふのだが、併し授乳は彼女等の本能的快樂であるので、なか／＼これを放棄しようとはしない。乳兒も、生長につれて乳房への執着を恥づる心理が自然に擡頭するが、併しこれを斷念することには根深い淋しさがある。この場合、子供の自我は未發達なのだから、母親がこれを斷行するやうに促して行かなければならないわけだが、その母親が授乳の快樂を永く放棄したくないと云ふ願望があるのだから誠に困るのである。それは母親にとつては、授乳くらゐ端的な愛情の發露はないからである。授乳さへしてゐれば、自分は子供を愛してゐるのだと云ふ確信がある。その確信が誤てる本能願望的基礎の上に立ち、現實的基礎の上に立つてゐないと云ふことを、世の多くの分析せられざる母親たちは知らない。

次の子供が生れゝば、自然離乳も已むなく斷行せられ

るやうになるが、次の子が出來ないとか、或は夫に早く死別れて、殘された乳兒に不憫がかゝつてゐると云ふやうな母親は、十中八九、いつまでも乳房を含ませてゐる。二年や三年どころはめづらしくない。小學校に通ふやうになつてもまだ含ませてゐるのがある。「一人つ子、學校へ行く前に一寸ねぶり」と云ふやうな川柳を何處かで讀んだことがあるが、流石に民衆詩人の觀察は鋭い。併し、もう流石に人前を恥ぢて乳房を含ませなくなつても、乳房の代りにお菓子を寢る前に無暗に與へたりする母親があるが、これまた心理的には母親にとつても子供にとつても乳房の代用であるのだ。

生後滿一年から一年半位で、青白く貧血して一體に體が小さく輕くて、筋肉がブヨ／＼してゐる子供が日本に多いのは實にこの離乳の遲すぎたことに起因するものだと、聖路加病院小兒科齋藤博士はかつて云つてゐたが、一つには身體虛弱な子供は心理的にも退行してゐて乳房に執着すること甚たしく、母親の不憫もかゝつて乳房を含ませたくなるために益々身體を虛弱にし、心理を退行せしめると云ふ結果にもなるのであらう。子供だとて、いつまでも母乳に執着してゐるのは恥づべきことだと云ふことを、自然に感じてはゐるのだ。いつぞや自家へ來た親戚の子供（五歳にしてなほ母乳に執着してゐる）が、自家の妻に毅然たる態度でたしなめられたら、始めはうらめしさうな顏をしてゐたが、漸次に顏色を柔げて遂に「叔母ちやん御免ちやい」と云つて謝罪し、それからは母の乳房に執着することを斷念した。且つそれから見違へるやうに身體も頑健に、心理も五、六歳の子供らしい程度に發達して行つた。

哺乳期の經驗は後年に於いて所謂口唇性格を形作る。口唇性感及びその離乳期に於ける外傷が如何なる性格を形作るかに就いては、前號本欄に講述しておいたから、こゝには省略する。

離乳は何ヶ月頃がよいかと云ふに、醫學博士岩田正道氏は十ヶ月から十二ヶ月の間が最も適當と思はれると云つてゐる。併しこれは平均を云つたので、非常に健康な子供ならばも少し早くても差支へはないと思ふ。自家の子供などは七ヶ月半目に鹽せんべいを極めて少量細かく碎いて與へたが異狀なかつた。と云つて、それ以後劃然と離乳させて固形物を與へたのではない。その後半ケ月にしてお粥を少々與へたが消化不良であつたので、なほ固形體は見合せた。要するに、離乳は一時にすべきものでなく、生後半年位から牛乳や重湯や果汁の如きものをぼつ／＼與へて母乳以外の喰物に漸次に慣れさせ、いつ離乳したとも分らぬやうに離乳させるのがコツであらう

と思ふ。無論、さうしても子供は乳房に執着するものではあるが、母親の方に與へないやうにしようと云ふ覺悟と克己心とさへあるならば、子供をしてその執着を斷念せしめることはさして困難でないと私は信じてゐる。

併しそのためには平素授乳の時間と場合とを劃然と定め、たゞ泣きさへすれば口に乳房を押し込むと云つたやうな野蠻な無方針な態度をやめてかゝらなければ、子供の方だとてなか／＼承知はしない。しないのが當然である。「可愛い子には旅をさせ」と云ふ言葉がある。旅とは手離すと云ふことである。手離すとは獨立させると云ふことである。この「旅をさせ」る覺悟の原型は實に離乳の時にあると云ふことを悟らねばならない。離乳は母親の對乳兒愛から對少兒愛に移る轉機であり、同時にそれは子供を一人前の社會人として立たせる第一歩でさへあるのだ。

二、幼兒の强迫症的傾向



こゝに掲げた漫畫は、東京朝日新聞本年五月十七日所載、横山隆一氏畫「養子のフクチャン」一九二回目の下三段の複寫である。第一段では圖中二童が喧嘩をしてゐるところへ、フクチャンが來て「タダチャン、オバサンガヨンデルヨツ」と傳言して

ゐる場面である。この漫畫の趣旨はつまり、幼兒が一度依頼又は命令せられたことは飽迄も守り通す馬鹿正直な一面を有すると云ふことを誇張的に表現してゐる點に存する。と云つても、子供はどんな依頼や命令でも常に、「馬鹿正直に」守り通すかと云ふに、必ずしもさうではないのである。子供は隨分氣まぐれなもので、自分の氣の向かないことであるならば、どんなに親や友達が、念を入れて云附けておいても、風の吹き廻しでどこへ吹飛んで行くか知れたものではないのだ。併し自分のこれと思つたことは飽迄も頑強に守り立てるものである。では彼等はどう云ふ種類の事柄を「これと思ふ」のであらうか。

さて、問題をこゝまで考へて來て、この漫畫の主題に類似するものとして私にまで聯想せられる二三の話がある。

一、ポムペイ市がヴェスビウス噴火の灰下に埋沒せられた時、勇敢なる一兵士は城門の步哨に立つて死の近づきにもその職責を棄てず、遂にそのまゝ灰中に埋もれて死んでしまつた。爾來一七〇〇年は經過し、ポムペイ發掘の當時に、彼の「忠實なる哨兵」の甲冑に身を固めた姿は當時のまゝに發見せられた。この物語はサー・エドワード・ポインターと云ふ畫家の描くところとなり、リヴプール畫堂に展列せられてあり、その複製は讀者諸氏に於いても既に見られたところであらうと思ふ。

これは常識的には大變職務に忠實な兵士の美談として感動せしめられることではあるが、一步飜つて考へ直して見ると、どうもこの兵士の心理はいさゝか常軌を逸してゐるやうに思はれる。全市が灰で埋もれてしまひさうになつてゐるのに、自分一人城門に控へてゐて何になるであらう。哨兵とは外敵の攻來ることを內に傳達するだけの役目である。外敵が既に內を亡ぼして了つたのに、まだそこに立つてゐて自分もむざ〳〵死んで行くと云ふことは意味がないではないか。

二、私の妻の姉の少女時代の實話である。當時三、四歲であつたらうか。母親は彼女に向つて「Nちやん、そこを眞直に步いて行つて御覽」と命じた。Nちやんは云はれた通りに步いて行つた。突當りは襖であつた。Nちやんはその襖の前に至つて立停つた。母親はそれを見て別に氣にもとめず、傍の來客と話し續けてゐた。暫らく立つて氣づいて見ると、Nちやんは相變らず襖の前に突立つてゐる。「おや、Nちやんどうしたの？」、そんなところに何をしてゐるの？」と聲をかけて見たが返事をしない。前へ廻つて顏を覘き込んで見ると、兩眼に一杯淚をためてゐた。

親は別に襖をつきぬけて向ふへ行けと云ふ難題をふきかけたわけではなく、たゞ來客に彼女の大きくなつた歩行の姿を見て貰はうと思つたに過ぎなかつたのであらうが、彼女はそれを飽迄も突進して行けと云ふ意味に解し、而もそれは襖に遮られて不可能であるので、そこに相剋を感じてくやし涙にくれてゐたらしい。それは、常識的には彼女の勝氣を示すものではあるが、心理學的には彼女の幼兒強迫症的傾向を示すものである。

三、私自身が尋常小學校一年生の頃であつた。私の机は窓邊に近かつた。その窓の硝子戸は明け放たれてあつた。風さへ強い雨天であつた。雨脚は窓を通して吹込み、私の身體と机とはびしよ濡れになつた。が、私は自分でその窓を閉めることも、先生に云つて閉めて貰ふことも出來なかつた。雨の降込むまゝにヂッと我慢してゐた。その内に、先生が教室内を巡廻して來て、私の傍に來、早く窓を閉めればよかつたと云つた。私は今なほこの事件を忘れないでゐる。併しその心理に就いては明白な記憶がないから分析も確實には出來ないが、たゞ恥づかしい(それもあつたにはあつたが)と云ふだけの事ではなかつたやうに思ふ。

以上四つの場合を比較して見ると、そこにある共通點の存することを何人も容易に氣付くであらう。健康な大人ならば、あゝ云ふ風には振舞はないであらう。フクチヤンの立場に於いてならば、タダチヤンが日が暮れても來ないやうならば喧嘩相手を無斷釋放して歸宅して了ふであらう。ポムペイの忠勇なる哨兵(私はこれを幼兒心理の名殘りと見てゐるのだが)の立場に於いてならば、あんなところにいつまでも突立つてゐないで、人々を救うなり、自分自身の安全を計るなりするであらう。Nちやんの場合ならば、襖の前まで行けばさつさと引返して何處かへ行つてしまふのであらう。私自身只今の私ならば、先生の許しを得て窓硝子を閉めるであらう。

彼等がそれをなし得なかつたのは、彼等が他人の命令や規則に忠實であつたと云ふよりは、命令や規則を杓子定規に守る程その心理の働きに自由と獨立性とがないのだと云つた方がよいであらう。換言すれば、彼等の自我は未だ發達せず、その行動の主體は自我でなく超自我又はエスにある。こゝに擧げた四つの例は、併し、エスに因ると云ふよりは、超自我に因つてゐることは明かである。ところでその超自我の内容たるや、決して未だ人格的なものではなく、強迫神經症的なもので、その強迫の力は規則に對する尊敬と云ふやうな社會感情的なものから來るのではなく、他から與へられた命令が自分の超自我の中に入込むと、その超自我は全能念慮の感情からそ

の行動への原動力を得て來るもの丶如くに私には感ぜられる。フェレンチーは幼兒的全能感に依る强迫症に就いて、本號卷頭の論文中（第四頁）に次のやうに云つてゐる。「人が何らかの不可抗力なる本能に服從しなければならぬと云ふことを氣付いてそれを投出したものが全能感である」。さうして「强迫神經症は、精神生活が幼兒的發展段階へ退行してゐるものである。その幼兒的精神生活の特質は、願望と行爲との間に禁制し、遲延させ、反省させる思考活動がまだ介在してゐないことにある」と。つまり自我が確立してゐないと云ふことである。

要するに、右の四例に於ける强迫症的傾向はその起源がその全能感にあり、その全能感は彼等の本能力の姿をかりた狐に過ぎない、エスに於ける全能感のエネルギーを超自我が借り來ることの出來るやうな種類の命令又は依賴の下された場合にのみ、彼等幼兒は親や友達の命令に非常に忠實になるのである。もし自分の全能感に訴へない場合には、そんな命令などは直ぐに忘れてしまふのである。卽ち別言すれば、未だ道德的行爲と呼ばれ得べきものではなく寧ろ病理的現象だと云ふ點を明かにしておきたいのである。併しこの病理的現象が後年の健康な良心の基礎とならないとは云へないが、必ずなると斷言することも出來ない。（完）

精神分析學語彙（三〇）

一、本能感情發動 Affektentbindung —— 本能感情の發動は常にエスに於ける本能エネルギーから起るのである。本能感情それ自身は併しながら、常に意識系統に依つて發展せしめられ、且つたゞ意識系統に於いてのみ感知せられる。無意識から言動的、分泌的行動への道が抑壓によつて塞がれると、本能感情の發動は不可能となる。さう云ふ場合には、エスに於ける心理的エネルギーは（元來ならば本能感情となつて發散せらるべき筈のところ）變態的に發現して、例へば、不安となつたり種々な症候となつたりするか、或はそのまゝ置去りにされて、逆經綿に依つて自我から遠ざけられることになつたりする。

一、本能感情反應 Affektivität —— 本能感情が種々な事件に對して反應した現象の總體を云ふ。本能感情現象と云つてもよいと思ふ。本能感情現象と言動現象とは心理的裝置の發散口をなしてゐる。兩方の發散口は自我の支配下にある。併しこの支配は本能感情現象に對しては、言動現象に對してよりも無力である。そこにはエスの側からの抗議が容易に提出せられる。その抗議に依つて、自我は本能感情への支配權を一時的に、部分的に喪失する。それがいつもきまつて見られるのは夢に於いてゞある。神經症患者の症候に於いては、病理的に、部分的に、本能感情現象への支配權をエスが要求してゐるのである。——（未完）——

内外彙報

フロイド先生健在

フロイド先生重態？ の噂を聞いて早速アンナ・フロイド孃に、見舞ひの手紙を出したことは先號本欄に報じておいたが、Anna Freud 孃から九月六日付返書があつて、父君の健在を報告せられた。その文面は左の如くである。

「拜復。私の父に關する新聞のあの報道は英國とアメリカとに於いても現れましたが、總て誤報であると云ふことをこゝに報告申上げることの出來るのを私は深く喜びといたします。父は本夏は殊の外健康で、いつもの通り仕事にいそしんでをりました。いろ〳〵御心配下さいまして心から御禮申上げます。

敬具

九月六日　　アンナ・フロイド」

卷頭のフロイド教授近影は、米國分析季刊誌一九三六年四月號誌から轉載したもので、教授八十歳祝賀紀念式當時の撮映であるらしく思はれる。最近の風貌を彷彿することが出來やう。

ベルグラー博士の書翰

ヒッチマン、ベルグラー兩ドクトルの「冷感症研究」はこゝに第三回目の譯文を掲げてあるが、その第一回が本誌上に現れた時、ベルグラー博士（Dr. Edm. Bergler）宛に本研究所からその一部を送り、この「冷感症研究」と對をなすべき近著「不能症研究」及び同氏近影の寄贈を乞うたところ、八月十二日付及び同十五日付にて返事があつた。第一信は當方からの雜誌のみを見ての禮狀であり、後者は此方の手紙を見てからの返事である。後者をこゝに紹介して見よう。

「拜復。私は御惠送の雜誌に對して二日前に一書を認めましたが、七月廿三日付の縷々御說明の貴翰を漸く今日落掌いたした次第で、雜誌の方は既に三日前に拜受いたしてゐたからであります。

貴翰によりますと、拙著冷感症の第一章を御高譯になり、以下順次に譯して數ヶ月後には全卷譯了の運びに至らしめようとしてゐられる由、御厚意の程を深く感謝いたします。さう云ふ風になされば最後のものが出來上つて一書に纏め上げなさることは經費もかゝらなくて結構なお考へと存じます。

小生は只今イタリーに旅行中でありますが、二週間後にはヰインへ歸鄕いたします。歸鄕の後には拙著不能症論並びにタレイラン、ナポレオン、スタンダル、グラッベを御送り申上げます。それから御希望のヒッチマン博士並びに小生の近影も御送り申上げます。貴下の方からも分析に關する貴著御惠送下さらば幸甚に存じます。學問上の結合と云ふものは言葉の不通の場合にも結構成立つものであります。拙著の版權は出版者になく著者にありますのですから、拙著飜譯の件については何の御厄介も御座いません故御安心下さい。

貴誌のドイツ文の目次を一覽しますと、大層內容豐富のやう

で、且つ、科學的に甚だ高い水準を覘つた主題が扱つてあります。またもし御希望ならば、貴誌のために書下し原稿をお送りいたしましてもよろしう御座います。

色々お贈りものにより大變有難く存じてゐる旨をこゝに再言し、なほ向後の友誼を懇願いたします。矢部氏その他、御地の同僚諸氏によろしくお傳言下さい。　敬具

八月十五日、　イタリーにて、ベルグラー」

『イマゴー』本年第二册

一、『罪障感からの對象關係』（別題、性格型の一研究）アーネスト・ジョーンズ（ロンドン）——戀愛する者が、相手に對して倫理的な態度をとるやうになる心理を分析したもの。

一、『精神分析に於ける社會學的並びに生物學的方針』フランツ・アレキザンダ（シカゴ）——精神分析と生物分析と社會分析との各分野の交渉を説いた論文。

一、『夢に於ける現實試驗』トマス・フレンチ（シカゴ）——現實試驗は自我のなすことであり、自我は覺醒中にのみその機能を發揮するが、夢の中に於いても、半ばその機能の働くことがある。

一、『反復、律動、退屈』ルネ・スピッツ（パリ）——子供が同じ童話を繰返し聽くことを好む如き心理に就いて。

一、『生物分析新説』ジイグフリード・ベルンフエルド（ロンドン）——蜂は肛門性格的であるとか、蝶は抑壓的であると云ふやう新しい見地を動物學的に打開してゐる。

一、『リビドー標準の問題』イムレ・ヘルマン（ブダペスト）——

一、新刊紹介批評——

『精神分析教育誌』本年第一册

一、『幼兒教育に於ける童話の役割』マリ・ブリール——ニウヨオクに於けるワルデン學校に於ける婦人分析者の講演。

一、『精神分析的方針に基く學校に於ける兒童分析と教育』マルチン・グロートヤーン（米國）

一、『教育に於ける難點除去の試み』ベルグマン

一、『死の不安からの不眠症』エムマ・ベルナー

一、新刊紹介——

『精神分析季刊』本年第一册

一、『防禦機制としての自己沒却』ドリアン・フアイゲンバウム遺稿。

一、『悲哀の喪失』ヘレーネ・ドイチ（ボストン）——哀悼の心理について。

一、『現實と無意識』トマス・フレンチ（シカゴ）——現實試驗に於ける動的の問題その他。

一、『夢に於ける現實試驗』トマス・フレンチ——「イマゴー」の内容として右に紹介せられてゐるもの、原文

一、『バルザックのペール・ゴリオ』ミルトン・ミラー（シカゴ）——バルザックの作品分析。

一、『衆人恐怖症患者に於ける退行』エドキン・アイスラー（シ

カゴ)

一、『防禦機制と全人格の構成』テレーゼ・ベネデク(シカゴ)

一、新刊批評――

最近國內事實

▼『呪はれた結婚悲劇。新妻の告白』古澤平作稿――『通俗醫學』十月號。

▼『人妻の貞操』セギユール原作、永戸俊雄譯――『モダン日本』十月號所載。廣告文には「フロイド派小説」とあり。

▼『怪魚船人魚號』高橋鐵作――文藝春秋社『オール讀物』十一月號。

▼『精神科學に照した心の神秘』高橋鐵――『日の出』十一月號。

▼『超現實派年末街』高橋鐵稿――『廣告界』十一月號

▼『子供の叱り方談義』大槻憲二談――報知新聞、十月五日、家庭欄。

▼『戀愛性慾心理の積極處置法』大槻憲二稿――「人生創造」十月號。

▼『金持の心理と貧乏の心理』大槻稿――『金』九月號。

▼『厭世觀と享樂主義』大槻稿――『生きて行く道』十月號。

▼本誌前號內容に關しては本號卷末廣告を參照ありたし。

本研究所研究會例會

八月は例年通り夏中休會にし、九月は廿四日に久しぶりの會合を例によりアメリカン・ベーカリに於いて持つた。第三月曜日の筈であつたが、防空演習を慮り、少し日延べをした。

定刻開會、まづ例により本誌前號「語彙」欄につき、司會者から解説があり、終つて食事をとつた。食後、新來者島崎勝次郎氏(特別誌友)及び吉田靜枝氏(長崎氏友)の紹介があつた。

研究談は本夕の主題に基きまづ霜田靜志氏のニイル新著「恐ろしき學校」の讀後感想から始められた。ニイルが分析學に對する態度につき大槻氏から質問があり、霜田氏これに答へて、談は理論家と實際家との職責別と云ふやうな論點に移動して行つた。ニイルは理論家でなく教育實際家であると云ふ結論に達して行つた。

次に繪畫に特別の關心を寄せてゐられる小山良修氏から、最近のシウルレアリズムが精神分析から遊離せんと努力しつゝあるに就いての意見を一同に求められ、大槻氏はシウルレアリズムが分析學から離れることは差支へないが、無意識から離れることは到底出來ないのだから結局同じことだと云ふ説が述べられた。

第三に高橋氏は力篇「象徴形成論」を述べられて批評を乞はれた。長崎文治氏その他から二三の質問があつて、高橋氏これに答へられた。何れ同論文は本誌次號の卷頭に揭げられることになつてゐる。

最後に、大槻氏、「幼兒に於ける現實感の發展段階」(フエレンチー)の興味深き一節を朗讀しつゝ、所感を述べられた。乳兒心理から幼兒心理になる過程の研究としてこれほど興味ある論文は稀である。

出席者は右言及諸氏の他、富田義介、塚崎茂明、土屋秋實、吳無限、大槻岐美、岩倉具榮、北垣照雄の諸氏であつた。また田中虎男、大久保眞太郎、竹田浩一郎、木村廉吉の諸氏から鄭重な缺席挨拶があつた。

本研究所講習會例會

講習會も八月を休會にし、九月例會は六日夜研究所に於いて催した。フロイド全集第九卷收載の二論文「子供の嘘」及び「或る婦人同性愛者の心理」を精讀した。共に女兒の嘘であるが、如何にも女の子らしい嘘である。さうして共に父親への定着に由來してゐる。同性愛婦人の場合も、その兩親への複雜なコムプレクスから來てゐることが細かく論じてある。

鶴岡市在住特別誌友梅木米吉氏は本誌前號所載湯殿山の話を讀み、湯殿山本尊の寫眞を贈つて下さつたので、それを會員に展覽して種々研究し合つた。また塚崎茂明氏は「印度の醫術的傳說」に關する雜誌記事と挿圖とを持參せられ、所感を述べられた。日支事變の噂から戰爭神經症問題に話の花が咲いた。

出席者は右言及塚崎氏の他に北山隆、北垣照雄、延島英一、倉橋久雄、吳無限、大槻憲二、同岐美の諸氏であつた。

×

十月例會は四日夜、同所に於いて催された。

本夕は前月の會の時の續きとして「婦人同性愛」の第二節以下を精讀し終つた。譯者大槻氏も譯した同時より只今讀み返して非常に面白いと云はれた。精讀後、茶菓をとりつゝ、支那事變の話、ユダヤ人問題の話などに賑かであつた。

出席者は大槻氏夫妻の他に、北山、北垣、倉橋、延島、土屋吳、高橋、の諸氏であつた。

研究所便り

▼矢部八重吉氏は九月二十九日孫女八重子さんを喪はれました。おくやみ申上げます。八重子さんは同氏の襲名者で、從つて殊の外同氏リビドーの纏綿對象であつたさうです。悲嘆の句に曰く「八重櫻やがて白菊黃菊かな。」再生ファンタジーを表して生母を慰めたとの同氏自身の註釋。

▼九月廿四日、栃木縣佐久山町在住の特別誌友島崎勝次郎氏が御上京の序にお立ち寄り下さいました。尙、彙報欄にもあります通り研究會にも出席されました。歸鄕された後に書を寄せられました。

「……和氣靄々たる夜の例會では誌上既にお馴染みの各氏を目のあたりに見、且つ耳近く聞き非常な興味と大きな收穫を得ました。今度上京の最大のお土產でした……」云々。

▼加藤巳酉三郎氏、福島市に轉住されました、勤務の御都合であります。

▼平野弘氏、兵庫縣西宮市に轉住、これ又勤務のためとの事。

▼齊藤發智良氏、久しく救世軍療養所に入院してゐられましたが六月廿八日死去されました。本誌前號に「芭蕉の性格と幼少年時代」を執筆されましたが、計らずも絶筆となつた譯であります。自作公表を見ることなく逝かれてお氣の毒です。

なかなかいゝ頭腦の所持者でしたが、吾等同志のためには大損失でありました。深く哀悼の意を表します。嚴父齋藤忠郎氏は「愛兒の面影」と題する小册子を上梓せられ、當所へも一部寄贈せられました。御好意を深謝します。

▼本誌前號、アブフウブ欄所載「語られぬ湯殿」の寫眞を梅木米吉氏が郷里鶴岡市から御送り下さいました。誠に象徴的なものであります。何れ本誌上で改めて御紹介の時もありませう。梅木氏に厚く御禮申上げます。

▼岩倉具榮公の令弟にして濫子孃の令兄なる岩倉具方氏は、從軍畫家として上海に出張中、十月十四日午後七時、呉淞路附近で敵彈のために戰死せられました。おくやみ申上げます。

▼本年度フロイド賞贈呈銓衡方はまだ決定しませんが、もし適當なものがない場合には、或は休むことがあるかも知れません。何れ次號で御報告申上げます。

▼大槻氏の新著『現代日本の社會分析』は別項廣告の通り春陽堂から愈々出版せられました。前著『新しき立身道』を讀まれた方々は並讀して下さい。今度は社會心理學的な書であります。

▼本研究所で分析治療して貰へるかと云ふ問合せに屢々接しますが、勿論お引受けいたします。性格療治の方面には今きでにも相當の効果を上げて來ました。

質疑應答

(問) **活徑解析とは何か**。本誌前號木村廉吉氏譯稿中に「活徑解析」と云ふ術語が出て居ましたが、從來本誌で見受けない語でありますから御敎示下さい。(一讀者)

(答) 前號アレキサンダーの「精神分析學の醫學的價値」中の活徑解析と云ふ言葉に就いて、手許に文献が無かつたが爲に解説を怠りましたところ、注意深く讀んで下さる方から解答を求められまして誠に恐縮です。

活徑或は動徑と云ふ語は數學の術語で「一定點から出る線分でその位置と長さとが任意に變り得ると考へられるもの」を指します。

すなはちアレキサンダーは或る植物性器官は一定の方向を示す活徑にも比すべき、一定の動力的方向を有する衝動によつて影響され、例へば肺臟は取り込みの願望と關係があり、取り込むと云ふ欲求は贈りものを受けたい願望、子供が欲しいといふ願望、愛や心づかひが欲しいとの願望の如きいろ〳〵の心理態態の共通の動力的方向を示し、いはゞ活徑欲求であり、その共通の活徑欲求と種々な願望との關係、取り込みの器官との關係などを分析してゆく事を、活徑解析といふ數學上の術話で比喩してゐるものと思ひます。(木村)

新刊紹介

▼『西洋醫學の新傾向』ルネ・アランディ原著・櫻澤如一譯（一圓八十錢、食養會發行）――アランディに就いては本誌上では屢々紹介を試みて來たから讀者諸氏には親しみのある名となつてゐるであらう。そのアランディの主著の一つがこゝに飜譯出版せられることになつたのをまづ祝福したい。「從來精神病學者が變態、且つ輕蔑すべきものと認めてゐた材料、愛、被脅迫觀念、或は精神錯亂の如き者は、精神分析的説明に依つて微妙な、そして非常に巧妙な象徴に依つて決定せられ、明白な詩に富み、そして人類の總ての經驗に彩どられてゐるいろ／＼な構造として一つの意義と一つの價値とを持つに至つたのである。フロイドの天才的な説明法によつて人々は忘れられてゐる人類の永久の言語として無意識のいろいろな形像を發見した。それは非常に巧みな方法で、噴出する思想の清新な源泉から出た、あらゆる制限とあらゆる論理に囚はれず純粹なる天啓の學的な設計圖の上に樹立せられ個人の靈魂で明智と昏迷との『象牙と角の扉』を以つて宇宙意識に臍の緒をつないでゐる點から出てゐる。舊式精神病學者は全く無爲無能の徒であつて、斯の如き世界を見るにはその眼光が餘りに小さかつたのである。」とまでにフロイドとその精神分析とを賞揚してゐるアランディが「分析的醫學」を難じてゐるとすれば、そこに一種の矛盾を譯者は感じなかつたのであらうか。私は原文を手許に持つてゐないが、譯者が「分析醫學」と譯してゐるのは寧ろ「分化醫學」とした方がよかつたのではないであらうか。このやうな混亂をなさしめたものは氏の綜合哲學的な考へ方ではないかと思ふ。氏の身土不二の原則だの、インヨロジイなどの綜合哲學には常々あてられてゐる一人で私はあるが、さう云ふ方法で醫學や治療學のやうな技術的學問が可能であると考へることは危險である。私は譯者がも一度よくこの譯書をよみ返されることを希望したい。さうして西洋醫學に對しても批判的である如く、所謂東洋醫學に對しても批判的（只今のやうに信仰的でなく）であられむことを希望してやまない。譯文は極めて流暢である。

寄贈雜誌

『國民思想』、『コトバ』、『兒童』、『知性』、『神經質』、『英語研究』、『作品』、『生きて行く道』、『人生創造』、『カレント・オブ・ザ・ワールド』、『カスタニエン』、『科學ペン』、『東京堂月報』、『通俗醫學』、『オール女性』、『中央演劇』『母のペーヂ』、『食養』『金』『英語青年』、『南畫鑑賞』、『アルビオン』、『少年新報』、『通俗衞生』、『腦』、『雜記帳』、『ユーモアクラブ』、『傳統』、『帝國工藝』、『唯物論研究』、『產業組合時報』、『精神分析論叢』、『丁酉倫理』『日本民俗』、『社會事業』、『學藝新聞』

編輯後記

ハワイの特別誌友ドクトル菅村芳弘氏その他大勢の方々から、近來本誌の愈々充實して來たことを賞揚し、激勵の手紙を頂きましたが、本號も相當なものになつたと思つてゐます。編輯者の誠意と親切とが忽ちにして雜誌をよくして行くものであることは雜誌事業家の常に語るところでありますが、本誌編輯部も、學問への誠實と讀者への親切と云ふことを常にモツトーにして行きたいと思つてゐます。

×

新執筆者は今度はありませんでした。小山良修氏は久しぶりの御執筆でした。宮田齊氏は父君修氏長逝のあとを受けて成女學校長の重任に就かれたので、執筆が遅れ、いろ／＼讀者諸氏の期待にそむいた事を編輯部からも謝します。

×

最近の特別誌友加入者名簿は次の如くであります。近來は雜誌への反響の盛んな割に特別誌友加盟が少いやうです。

▼大阪府豐中市……中村修平殿
▼京都市…………船井平三殿
▼兵庫縣…………森島正武殿
▼八戸市…………武田彝七殿
▼東京市…………石田良大殿

なほ他の方々にもせいぜい御加盟の程願上げます。その方が相互に便利が多う御座いますから――。

×

本誌第五卷（昭和十二年度）合本は十一月末頃には出來いたします故、御申込み下さい。定價は前卷通り、金三圓、送料は十五錢であります。

特別誌友にしてこの際合本に製本方御希望の方々は、御手許の雜誌を十一月廿五日までに當所へ、返送料及び手數料として卅錢同封の上御屆け下さい。製本料と云ふものは隨分高いものであることは皆樣御存知の筈ですから、この合本引受けは當所が特別誌友諸氏への奉仕であることは、御諒解下さるところであらうと存じます。

合本は第一卷上下のみ品切、他は全部

フロイド先生 額面用肖像頒布

昭和八年春にフロイド喜壽祝祭劇を當研究所が公演しました際に、フロイド博士から本研究所に寄贈せられました大肖像畫を縮寫して、讀者諸賢にお頒ちします。その銳い眼光と、高邁な額と、力强い鼻梁とに於いて、よく碩學の性格とその學風とが象徵されてゐます。

品種――寫眞（シュムツァー原作畫。立派なものであることを信じて下さい）

用紙――上質寫眞用紙

大きさ――縱九寸五分、橫七寸五分

代價――一圓五十錢（送料共）但し特別誌友には一割引いたします。

注意――額に入れる際、裏面に新聞紙を挿入しますと印刷インキがしみて黃色くなります御注意下さい。

揃つてをりますから、御註文下さい。

單册品切の分は、第一卷では第一號、第三號、第四號、第五號。第二卷では第七號、都合五號です。單册としてあと一部宛しか殘つてゐないものには第二卷第二號（女性心理號）と第二卷第二號（宗教心理號）とがあります。御入要の方は大至急御申込下さい。

×

大槻氏の『現代日本の社會分析』は春陽堂版ですが、本研究所出版部でも、御取次ぎいたしますから遠慮なく御註文下さい。著者署名御希望の方は、その旨御申添下さい。

廣告にあります人生創造、臨時增刊號『性生活體系』も取次致します。

×

小誌の見本をくれと云つて來る人が時々ありますが、見本としての無料送附はお斷り致します。目錄希望の方々は郵税御負擔のことを御注意下さい。

×

★

次號は『夢と象徴』研究號として、この二者の興味ある關係を徹底的に究明して見たいと思ひます。

一、象徴形成の無意識心理機制……………高橋　鐵
一、夢によるナルチスムスと罪障感の自己分析……………奥本　島田
一、夢及び文學の共通象徴に就いて……大槻　憲二
一、シエークスピア『ソネット』の分析研究（ヤング）……………岩倉具榮譯
一、イデオロギーに現れた文化の不安…土屋　秋實
一、三つの夢……………大槻　岐美

その他、「ナポレオンの性格」（延島英一）は愈々佳境に入りますし、ベルグラー原著高水氏譯「女性冷感症」は一層深刻な問題に觸れて行きます。なほ計畫中のものもありますから御期待下さい。

★

昭和十二年十月二十五日印刷
昭和十二年十一月一日發行
（隔月刊）　定價　五十錢
東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯及發行　大槻憲二
東京市淺草區北三筋町五五
印刷所　三迫堂印刷所

定價一部　五拾錢
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館　北隆館・（大阪）福音社

研究所事業案内

一、分析部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歷、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絕對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〲適當の人々にふり向ける。

三、敎育部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研究會

・研究の發表とその討議を目的とす。每月一回、第三月曜夕、　　　にて開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講習會

每月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得。

一、特別誌友は司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、なるべく左記體裁の申込書を送られたし。

（御迷惑の箇所には記入を要せず。）

特別誌友申込書

住所

姓名

年齡

職業

經歷

感想

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

精神分析

半年　一圓五十錢
一年　三圓
送料共

昭和十二年三月四月　不良少年少女心理　第五卷第二號

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

精神分析

半年 一圓五十錢
一年 三圓
送料共

昭和十二年五六月 生理と心理 第五卷第三號

資料・雑話

雑報

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替東京七八八一七一番

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

精神分析

半年 一圓五十錢
一年 三圓
送料共

昭和十二年七月八月 **男性と女性** 第五卷第四號

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

フロイド精神分析學全集
全十卷全部重版完成・面目一新
定價各册平均一圓八十錢・送料十二錢

大槻憲二著

精神分析概論

増補改訂第五版出づ!! 定價八十錢・送料六錢

本書の四大特色

一、現代日本人が讀者たることを忘れてゐないこと
二、斯學の組織的知識を與へること
三、實例はみなわが國のものを擧げて興味多く說けること
四、その理論的根據につき明快にして要を得やすいこと

(口繪二葉) フロイド肖像及び筆蹟(共に著者に贈れるもの)

第一章 精神分析とは何か
(Ⅰ)無意識の發見。催眠術と精神分析(Ⅱ)夢の解釋。その方法と實例。典型的の夢。(Ⅲ)無意識と精神症、神經症。無意識の特徵。相反並存性とは。

第二章 精神分析の科學性
(Ⅰ)科學とは何か。(Ⅱ)種々な解釋の可能。(Ⅲ)解釋と認識。(Ⅳ)科學性の複雜。二者選一と無意識。(Ⅴ)重複決定。竹取物語分析。(Ⅵ)所謂科學者の偏見。

第三章 精神分析の機能
(Ⅰ)病的の心理。ナルチスムスとは。(Ⅱ)各種の理論。抑壓說。リビドー說。動力說。エディポス說。幼兒性感說。生死本能說。(Ⅲ)病氣の治療。分析と綜合。非醫者の分析。(Ⅳ)理論の應用。言語學的興味。文藝學的興味。源氏物語分析。

第四章 超心理學としての精神分析
三つの見地とその綜合。(Ⅰ)動的見地。(Ⅱ)局所的見地。(Ⅲ)經濟的見地。

第五章 精神分析の發達
(Ⅰ)シャルコー及びジャネー。(Ⅱ)フロイドの史的地位及び特徵。汎性慾說解嘲。(Ⅲ)ユング、アードラー、その他の分析學者の特徵。(Ⅳ)國際學會と研究機關。

第六章 精神分析研究手引
(Ⅰ)我が國に於ける研究史及び文獻。(Ⅱ)術語表解(索引。)

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

國語・國文學・國語教育

コトバ

十一月主題號

日本文化と國語教育

定價五拾錢（送料二錢）

國語の愛護　早稻田大學教授　五十嵐力

日本文化と國語　帝國美術學校教授　金原省吾

日本文化と國語教育　東京女高師教授　石井庄司

日本散文文體史論　法政大學教授　吉武好孝

日本語法史序說　國學院大學教授　今泉忠義

國語教材の變遷　編輯部

新日本文化の書　學界諸家

國語教室

綴方教育私見　駒澤小學校訓導　清水幸治

國語教材の綜合研究（卷八）

授業　成蹊學園訓導　滑川道夫

批判　コトバの會同人

次號豫告　**韻文の研究**

東京市牛込區原町三ノ七二　**コトバの會**　振替東京一三七九八四

田園調布驛東口際

精神分析學診療所

醫學博士 古澤平作

東京市世田谷區東玉川町一九〇

電話田園調布(102)三〇三二

V. Jahrgang, Heft 6. Nov. — Dez., 1937. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

(Hefttitel: Kleinkinderpsychologie)

Preis des Einzelheftes, 50 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag

327, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon